

筑後東部地区遺跡群VI

福岡県筑後市大字鶴田所在遺跡の調査

筑後市文化財調査報告書

第36集

2001

筑後市教育委員会

ちくごとうしづちく
筑後東部地区遺跡群VI

みぞくちきたしんがえ
溝口北新替遺跡

つるたひがうしがいけ
鶴田東牛ヶ池遺跡第1次調査

つるたひがうしがいけ
鶴田東牛ヶ池遺跡第2次調査

つるたにしうしがいけ
鶴田西牛ヶ池遺跡

つるたきやのかど つるたうしがいけ
鶴田木屋ノ角遺跡・鶴田牛ヶ池遺跡第2次調査

つるたうしがいけ
鶴田牛ヶ池第3次調査

つるたうしがいけ
鶴田牛ヶ池遺跡第4次調査

2001

筑後市教育委員会

序

本書に掲載した発掘調査は、平成9年度から10年度に行われた県営圃場整備事業筑後東部地区における緊急発掘調査であります。

筑後東部地区遺跡群の発掘調査報告書は今回で第6集を数えます。今まで多くの調査が行われた結果、数々の遺跡情報が得られ、郷土の歴史が若干ではありますが解明されてきました。先人達の文化や歴史、遺跡を保護・活用していくことが文化財行政の役割と考えておりますが、現在、開発における緊急の発掘調査の増大で遺跡の破壊、消滅を余儀なくされ、発掘調査による記録保存等によって保護することしかできないのが現状です。

しかし、発掘調査で記録保存された情報を整理して市民の方々に提供し、それを活用していただくことも私達の役割と考え、本書の作成を行いました。

また、今後は学術的な資料としても広く活用していただき、文化財の理解、普及、発展に繋がれば幸いです。

発掘調査、報告書作成に対して、関係者各位には多大のご協力を頂きましたことに厚くお礼申し上げます。

平成13年3月

筑後市教育委員会
教育長 牟田口和良

例言

1. 本書は筑後川水系農地開発事務所が平成10年度に実施した県営圃場整備事業筑後東部地区の事前調査として筑後市教育委員会が実施した埋蔵文化財調査報告書である。
2. 本書に掲載した調査の期間や調査に係わる経緯については第Ⅰ章と各調査の報告部分に記載している。
3. 発掘調査及び出土遺物の整理は筑後市教育委員会が行った。調査関係者は第Ⅰ章に記したとおりである。なお、出土遺物・図面・写真は筑後市教育委員会で収蔵、保管している。
4. 本書に使用した図面の内、遺構全体図を鶴田西牛ヶ池遺跡は朝日航洋（株）、鶴田木屋ノ角、鶴田牛ヶ池第2次調査は、アジア航測（株）、鶴田牛ヶ池第4次調査は写測エンジニアリング（株）に委託した。
その他の遺構実測図は各調査担当者、柴田剛、奥村太郎、高田知恵がを行い、遺物実測、浄書は平塚あけみ、徳永みどり、仲文恵、高田、水見秀徳が行った。
5. 本書に使用した遺構写真、遺物写真是各遺跡調査担当者と柴田が撮影した。鶴田西牛ヶ池遺跡の全體写真は朝日航洋（株）でモザイク処理により合成している。鶴田木屋ノ角・鶴田牛ヶ池第2次調査の空中写真是アジア航測（株）、その他の遺跡の空中写真是（有）空中写真企画に委託した。
6. 今回の調査に用いた測量座標は、国土調査法第Ⅱ座標系を基準としており、方位は全て座標北（G.N）である。
7. 本書に使用した遺構の表示は以下の略号による。
SI-竪穴住居 SB-掘立柱建物 SK-土壤 SD-溝 SF-道路 SP-ピット SX-ピット、不明、その他の遺構
8. 出土した金属製品の応急処置は上村英士がを行い、保存処理は太宰府市教育委員会の協力を得た。
9. 本書の各遺跡の執筆者は目次に記している。編集は上村が行った。

目次

I. 調査経過と組織	1
II. 位置と環境	3
III. 調査成果	7
1. 溝口北新替遺跡 (小林勇作)	7
(1) はじめに	7
(2) 検出遺構	7
(3) 出土遺物	8
(4) 小結	8
2. 鶴田東牛ヶ池遺跡第1次調査 (上村英士)	11
(1) はじめに	11
(2) 検出遺構	11
(3) 出土遺物	13
(4) 小結	14
3. 鶴田東牛ヶ池遺跡第2次調査 (上村英士)	15
(1) はじめに	15
(2) 検出遺構	15
(3) 出土遺物	16
(4) 小結	22
4. 鶴田西牛ヶ池遺跡 (上村英士)	25
(1) はじめに	25
(2) 検出遺構	26
(3) 出土遺物	48
(4) 小結	84
5. 鶴田木屋ノ角遺跡・鶴田牛ヶ池遺跡第2次調査 (永見秀徳)	101
(1) はじめに	101
(2) 検出遺構	102
(3) 出土遺物	108
(4) 小結	108
6. 鶴田牛ヶ池遺跡第3次調査 (小林勇作)	111
(1) はじめに	111
(2) 検出遺構	111
(3) 出土遺物	111
(4) 小結	111

7. 鶴田牛ヶ池遺跡第4次調査 (小林勇作).....	112
(1) はじめに	112
(2) 検出遺構	112
(3) 出土遺物	116
(4) 小結	120
IV. まとめ (上村英士).....	121

PLATE

I. 調査経過と組織

平成9・10年度に福岡県筑後川水系農地開発事務所から筑後市教育委員会では同年に試掘調査を実施し、開場整備工事を定地内の埋蔵文化財に係る調査を行った。協議の結果、「筑後東部地区遺跡群埋蔵文化財発掘調査」として、掘削の及ぶ排水路工事予定地、直前の削平を受け、受益者負担分調査することとなつた。埋蔵文化財発掘調査の費用については国、県からの補助を受け、受益者負担分については文化財担当部局で負担、残る費用については県水系事務所で負担することで合意した。

調査は平成9・10年度に実施し、遺物の整理及び報告については、平成11、12年度に筑後市文化財整理室で行つた。

調査組織

(平成9年度)

1) 発掘調査及び整理作業

総括	教育長	森田 基之	牟田口和良
教育部長	津留忠義	下川雅晴	
社会教育課長	山口逸郎	山口逸郎	
社会教育係長	田中清通	田中清通	
社会教育係	永見秀徳 (調査担当)	永見秀徳	
	小林勇作 (*)	小林勇作	
田中剛	田中剛	田中剛	
上村英士 (*)	上村英士 (*)	上村英士 (*)	
柴田剛	柴田剛	柴田剛	
	立石真二	立石真二	

(平成11年度)

総括	教育長	牟田口和良	牟田口和良
教育部長	下川雅晴	下川雅晴	
社会教育課長	庄村國義	庄村國義	
文化係長	田中僚一	田中僚一	
文化係	永見秀徳 (報告担当)	永見秀徳 (報告担当)	
	小林勇作 (*)	小林勇作 (*)	
上村英士 (*)	上村英士 (*)	上村英士 (*)	
柴田剛	柴田剛	柴田剛	
	立石真二	立石真二	

2) 発掘作業参加者
地元有志

3) 整理作業参加者

(整理補助員) 平塚あけみ 仲文恵
(整理作業員) 野間口靖子 馬場牧子 湯川琴美 野口暁香
 横井理絵 仲文惠 高田知恵

なお、調査及び報告書作成に際しては以下の方々にご指導、ご教示を賜った。記して心より感謝申し上げます。(順不同、敬称略)

福岡県教育厅南教育事務所 小田和利
太宰府市教育委員会 城戸康利、中島恒次郎、山村信菜、下川可容子
久留米市教育委員会 大石昇、富永直樹、園井正隆、白木守、小澤太郎
八女市教育委員会 大塚恵治、山田朗子
別府大学学生 大坪芳典
長崎外国语短期大学 木本雅康
元国学院大学 木下良
道路文化研究所 武部健一
国立奈良文化財研究所 山中敏史

II. 位置と環境

筑後市は福岡県の南西部、筑後平野の中中央部に位置する。市域をJR鹿児島本線と国道209号が縦断し、国道442号が横断する。また、市南部には一級河川の矢部川、中央部には山ノ井川や花宗川、北部には食木川が西流する。市北部には大字鷹山地から源生する八女丘陵が西に延び、海運用の溜池が点在する。

低位置平坦地である東部や、低地である前西南部には農業水路が發達している。当市は県内有数の農業地帯であり、北部の丘陵地域では果樹園や茶畠、東部や前西南部では米麥を中心の田園地帯が広がる。山地地帯は、国道に沿って市の中央部に形成されている。

以下に東部地区開拓整備事業に係わる発掘調査の遺跡一覧表を挙げる。(Tab.1)

遺跡名	調査年度	特・記	遺構の性質
柏田洋流跡第1次	平成5年度	*	発生・古墳
新庄丸田遺跡	*	柏田文・古墳	発生
柏田橋原遺跡第1次	*	中世	発生
柏田原古道跡	*	中世	発生
柏田洋流跡第2次	平成6年度	発生・古墳	発生
柏田洋流跡第3次	*	発生・古墳	発生
久留野元遺跡第1次	*	中世	発生
久留野元遺跡第2次	*	発生・古墳・近世	発生
柏田洋流跡第4次	*	発生・古墳	発生
新庄松原遺跡	*	中世	発生
久留野舊跡第1次	平成7年度	発生・古墳	発生
久留北寺跡跡	*	発生・古墳	発生
久留内次原遺跡第1次	*	発生	発生
柏田武隈遺跡	*	中世	発生
柏田原遺跡第2次	*	中世	発生
久留岸ノ下遺跡第1次	*	中世	発生・土塁
久留岸ノ下遺跡第2次	*	中世	発生
久留南下遺跡第2次	*	中世	発生
久留上川原遺跡	*	柏田文・中世	発生
久留川ノ上遺跡	*	中世	発生
久留内次原遺跡第2次	*	発生・近世	発生
久留中野遺跡	*	柏田文・古墳	発生
久留原停道跡	*	中世	土塁
柏田西田遺跡	平成8年度	小明	溝
柏田東大坪遺跡第1次	*	柏田文・中世	発生・土塁、堆積
柏田野山遺跡	*	古墳	古墳
柏田野山遺跡	*	不明	発生
西口北野原遺跡	平成9年度	中世	発生
久留北水原遺跡	*	発生	発生
久留今町遺跡	*	中世	発生・古文化
新庄丸山遺跡	*	瓦質	瓦質
柏田東大坪遺跡第2次	*	古墳	古墳
柏田原代遺跡	*	瓦質	瓦質
柏田原牛ヶ池遺跡第1次	*	瓦質	瓦質
柏田原牛ヶ池遺跡第2次	*	瓦質	瓦質
柏田牛ヶ池遺跡第1次	*	柏田文・近世	土塁
柏田牛ヶ池遺跡第2次(柏田木村ノ内遺跡)	*	柏田文・近世	瓦質
柏田牛ヶ池遺跡第3次	*	柏田文・近世	瓦質
柏田牛ヶ池遺跡第4次	*	柏田文・近世	柏田文・近世
柏田西牛ヶ池遺跡	*	発生	柏田文・近世

Tab.1 地域整備事業に係わる筑後東部地区発掘調査(平成10年度まで)





	道跡名
1	瑞王寺古墳
2	田佛道跡
3	藏教東野所敷道路
4	石人山古墳
5	弘化谷古墳
6	藏教坂上木道跡
7	藏教森ノ木道跡
8	久富島居道跡
9	矢塚古墳
10	前津中ノ玉道跡
11	四ヶ所古四ヶ所道跡
12	羽犬塚ノ道道跡
13	羽大塚射場ノ本道跡
14	若菜森坊道跡
15	長崎坊田道跡
16	徳久中牟田道跡
17	常用長引ノ日田行道跡
18	裏山道跡
19	鶴田岸添道跡
20	新溝丸田道跡
21	鶴田橋原道跡
22	鶴田前畑道跡
23	久惠野元行道跡
24	新溝松原道跡
25	久恵稚見道跡
26	久恵北草場道跡
27	久恵内次郎道跡
28	鶴田武津彦道跡
29	久恵岸ノ下道跡
30	久恵川ノ上道跡
31	久恵中野道跡
32	鶴田西田道跡
33	鶴田東大坪道跡第1次
34	鶴田西畠道跡
35	鶴田野田道跡
36	久恵北水原道跡
37	久恵今町道跡
38	新溝大字道跡
39	鶴田溝代道跡
40	鶴田東大坪道跡第2次
41	溝口北新替道跡
42	鶴田牛牛池道跡
43	鶴田牛牛池道跡
44	鶴田木屋ノ角道跡
45	鶴田西牛ヶ池道跡

Fig.2 周辺道跡分布図 (1/30000)

III. 調査成果

1. 溝口北新替遺跡

(1) はじめに (Fig.3)

当遺跡は、筑後市大字溝口字北新替に所在し、一帯は水田地帯で標高17.0m位の低位段丘上にある。調査は、平成9年度に施工された県営は場整備事業筑後東部地区9工区の支線用排水路設置範囲において、遺構を確認した239m²を対象とした。調査は平成9年9月に実施し、重機による表土除去、遺構の検出、掘削、実測、写真撮影等を行った。調査は小林勇作が担当した。

調査の結果、調査区からは溝等を検出し、以下はその成果について報告する。



(2) 検出遺構

溝

SD05 (Fig.4)

調査区南部で検出した東西方向の溝で、25.5m分を検出した。溝の断面形は逆台形状を呈し、深さは0.6~0.8mを測る。黒茶色粘質土を基調とした埋土で、土層状況からは、少なくとも3回以上の掘り直しが行われていることが確認された。遺物は須恵器(壺)、土師器(壺・碗・片)、瓦質土器(片)が出土している。

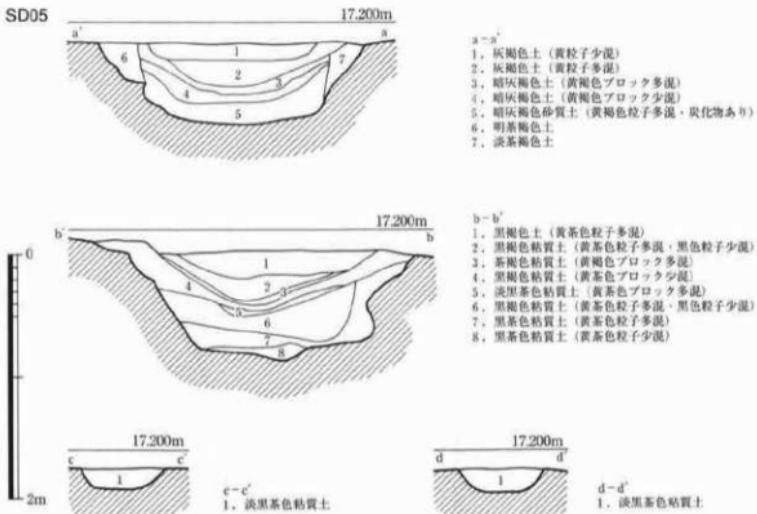


Fig.4 溝土層断面実測図 (1/40)

SD10 (Fig.4)

東西方向にはしる溝で、20.0m分を検出した。溝の断面形は逆V形状を呈し、深さは0.20m前後を測る。埋土は淡黒茶色粘質土の單一層で、出土遺物は土師器（片）を僅かに認めたが図示し得るものではなかった。

(3) 出土遺物

SD05 (Fig.5)

須恵器

甕 (1) 甕の体部細片で、外面には正格子、内面には平行の叩き文が施される。胎土は5mm大の小石と黒色粒子を含み焼成はほぼ良好である。

土師器

杯 (2) 口径12.0cm、底径8.0cm、器高3.5cmを復原し、口縁端部はやや外反する。表面は著しく磨耗しているが、内外面の口縁部及び体部はヨコナダ、体部下位は回転ヘラケズリ、底部外面は回転ヘラ切りが看取できる。

(4) 結

工事の都合上、トレンチ状の調査区設定となり、調査区からは溝2条の遺構が確認された。

今回、検出された溝からは出土遺物が乏しく、時期決定に至ることはできない。また、当遺跡周辺部（北へ約140m）に所在する久恵北水原遺跡からは南北溝5条が確認されているが、この調査においても当遺跡同様に各溝の時期決定までは至っていない。この地区に関しては集落跡等の生活の匂いのする遺構は確認されておらず、また、確認された溝の性格（流路・用水路・区画溝等）を考慮すると水田用地として活用され続けていた地区であったことが想定される。

今後の調査に期待するところである。

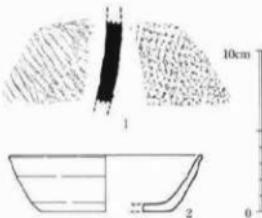


Fig.5 SD05出土土器実測図 (1/3)

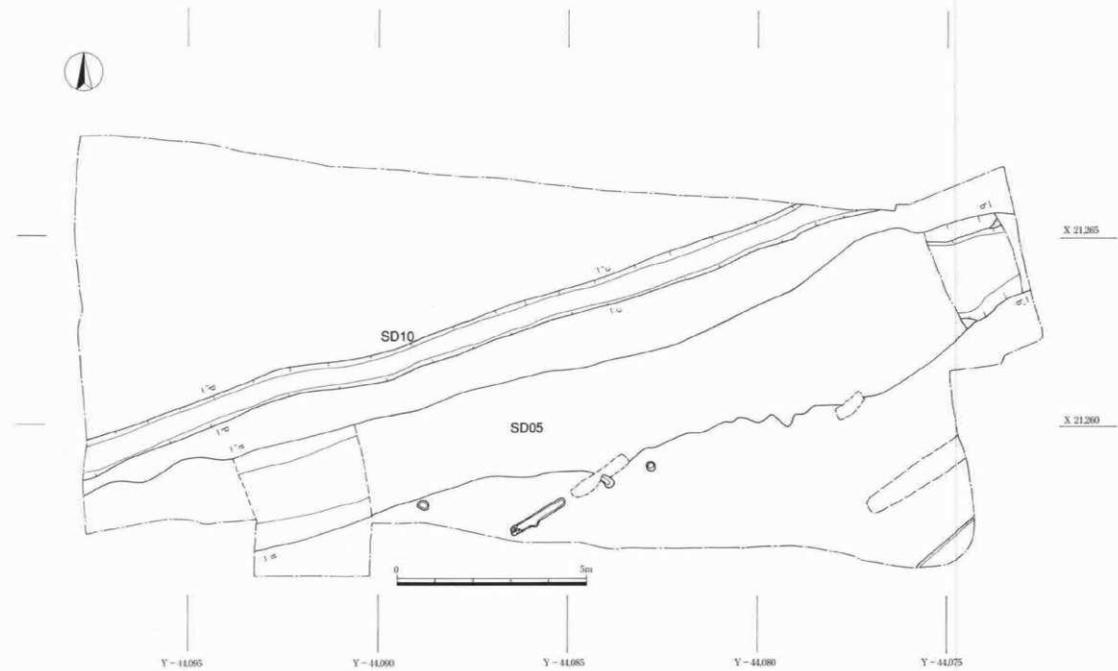


Fig.6 溝口北新替遺跡遺構全体実測図 (1/100)

2. 鶴田東牛ヶ池遺跡第1次調査

(1) はじめに

鶴田東牛ヶ池遺跡第1次調査地は筑後市大字鶴田字東牛ヶ池に所在する。県営圃場整備事業筑後東部地区第12工区について試掘調査を行った結果、掘削の及ぶ面と排水路について遺構を検出した為、本調査を行うこととなった。調査対象面積は約1200m²、調査期間は平成10年9月18日から10月9日迄である。発掘調査は上村英士が担当した。

調査地は標高約12m程の台地上に立地しており、現況は葡萄畠であった。遺構上面は淡茶褐色土、明茶褐色土が約40cm程堆積し、その下は黄褐色粘質土の地山となる。遺構はこの地山に切り込む形で検出された。

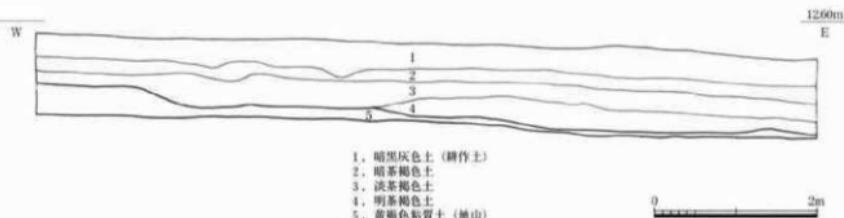


Fig.7 鶴田東牛ヶ池遺跡第1次調査 西北隅土層観察 (1/60)

(2) 検出遺構

土壤

1SK001 (Fig.8, Pl.2)

調査区中央で検出された略円形の土壙である。検出最大幅約2.25m、深さ約0.29mを測る。出土遺物は尖底の鉢と考えられる縄文土器底部片を1点出土している。壙底に5つのピットを確認した。

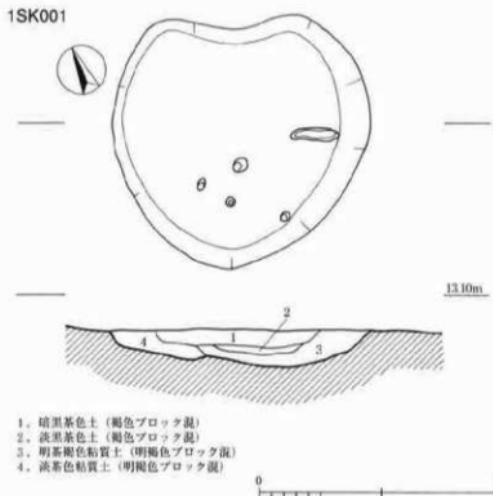
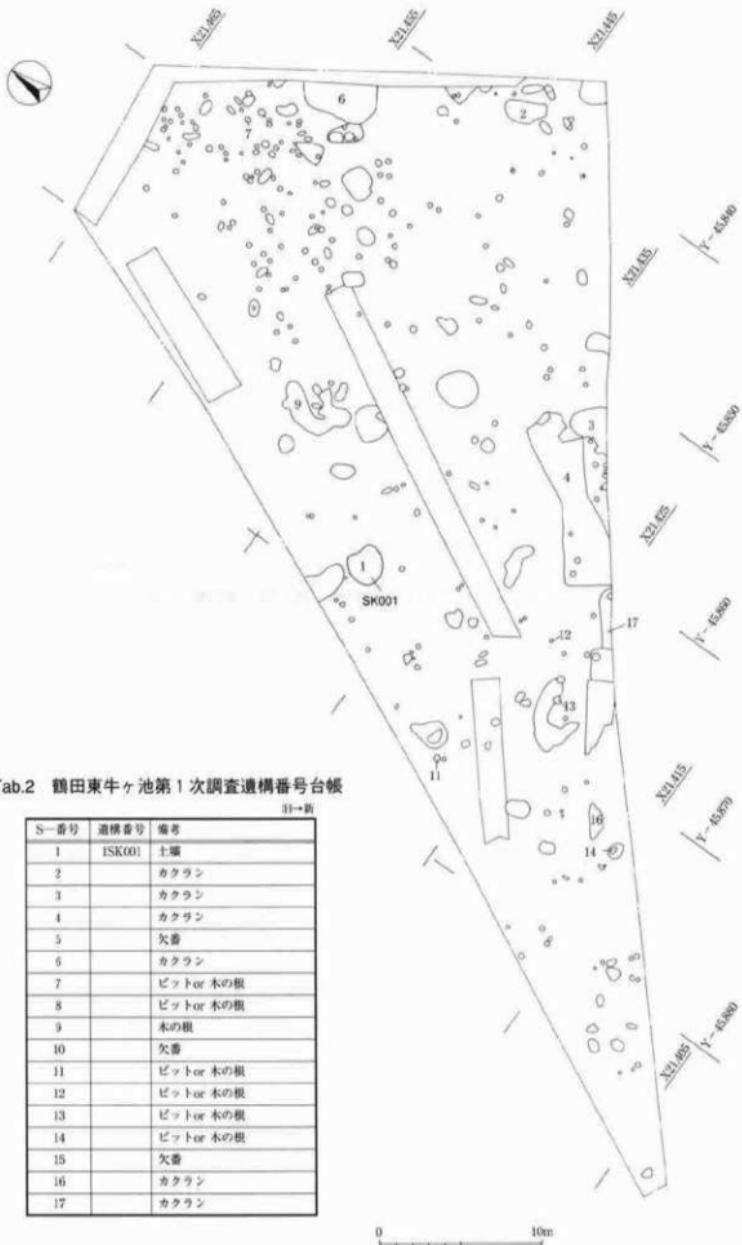


Fig.8 鶴田東牛ヶ池遺跡 1SK001遺溝実測図 (1/40)



Tab.2 鶴田東牛ヶ池第1次調査遺構番号台帳

Fig.9 鶴田東牛ヶ池第1次調査遺構全体図（1/300）

(3) 出土遺物

1SK001 (Fig. 10, Pl.34)

柵文土器 (1) 底部破片である。外面淡褐色、内面淡灰褐色を呈する。胎土に角閃石を含む。実底であり、早期の中でも古い時期のものではないか。

その他の出土遺物 (Fig. 10, Pl.34)

ここに掲載する遺物は、検出したピットや焼乱からの出土遺物であるが、ピットについては包含層の取り残しや木の根であると考えられ、あえて遺構番号を与えていない。S番号は略調査の番号である。

S-4 (Fig. 10, Pl.34)

不明製品 (2) 土胎質の人物片と考えられる。内外面ともに淡褐色を呈し、胎土はよく燒成されている。焼成は良好である。

S-7 (Fig. 10, Pl.34)

石器 (3) 黒曜石製の石器で、先端と両側を欠損している。

S-9 (Fig. 10, Pl.34)

柵文土器 (4~6) 4は口縁部のみの資料で、外面が灰茶褐色、内面が灰褐色を呈する。胎土に角閃石を含み、小砂粒を含む。5は脚部破片で外面上に格子目の押型を施している。6は口縁部資料で口縁端部が欠損している。外面に格子目の押型を施す。4、5、6は同一個体の物と考えられる。

S-12 (Fig. 10, Pl.34)

柵文土器 (7) 脚部細片で、外面に格円文の押型を施す。外面は茶褐色、内面は灰褐色を呈する。小砂粒を含む胎土で焼成はやや良好である。

茶褐色土 (遺構上面の包含層出土遺物) (Fig. 10, Pl.34)

石製品

剥片 (8) 黒曜石の剥片である。現存長3.1cm、幅4.5cmを測る。

柵文土器 (9~11) 9は口縁部破片である。口縁部が外反し、外

面に大型の指円文を施し、内面は輻方向に条痕を施す。胎土には角閃石と小砂粒を含む。10は脚部細片で、外面に小型の指円文を斜め方向に施す。内外面ともに黄褐色を呈する。11は脚部片で、外面に格子目の押型を施し内面をナメで仕上げる。角閃石と小砂粒を含み、焼成は良好である。



Fig. 10 鶴田牛ヶ池遺跡第1次調査 出土遺物 (1~11) 土器1/3・石器1/2

(4) 小結

鶴田東牛ヶ池第1次調査では遺構として捉えられるものに限りがあったが、遺物は遺構や包含層から押型文土器を中心に資料を得られた。SK001出土遺物については本文中に述べているとおり、尖底と考えられる遺物で早期の古い段階に位置づけられるのではないか。包含層中他の押型文土器の施文については比較的大型の指円文が斜位に施されており、早期の中でも新しい段階のものではないか。また、格子目の押型が施されたものが3点出土しており、市内出土の押型文土器の中で当遺跡では出土頻度としては高い方である。

Tab.3 鶴田東牛ヶ池遺跡第1次調査出土遺物一覧表

S-番号	種別	器種
1	縄文土器	鉢
2	石製品	不明
3	土師器	甕口縁
4	縄文土器	鉢
	土師器	片
	陶器	片
	土製品	人形片?
6	縄文土器	鉢
	石製品	黒曜石測片
7	石製品	黒曜石石器
8	土師器	片
9	縄文土器	鉢
11	土師器	片
12	縄文土器	鉢
13	土師器	片
14	土師器	片
16	土師器	片
17	鉢	乗付片

Tab.4 鶴田東牛ヶ池遺跡第1次調査遺物観察表

【単位(cm), *は復原値, +は欠損】

遺構	Pig	番号	名稱	器種	R番号	口径	器高	底径	備考
SK001	10	1	縄文土器	鉢	001				底部片
その他の									
S-4	10	2	土師器	人形片	001				小片
S-7	10	3	石製品	石器	001				黒曜石
S-9	10	4	縄文土器	鉢	001				口縁部小片
*	10	5	*	*	002				胸部片
*	10	6	*	*	003				口縁部片
S-12	10	7	縄文土器	鉢	001				胸部片
系褐色土	10	8	石製品	測片	001				黒曜石
表土	10	9	縄文土器	鉢	001				指円文
*	10	10	*	*	003				胸部片
*	10	11	*	*	002				格子目

3. 鶴田東牛ヶ池遺跡第2次調査

(1) はじめに

鶴田東牛ヶ池遺跡第2次調査地は筑後市大字鶴田字東牛ヶ池に所在する。県営圃場整備事業筑後東部地区第12工区について試掘調査を行った結果、掘削の及ぶ面について遺構を検出した為、本調査を行うこととなった。調査対象面積は約3000m²、調査期間は平成10年10月9日から10月30日迄である。発掘調査は上村英士が担当した。

調査地は鶴田東牛ヶ池遺跡第1次調査の西隣地である。基本土層は1次調査と同じであるが、葡萄棚の基礎等で遺構面の多くは破壊を受けていた。

(2) 検出遺構

竪穴住居

2SI010 (Fig.11, 12, Pl.5, 6)

調査区北端で検出した竪穴住居である。検出東西長約2.9m、南北長約4.45m、床面深さは約0.09mの長方形プランを呈する。埋土には住居の建材と考えられる炭化した木片を検出している。住居中央には石が組まれており、炉の役目を果たした可能性を考えられる。また、北東隅にはベッドが存在した痕跡が見受けられ、南壁際には屋内土塙が掘られている。出土遺物は縄文土器、土師器甕、瓶、壺、ミニチュア土器、焼土、黒曜石剥片、屋内土塙からは弥生土器壺、不明石製品が出土している。

2SI010

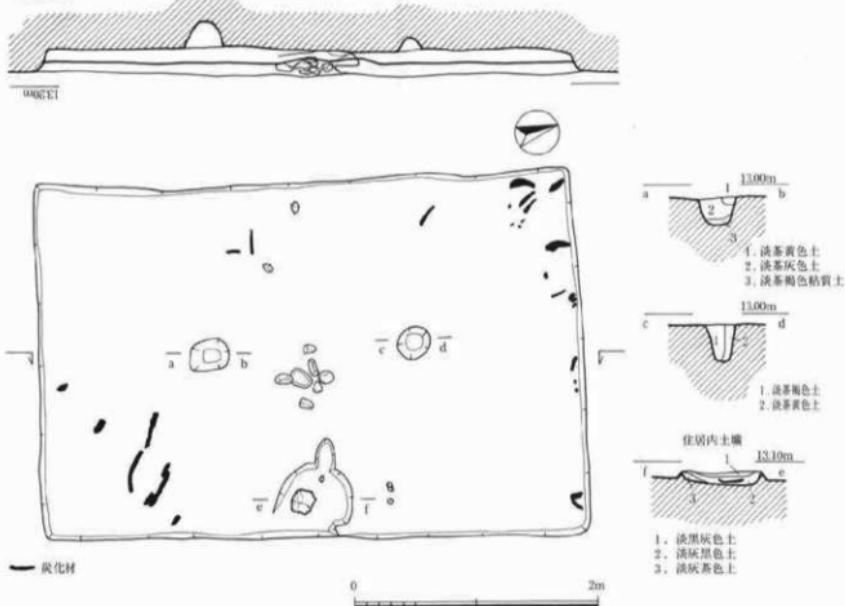


Fig.11 2SI010遺構実測図 (1/40)

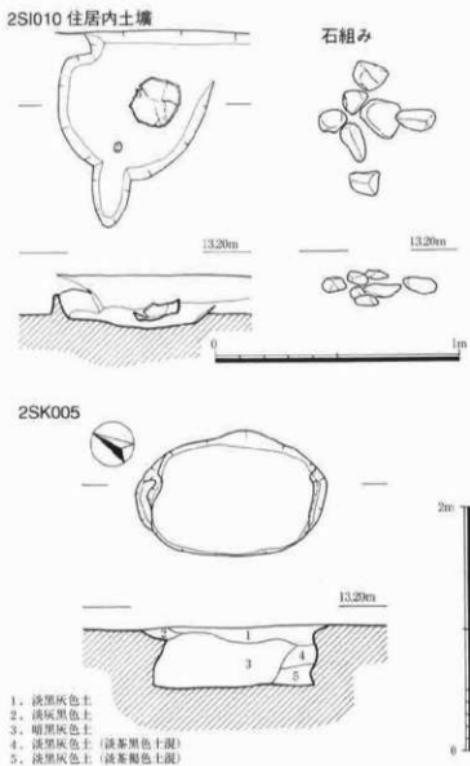


Fig.12 2SI010住居内土壤、石組み、2SK005実測図 (1/20・1/40)

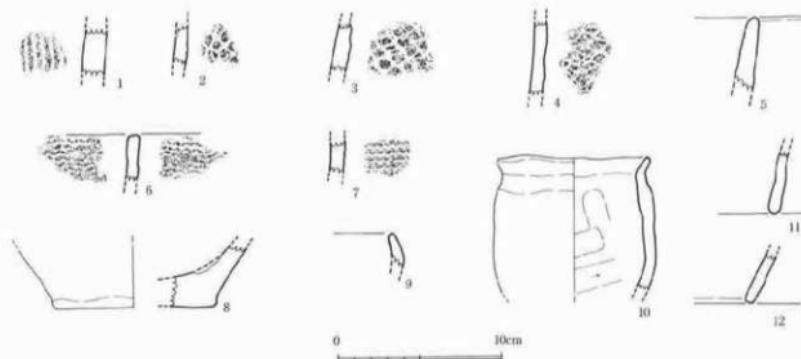


Fig.13 2SI010出土遺物① (1/3)



Fig.14 鶴田東牛ヶ池遺跡第2次調査遺構全体図 (1/300)

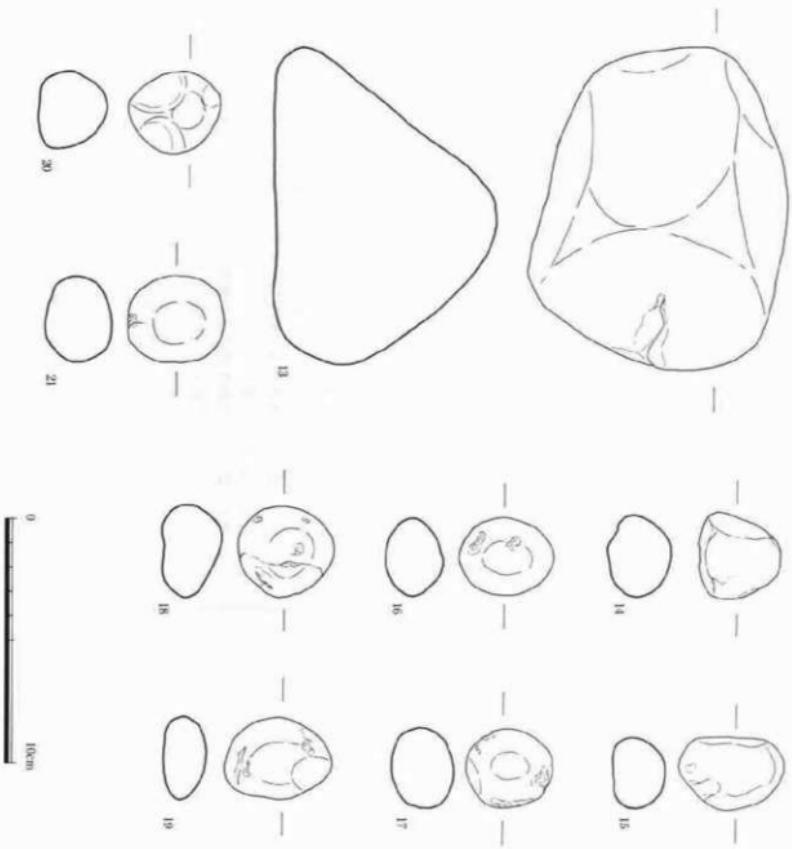


Fig.15 2S1010出土遺物② (1/2)

石製品 (13~21) 13は住居中央の石組みの一つで花崗岩である。2次的に火を受けており、赤褐色を呈している。14~21は不明石製品でいずれも花崗岩である。加工痕はないが法量が同様であることや、住居床面に程近い部分から出土しており、生活用具の可能性がある。

2S1010住居内土器 (Fig.16・17, Pl.6)
土師器 (22) 平底の壺で、底径9.0cmを測り、残存器高は20.2cmである。器厚は約0.6cm程度である。
石製品 (23) 住居覆土から出土の (14~21) 石と同様で、花崗岩である。

その他の出土遺物 (Fig.18, Pl.36)

ここに掲載する遺物は、検出したピットや焼乱から出土遺物であるが、ピットについては包含層の取り残しや木の根であると考えられ、あえて遺構番号を与えていない。S番号は略調図の番号である。茶褐色土は包含層、トレンチは試掘時の出土遺物である。

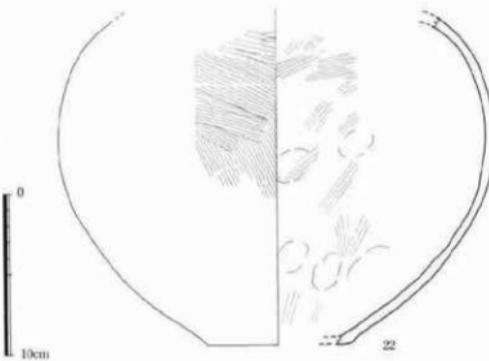


Fig.16 2SI010住居内土壤出土遺物 (1/3)

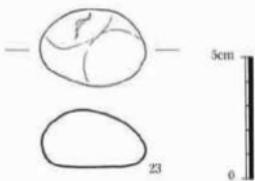


Fig.17 2SI010住居内土壤出土遺物 (1/2)

S-2 (Fig.18, Pl.36)

縄文土器 (24) 口縁部の破片で、直線的に立ち上がり、端部は比較的丸く仕上げられる。内面はナデられ、外面に楕円文の押型がほぼ横方向に施される。胎土には多量の角閃石を含む。

S-3 (Fig.18, Pl.36)

縄文土器 (25) 外面を楕円文の押型がほぼ横方向に施される。内面はナデられ、器壁は13mmと厚い。胎土には多量の角閃石を含む。

S-12 (Fig.18, Pl.36)

須恵器 (26) 壺の肩部片で外面上位にヘラ削り、下位にヨコナデの調整が残り、内面はヨコナデ。焼成は良好で内面は淡緑灰色、外表面は淡青灰色である。

S-17 (Fig.18, Pl.36)

陶磁器 (27) 白磁の紅皿。口径4.2cm、器高1.5cm、底径0.8cmを測る。内面と外面上部に淡緑白色の釉がかかる。

茶褐色土 (Fig.18, Pl.36, 37)

縄文土器 (28~40) 押型文土器で、胎土に角閃石が多く入る。28~34は外面に山形文が施され、内面はナデ。施文方向は横位か若干斜位になる。35~40は楕円文が施された押型文土器で、35・36は口縁部片で、端部を丸く仕上げる。楕円文は比較的小さく35は斜位に、36は横位に施す。37~40は楕円文を施した押型文土器で、37は小型、38~40は大型の楕円文であり、内面はナデ。施文方向は38・40が横位、他が斜位である。

陶磁器 (41) 緑釉の陶器皿である。底径4.4cmを測る。内面に深緑の釉を施し、見込みを蛇目に釉をかけ取り、目跡が残る。外面上には白緑色の釉が高台外まで施される。

石製品 (42) 黒曜石の剥片である。剥離面の風化が著しく古い時期のもの可能性がある。

トレンチ (Fig.18, Pl.37)

縄文土器 (43~48) 43は外面に山形文が施される。施文は横位で内面はナデ。44~47は楕円文の押型が施され、46は楕円が小型で横位に施文される。47は口縁部片で、かなり外反し、壺になる可能性が考えられる。楕円は大型であるが横位に施文する。内面は横方向にナデる。48は底部片で平底である。底径7.2cmを測る。外面に山形文が施され、内面はナデである。

石製品 (49) 結晶片岩製の石包丁である。紐穴の芯心距離は推定で2.6cm、背まで1.7cmを測る。

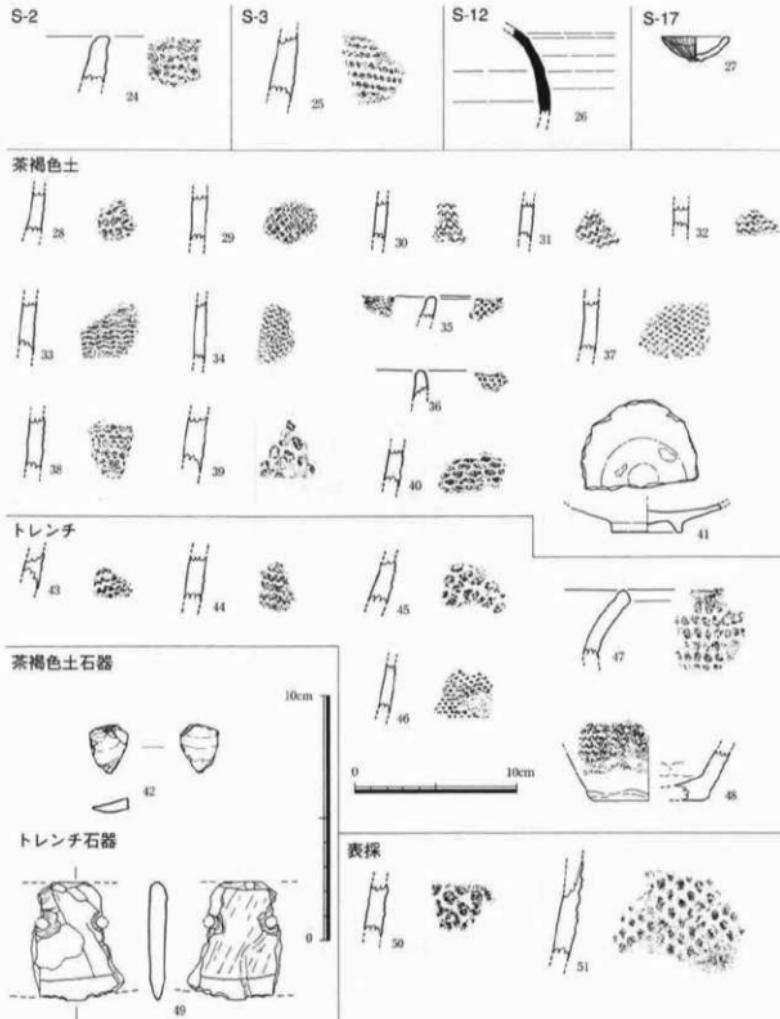


Fig.18 その他の出土遺物（土器1/3、石器1/2）

表探 (Fig. 18, Pl. 37)

縄文土器 (50~51) 外面に大型の楕円文を施す押型文土器で内面はナデである。施文方向は斜位である。胎土に多量の角閃石を含む。焼成はやや不良である。

(4) 小結

鶴田東牛ヶ池遺跡第2次調査は1次調査に隣接した調査で標高12m程の台地上に形成されている。周辺地形を見ると、2次調査西側と北側は標高9m程の谷状地形になっており、推定古代官道が南北に走る。1次調査東側と南側には鶴田地区の集落が残る。

今回の調査では堅穴住居1棟、土壙1基を主な遺構として検出しているが、1次調査の遺構と合わせても面積に対して遺構検出数は少ない。遺構の密集地は調査地点から南東に存在する東部地区遺跡群(筑後市第11集、27集)に展開するものと考えられる。以下、堅穴住居に関して若干所見を述べる。

検出した堅穴住居は長軸を南北にとり、ベッド状遺構、住居内土壙を設置しており覆土には建材と考えられる炭化物を検出している。住居規模と施設、出土遺物から考えると古墳時代に該当するであろう。しかし、特異なものとして住居中央で検出された石組みの存在である。住居北側は鶴田牛ヶ池第1次調査が行われており、数十基の縄文早期の石組み炉を検出している。石材や組み方については、ほぼ同様であり、検出レベルもほぼ同様である。石組み自体も2本柱の中心線から東に若干ずれており、住居と石組みの関係については興味深い資料となる。

Tab.6 鶴田東牛ヶ池遺跡第2次調査出土遺物一覧表

S-番号	種別	器種
2	縄文土器	鉢
	土師器	甕、高环
3	縄文土器	鉢
4	石製品	黒曜石剥片
6	縄文土器	鉢
7	土師器	片
8	土師器	片
	石製品	黒曜石剥片
10	縄文土器	鉢
	弥生土器	織底部
	土師器	甕、瓶、鉢、环
	石製品	不明品
	その他	燒土
11	石製品	黒曜石剥片
12	須恵器	瓶片
13	土師器	片
14	土師器	片
16	土師器	片
	石製品	黒曜石剥片
17	磁器	紅皿
	石製品	黒曜石剥片
18	土師器	片
トレンチ	縄文土器	鉢
	土師器	甕片
	磁器	白磁、染付
	陶器	片
	石製品	石包丁、黒曜石剥片
		サヌカイト片
カクラン	土師器	片
茶カツ土	磁器	染付片
—	陶器	片
	石製品	黒曜石剥片
表探	縄文土器	鉢
	陶器	片
	石製品	黒曜石剥片
		サヌカイト片

Tab.7 鶴田東牛ヶ池遺跡第2次調査遺物觀察表

【单位:cm. *は復原品、+は大き目】

通 緒	形 状	名 称	色 相	玉串	器 高	底 径	残 存 有 無	考
25010	13	1 網文土器	深	301		網紋片		網紋片 内面無釉
	13	2			301		網紋片	
	13	3	*		301		網紋片	網印文
	13	4	*		305		網紋片	網印文
	13	5	*		301		網紋片	
	13	6	*		306		網紋片	山形文
	13	7	*		304		網紋片	
	13	8	*		301		網紋片	山形文
	13	9 土陶器	4-9		302		網紋片	
	13	10	*		301		小片	1/3
	13	11	*		303		小片	
	13	12	*		302		瓦	
	13	13 石製品	在網片		313		穿孔石	穿孔石
	13	14	*		305		*	不明石製品
	13	15	*		306		*	不明石製品
	13	16	*		307		*	不明石製品
	13	17	*		310		*	不明石製品
	13	18	*		311		*	不明石製品
	13	19	*		312		*	不明石製品
	13	20	*		309		*	不明石製品
	13	21	*		302		*	不明石製品
25000105641上層	16	22 土陶器	深	301	302	303	1/6	
	17	23 石製品	在網片		302		瓦	不明石製品
今切地								
S-2	18	24 網文土器	深	301		網紋片		網紋片
S-3	18	25 網文土器	深	301		網紋片		網印文
S-12	18	26 網文土器	深	301		網紋片		
S-17	18	27 白磁	浅	301	6.8	1.5	1/3	
高輪鉢	18	28 網文土器	深	307		網紋片		山形文
	18	29	*		309		網紋片	山形文
	18	30	*		301		網紋片	山形文
	18	31	*		304		網紋片	山形文
	18	32	*		303		網紋片	山形文
	18	33	*		305		網紋片	山形文
	18	34	*		306		網紋片	山形文
	18	35	*		311		網紋片	山形文
	18	36	*		312		網紋片	山形文
	18	37	*		310		網紋片	網印文
	18	38	*		302		網紋片	網印文
	18	39	*		313		網紋片	網印文
	18	40	*		301		網紋片	網印文
	18	41 鉢	深	301		網紋片		
トウカナ	18	42 石製品	網片	314		網紋片		
	18	43 網文土器	深	305		網紋片		山形文
	18	44	*		303		網紋片	
	18	45	*		301		網紋片	網印文
	18	46	*		304		網紋片	網印文
	18	47	*		302		網紋片	網印文
	18	48	*		301		網紋片	山形文
	18	49 石製品	石丸	302		網紋片		小片
鉢	18	50 網文土器	深	301		網紋片		網印文
	18	51	*		302		網紋片	網印文

4. 鶴田西牛ヶ池遺跡

(1)はじめに

鶴田西牛ヶ池遺跡は筑後市大字鶴田字西牛ヶ池に所在する。県管轄場整備事業後東部地区第12工区について試掘調査を行った結果、掘りの及ぶ面と排水路について遺構を検出した為、本調査を行うことになった。調査対象面積は約2400m²、調査期間は平成10年12月18日から平成11年3月30日迄である。発掘調査は上村英士が担当し、柴田剛の協力を得た。調査地の鶴田西牛ヶ池遺跡は鶴田牛ヶ池遺跡第2次調査区の西側台地上に展開する。基本土層(Fig.19)は耕土下の淡茶褐色土に堅穴住居跡等が切り込み形で検出され、地山は明黄色褐色粘土質である。図面の内、遺構全体図は実掘時の航空測量図を用い、個別遺構図は手測りによる実測図である。赤色ラインは貼り床下のラインである。

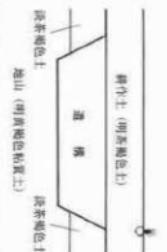


Fig.19 基本土層模式図

番号	遺構番号	種類	基	II-1
1	S001	堅穴	90	S000
2		クラン	91	ビット S005
3		ビット	92	ビット S010 51→50
4		堅穴通路	93	ビット S0125 52→50
5	S006	カラン	94	S005
6		カラン	95	ビット S0125
7		カラン	96	ビット S0125 57→50
8		ビット	97	S0125
9		カラン	98	ビット S0110
10	S009	堅穴通路	99	ビット
11	S0011	ビット	100	S009
12		ビット	101	S010 ビット
13		ビット	102	クラン
14		ビット	103	クラン
15	S0015	堅穴通路	104	ビット
16		ビット	105	S0105
17		カラン	106	ビット S0125 カラン
18		ビット	107	クラン
19		ビット	108	クラン
20	S0039	堅穴通路	109	クラン
21		ビット	110	S010 堅穴通路
22	S002	ビット	111	クラン
23		ビット	112	ビット 不明遺構
24		ビット	113	S0113 ビット
25	S005	堅穴通路	114	ビット
26		ビット	115	クラン
27		ビット	116	S0116 ビット 101→100
28		ビット	117	S0117 不明遺構
29		ビット	118	クラン
30	S000	堅穴通路	119	クラン
31		ビット	120	S0120 堅穴通路
32	S002	ビット	121	ビット 不明遺構
33		ビット	122	ビット
34		ビット	123	クラン
35	S005	堅穴通路	124	クラン
36	S009	ビット	125	S0125 堅穴通路
37		ビット	126	S0126 ビット
38		ビット	127	S00010 ビット
39		ビット	128	ビット 128→105
40	S000	堅穴通路	129	ビット
41		ビット	130	充填
42		ビット	131	クラン
43		ビット	132	ビット
44		ビット	133	クラン
45	S005	堅穴	134	ビット
46		クラン	135	ビット
47	S007	ビット	136	ビット

Tab.9 鶴田西牛ヶ池遺跡遺構号台帳

(2) 検出遺構

竪穴住居

SI001 (Fig. 20, Pl. 9) 検出住居の中では最も東に位置する。検出南北長軸約4.65m、東西長約3.55m、床面深さ約0.15mを測り、長方形のプランを呈する。主軸はN-33°-E。住居中央には炉と考えられる遺構を検出したが、炭化物などは確認していない。埋土は淡黒灰色土。南壁際には住居内土壤が掘り込まれ、小型の鉢が完形で出土。埋土は淡灰黒色土。住居柱穴は確認されなかった。住居覆土から壺型土器片、高坏型土器片、黒曜石剥片、床面下から壺型土器小片を出土している。

SI010 (Fig. 23, Pl. 10~12) 調査区中央に位置する大型の住居である。検出東西長約5.9m、南北長約4.5m、床面深さ約0.27mを測る隅丸長方形のプランを呈する。主軸はN-71°-E。住居内四隅にベット状遺構を検出し、ベッドは地山削りだしに若干の整地をして形成している。また、中央に炉跡を検出し、柱は四本柱である。南壁際には住居内土壤を掘り込んでいる。床面検出時、投げ込まれた石によって土器が破損された状況と、赤褐色粘土と高坏型土器と不明土製品（土製支脚？）を検出している。このような赤褐色粘土や不明土製品は他の住居では全く確認されず、炉跡以外にもかなりの範囲で焼土を検出していることから祭儀的行為が行われた可能性が考えられる。遺物は住居覆土から壺型土器片、鉢型土器片、高坏型土器片、器台型土器片、壺型土器片、土師器灯明皿片、坏片、染付皿片、陶器擂鉢片、砥石を出土した。住居内土壤からは壺型土器底部片を出土している。床下からは壺型土器片を出土。

SI 001

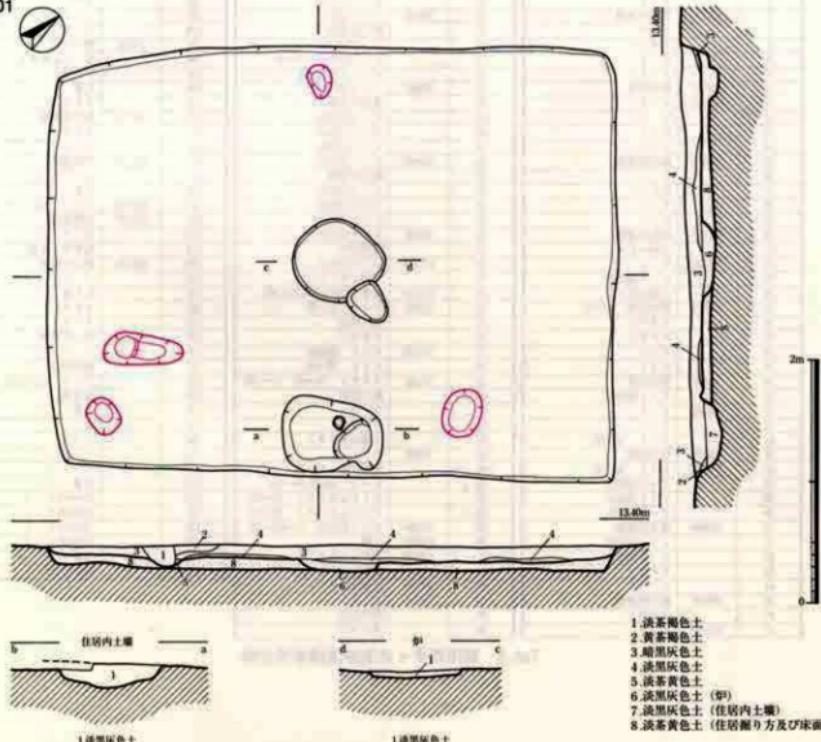


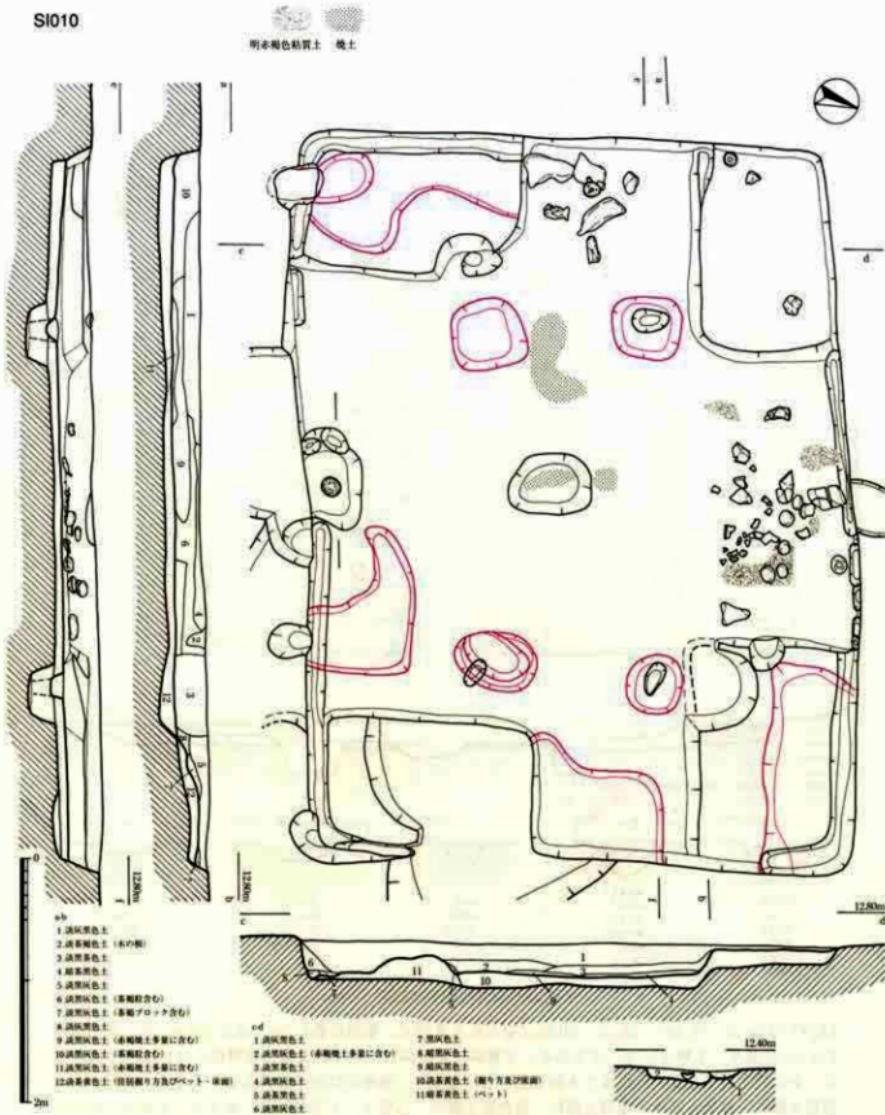
Fig.20 SI001遺構実測図 (1/40)



Fig.21 鶴田西牛ヶ池遺跡略測図 (1/200)



Fig.22 鶴田西牛ヶ池遺構全体図 (1/200)



SI025 (Fig.24, Pl.13) 調査区西端に位置し、SI030を切る。検出南北長約3.1m、東西長約5.7m、床面深さ約0.2mを測り、主軸はN-78°-Eである。東西にベッド状造構を検出し、南壁際には住居内土壤を掘る。中央に炉跡を検出したが、炭化物等は確認していない。また、東西に2本柱穴を検出している。遺物は住居覆土から壺型土器片、甕型土器片、鉢型土器片、高環型土器片、器台型土器片、ミニチュア土器、鉄製錠、メンコ状土製品、土製柄杓片、不明石製品、床面から甕型土器片、不明石製品、床下から甕型土器片、炉跡から土器小片、住居内土壤から鉢型土器片を出土している。

SI025

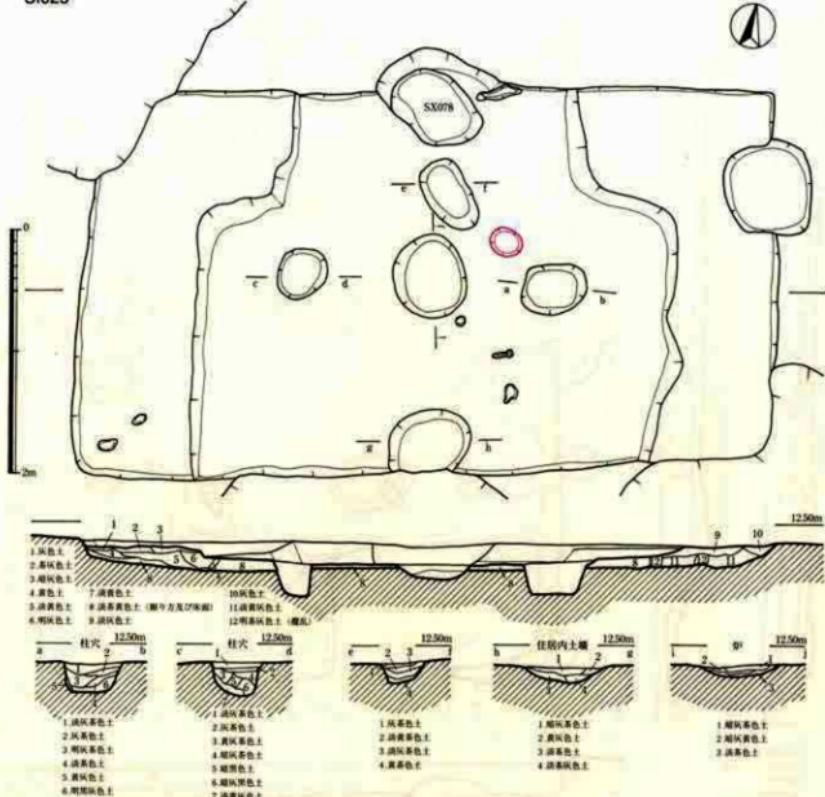


Fig.24 SI025造構実測図 (1/40)

SI030 (Fig.25, Pl.14) SI025・SI085に切られる住居で、東西長約4.7m、南北長約6.1m、床面深さ約0.2mを測り、主軸はN-30°-Eである。北東隅と南西隅にベッド状造構、南壁際には住居内土壤を掘る。炉は検出していない。柱は2本柱で掘り方は布掘り、壁際には壁小溝が巡る。遺物は住居覆土から甕型土器片、鉢型土器片、壺型土器片、器台型土器片、石包丁、不明石製品、床下から土器片、住居内土壤から土器片を出土している。

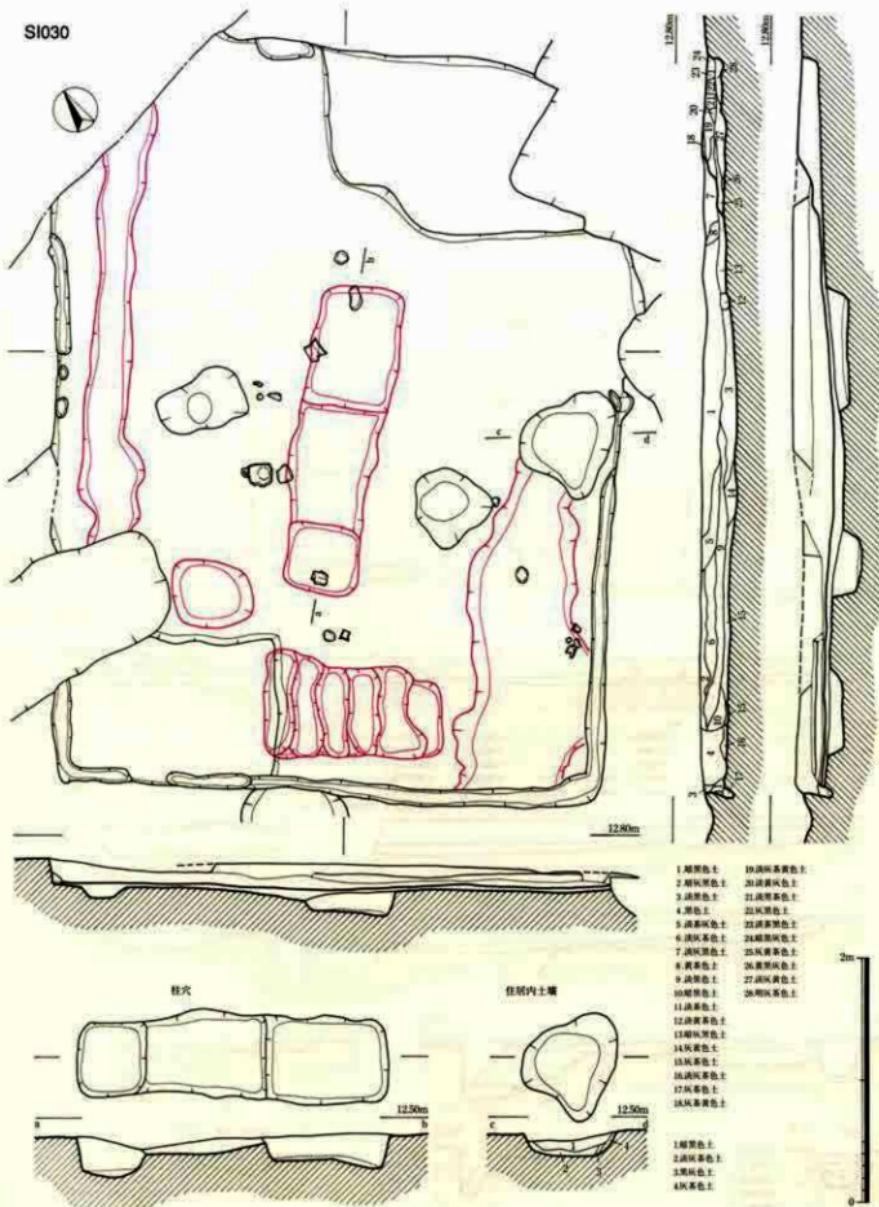


Fig.25 SI030遺構実測図 (1/40)

SI035

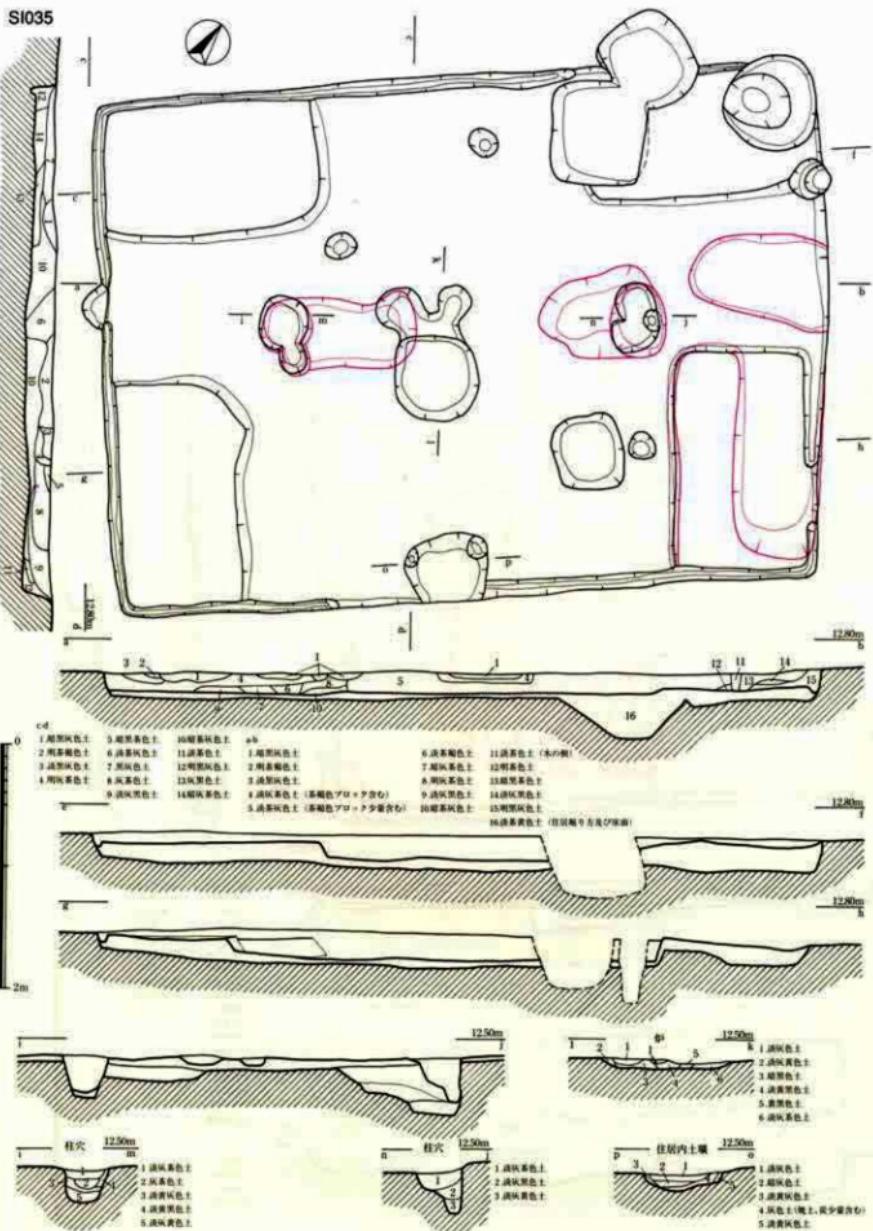


Fig.26 SI035遺構実測図 (1/40)

SI035 (Fig.26, Pl.15) SI010の西側に位置し、SB045, SB115, SB120, SB125が切る長方形の住居である。検出南北長約4.3m、東西長約5.95m、床面深さ約0.2m、主軸はN-53°-Eである。住居北辺に東西、南辺に南北に長軸を持つベッド状遺構を配置する。南東ベッドの一部が地山ベッドで他は土盛りをしたベッドである。南壁際に住居内土塙、中央に炉跡、柱を東西に2本検出した。また、壁際には壁小溝が巡る。遺物は住居覆土から壺型土器片、鉢型土器片、高環型土器片、支脚型土器片、壺型土器片、器台型土器片、不明石製品、床下から壺型土器片、支脚型土器片（覆土中の支脚と接合）、住居内土塙から壺型土器片、焼土塊を出土した。

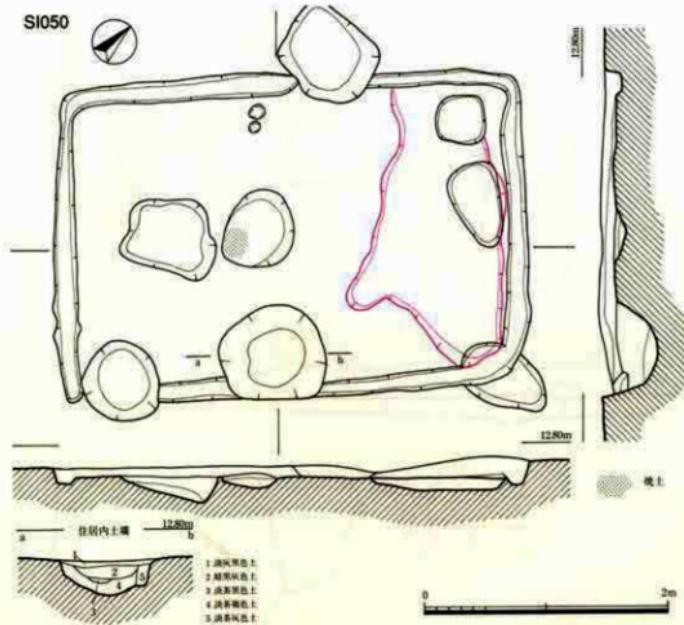
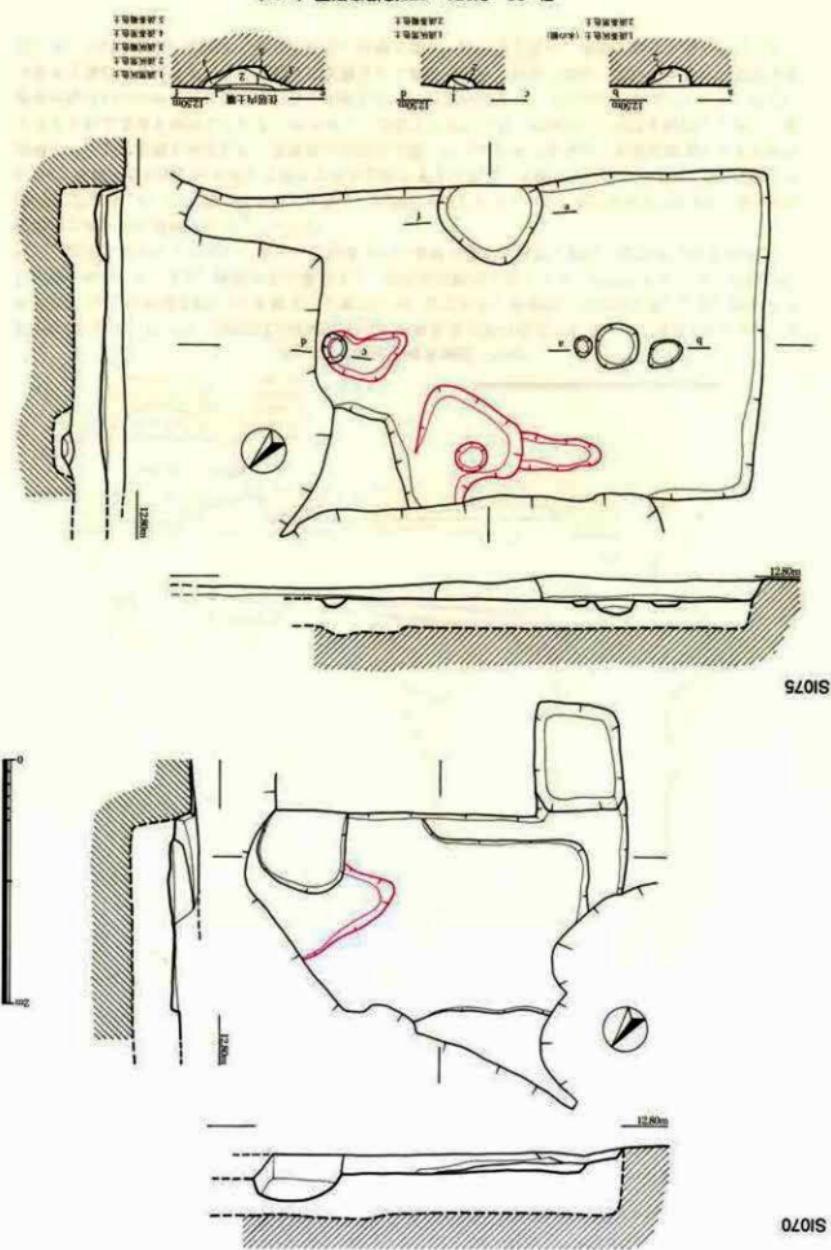


Fig.27 SI050遺構実測図 (1/40)

SI050 (Fig.27, Pl.16) SB055とSB060に切られる隅丸長方形の住居である。検出南北長約3.9m、東西長約2.7m、床面深さ約0.1mを測り、主軸はN-45°-Eである。南壁際に住居内土塙、中央に焼土を含む炉跡を検出した。また、壁際に壁小溝が巡る。竪穴住居群内で最も小さい住居であり、ベッド状遺構、柱穴、貼床を検出していない。遺物は住居覆土から壺型土器片、鉢型土器片、器台型土器片が出土し、住居内土塙からの遺物は出土していない。

SI070 (Fig.28, Pl.17) 調査区南西に位置し、大部分を搅乱されていた。検出南北長約2.2m、東西長約3.1m、床面深さ約0.23mを測る方形を呈する住居と考えられる。主軸はN-31°-Eである。南、西壁に小規模のベッド状遺構を検出した。南壁際に住居内土塙、柱穴は不明であるが、床面完掘後に2本の柱穴と考えられる遺構を検出している。床下ラインは掘りすぎている。南西隅にSX072を検出しており、遺構検出時はSX072が住居を切っていると判断したが、住居西側ラインがSX072まで延びており、住居に付帯する施設の可能性がある。遺物は住居覆土から壺型土器片、鉢型土器片、高環型土器片、壺型土器片、メンコ状土製品、床面から壺型土器片、鉢型土器片、高環型土器片、壺型土器片を出土している。

Fig. 28 S1070 · 075 测量素圖 (1/40)



SI075 (Fig.28, Pl.17, 18) SI070の北側に位置し、東部分が擾乱を受けていた。長方形を呈するプランで検出南北長約4.8m、東西長約2.7m、床面深さ約0.2mを測る。主軸はN-43°-Eで北東隅にベッド状遺構、南壁際には住居内土壙、長軸に2本の柱跡を検出した。遺物は住居覆土から壺型土器片、鉢型土器片、支脚型土器片、高環型土器片、土塊、鉄津、ベッド上から鉢型土器片、壺型土器片、床下から壺型土器片、住居内土壙から高環型土器片を出土した。

SI080 (Fig.29, Pl.18, 19) 検出区南西隅でSI105を切る長方形を呈する住居である。検出南北長約3.47m、東西長約5.7mを測り、床は2面検出し、深さは約0.25mと0.45mである。主軸は主軸はN-61°-E、住居北西隅で2枚目の床面からベッド状遺構と考えられる痕跡を確認しているがプラン等は不明である。柱は2枚目の床面で東西に2本、炉跡を中央で検出した。遺物は住居覆土から壺型土器片、壺型土器片、器台型土器片、鉢型土器片、染付、陶器、1枚目の床面から壺型土器片、鉢型土器片、ミニチュア鉢、2枚目の床面下から黒曜石石鏃を出土している。

SI085 (Fig.30, Pl.19, 20) SI030を切る検出南北長約3.85m、東西長約4.95m、床面深さ約0.15mを測る。主軸はN-60°-Eで住居北辺と南辺にベッド状遺構、南壁際には住居内土壙、中央に東西の2本柱を検出した。平面形態が不自然な状態で、住居が3軒程度切りあっている可能性が考えられるが、検出時の確認ができなかった。遺物は住居覆土から壺型土器片、不明鉄製品、床下から壺型土器片、住居内土壙から壺型土器片、鉢型土器片を出土している。

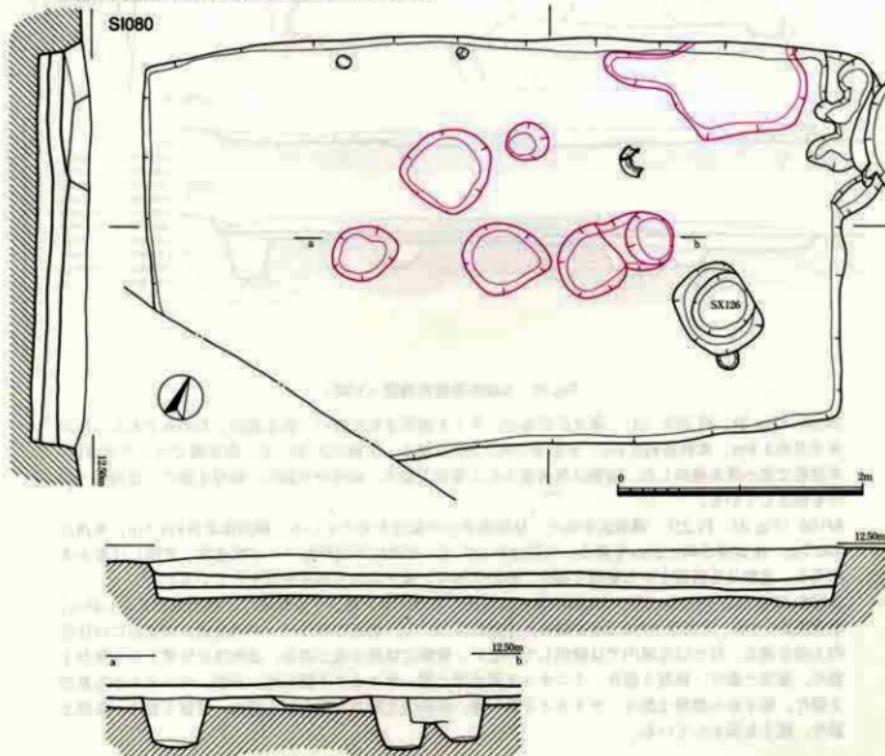


Fig.29 SI080遺構実測図 (1/40)

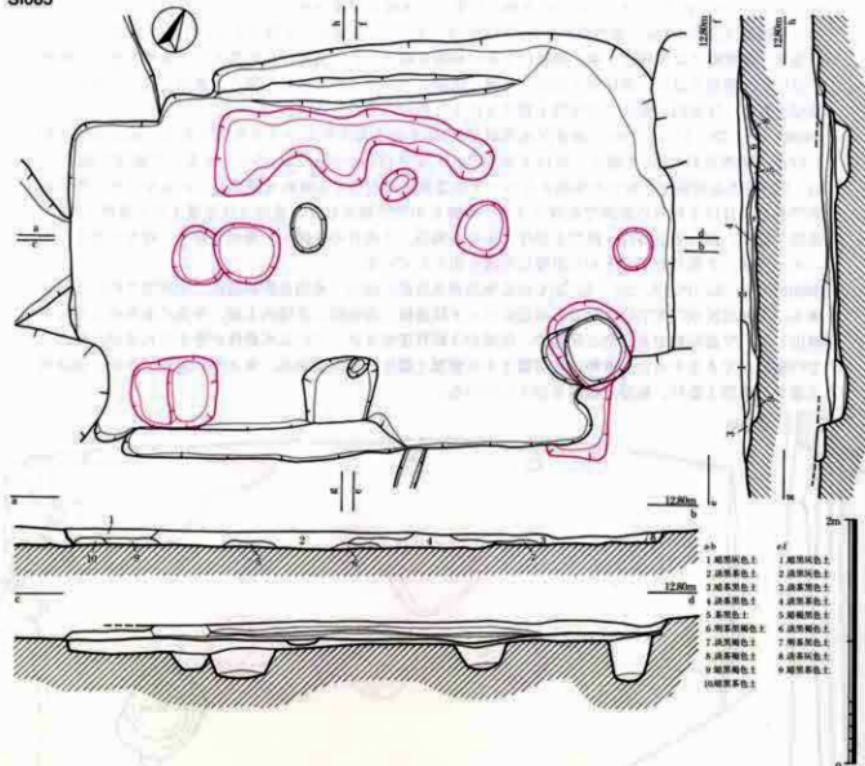


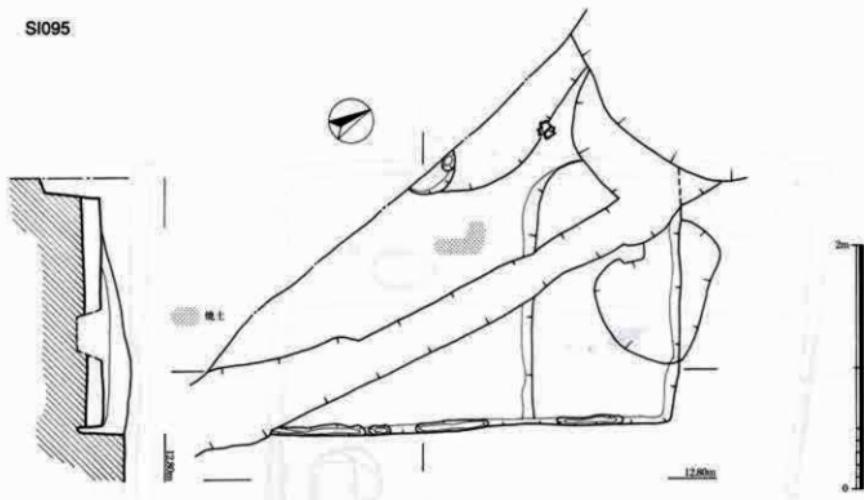
Fig.30 SI085遺構実測図 (1/40)

SI095 (Fig.31, Pl.210, 21) 調査区西端で、多くを搅乱され住居の一部を検出したのみである。検出南北長約3.9m、東西長約3.2m、床面深さ約0.2mを測る。主軸はN-27°-E、南東隅でベッド状遺構、南壁際で壁小溝を検出した。遺物は住居覆土から壺型土器片、高环型土器片、鉢型土器片、器台型土器片を出土している。

SI100 (Fig.31, Pl.21) 調査区中央で、住居南半分が搅乱を受けている。検出南北長約3.5m、東西長約6.7m、床面深さ約0.28mを測る。主軸はN-60°-E、東西に不定形なベッド状遺構、壁際には壁小溝が巡る。遺物は住居覆土から壺型土器片、鉢型土器片、床下から土器片を出土している。

SI105 (Fig.32, Pl.22, 23) SI080に切られる長方形のプランを呈する住居で、検出南北長約4.45m、東西長約6.8m、床面深さ約0.2mを測る。主軸はN-31°-E、東辺にのみベッド状遺構、南壁際には住居内土壙を掘る。柱穴は住居内では検出していない。壁際には壁小溝が巡る。遺物は住居覆土から壺型土器片、壺型土器片、鉢型土器片、ミニチュア器台型土器、サスカイト製石礫、石剣、ベッド上から壺型土器片、床下から壺型土器片、サスカイト製石礫、住居内土壙から器台型土器片、壺型土器片、鉢型土器片、焼土を出土している。

SI095



SI100

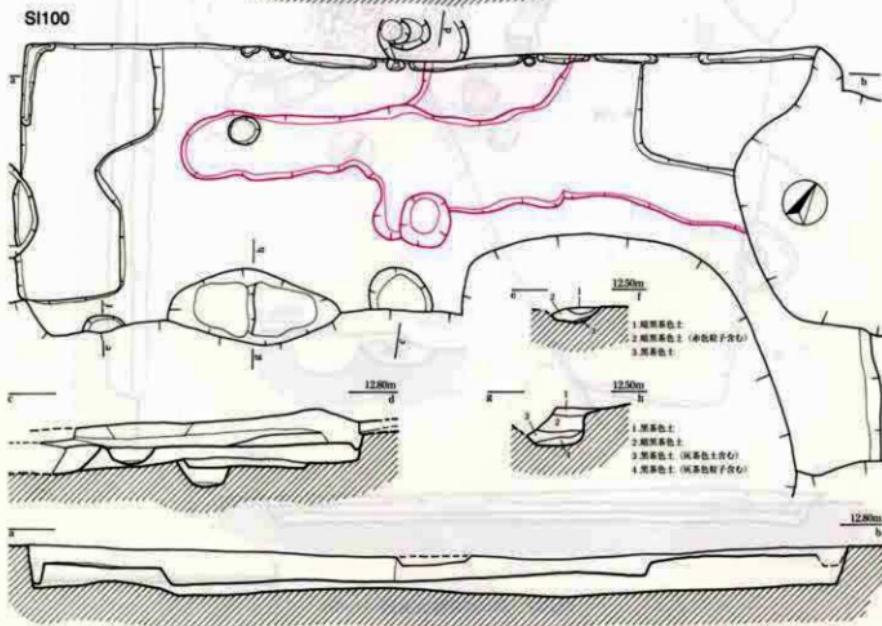


Fig.31 SI095・100遺構実測図 (1/40)

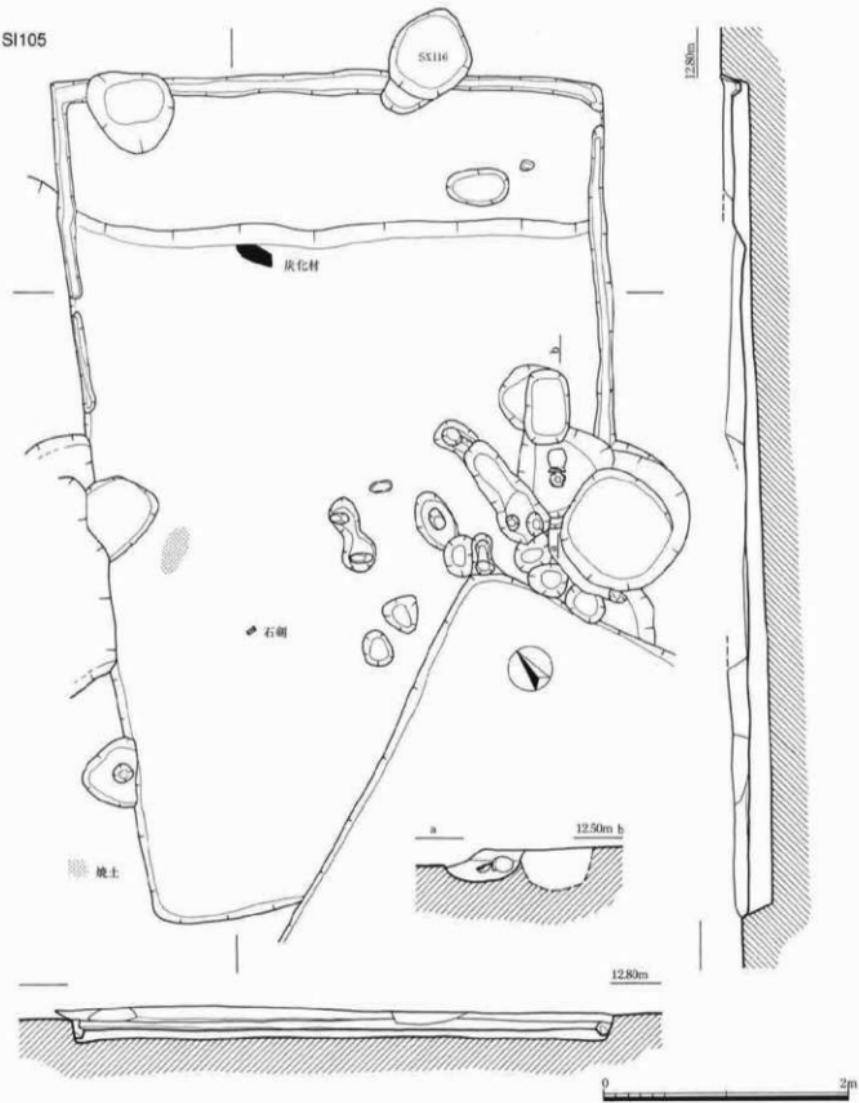


Fig.32 SI105遺構実測図 (1/40)

握手禮物

SB015 (Fig. 33) 調査区最東端で検出した1回×1回の遺物である。柱行約5.5m、梁行約5.0m、柱穴の位置はN-22°24'44"-Eを測る。柱穴の埋土は柱行の方位はN-22°24'44"-Eである。出土遺物はない。

SB040 (Fig. 34, Pl. 24) 調査区西北隅で検出した1回×2回の遺物である。柱間距離は柱行約3.0m、梁行約2.25m、柱行の柱間は約1.35m、1.65mを測る。柱行の方位はN-58°12'4"-Eである。遺物は柱穴aから焼型土器片、鉢型土器片、柱穴bから焼型土器片、鉢型土器片、瓶型土器片、柱穴dから焼型土器片、鉢型土器片、柱穴eから焼型土器片、瓶型土器片を出土している。

SB040 (Fig. 34, Pl. 24) 調査区西北隅で検出した。出土遺物はない。

SB055 (Fig. 35, Pl. 26) ピット平面が隅丸方形を呈する 1間×1間の建物で、桁行絶3.5m、梁行約2.4m、桁行の方位はN $56^{\circ}53'19''$ Eを測る。柱穴c、dの土層から柱根と考えられるものを検出している。遺物は柱穴aから壺型土器片、柱穴bから壺型土器片、柱穴cから土器片、柱穴dから鉢型土器片を出土。

1間の建物で、軒高約3.0m、梁行約2.6m、軒行の方位はN-86°41'53"Eである。出土遺物はない。

SBU63 (Fig. 36, Pl. 21) 調査区北西

が、調査区外に延びる可能性がある。柱穴の方位は $N\cdot20^{\circ}19'23''\cdot W$ である。柱穴 c の土層から柱頭と考えられるものを検出している。柱穴 b、d のみテラスを設ける。遺物は柱穴 a から壺型土器片、柱穴 b から壺型土器片、柱穴 c から土器片、柱穴 d から土器蓋、磁器片、陶器片を出土している。

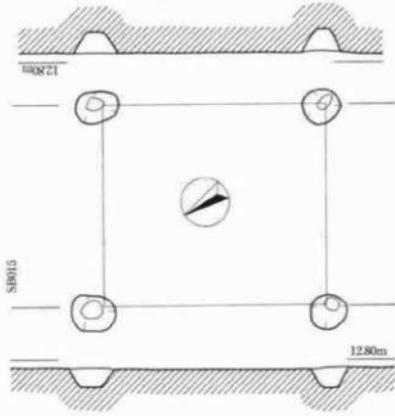
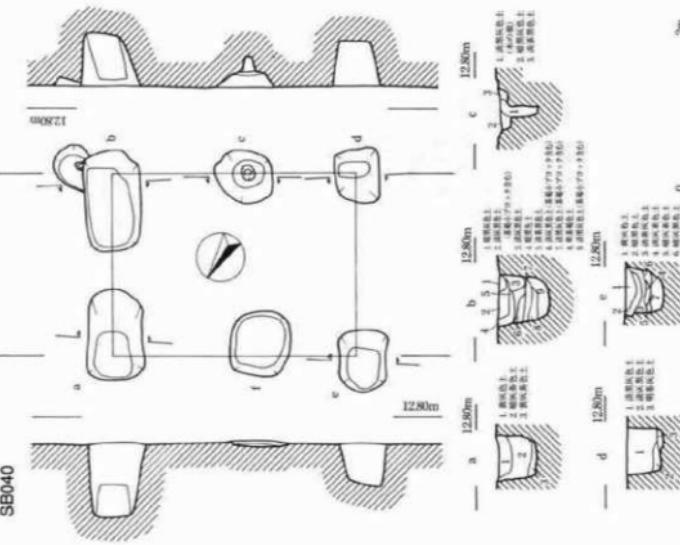


Fig.33 SB015遺構実測図（1/60）



卷之三

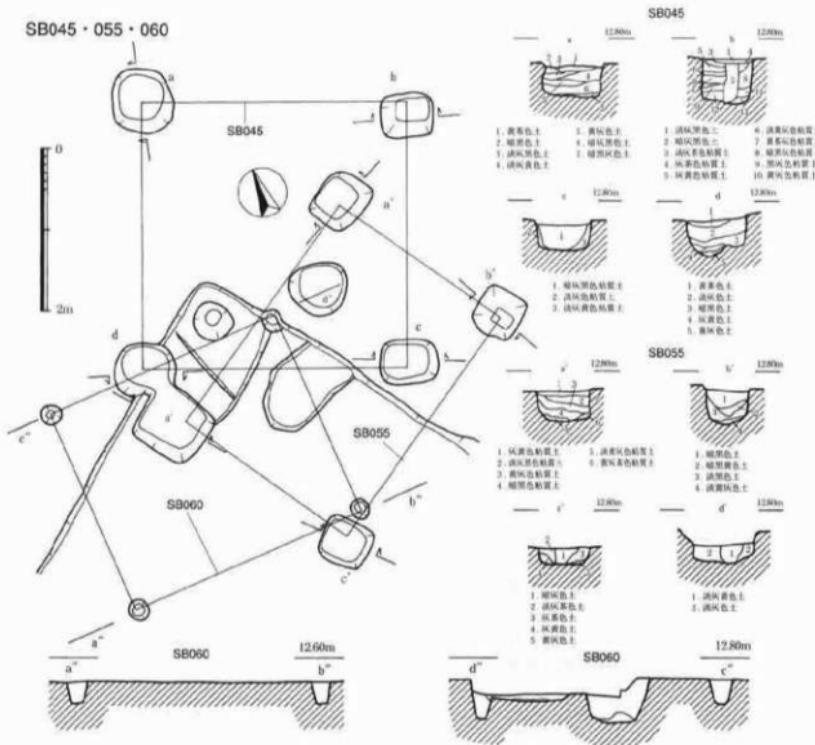


Fig.35 SB045・055・060遺構実測図 (1/60)

SB110 (Fig.38, Pl.28) 調査区南端で検出した1間×1間の建物である。柱間は約3.25mを測る。方位はN $7^{\circ}52'59''$ -Wである。遺物は柱穴bから鉢型土器の完形品が出土したのみである。

SB120 (Fig.39, Pl.29, 30) SI050を切る1間×1間の建物である。桁行約3.3m、梁行約2.75m、桁行の方位はN $18^{\circ}9'10''$ -Wを測る。柱穴dの土層から柱痕と考えられるものを検出している。遺物は柱穴aから土器片、柱穴bから壺型土器片、鉢型土器片、高环型土器片、柱穴cから土器片、柱穴dから壺型土器片を出土している。

SB125 (Fig.39, Pl.29, 30) SI050を切る1間×1間の建物である。桁行約3.25m、梁行約3.0m、桁行の方位はN $12^{\circ}9'18''$ -Wを測る。各ピットは比較的浅く、遺物は柱穴aから壺型土器片、柱穴bから壺型土器片、鉢型土器片、柱穴cから柱穴dから壺型土器片を出土している。

周溝状遺構

SX005 (Fig.40, Pl.31) 調査区東南で検出した。遺構の規模は外径約4.8m、内径約3.05m、溝の幅約0.8m~1.1m、深さ0.25m~0.30mを測る。土層dの底面から焼土を含む埋土を確認した。溝内でピットを検出し、埋土は灰白色粘土を多く含み、粘土直上には壺片を出土している。また、ピット南で黄色粘土を検出し、粘土除去後、ミニチュアの鉢を出土している。他の覆土中遺物は焼土塊、淡黒灰色土か

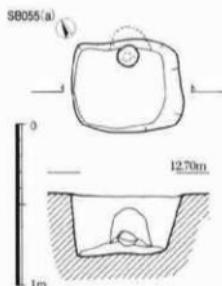


Fig.36 SB055 a (1/30)

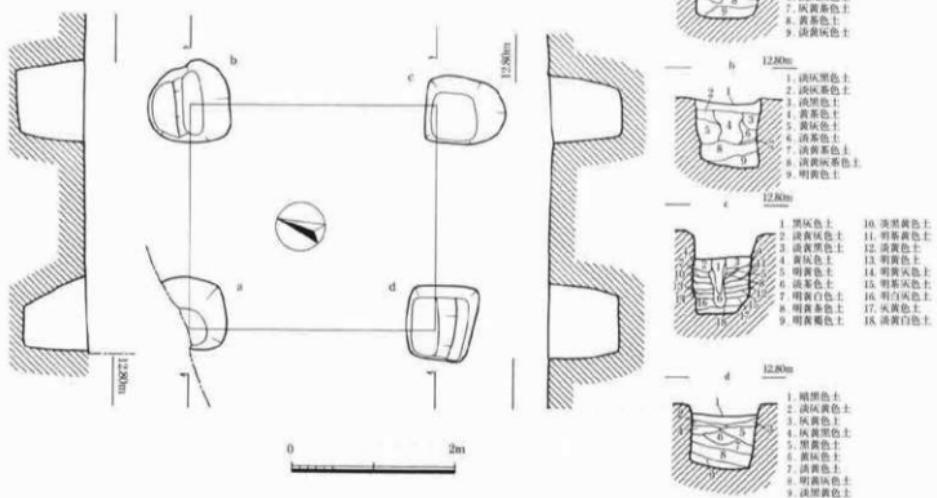


Fig.37 SB065造構実測図（1/60）

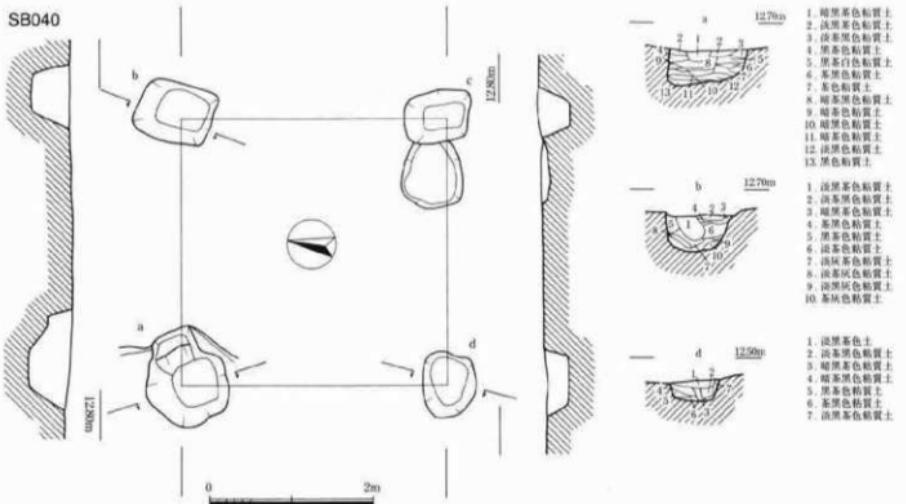


Fig.38 SB110造構実測図（1/60）

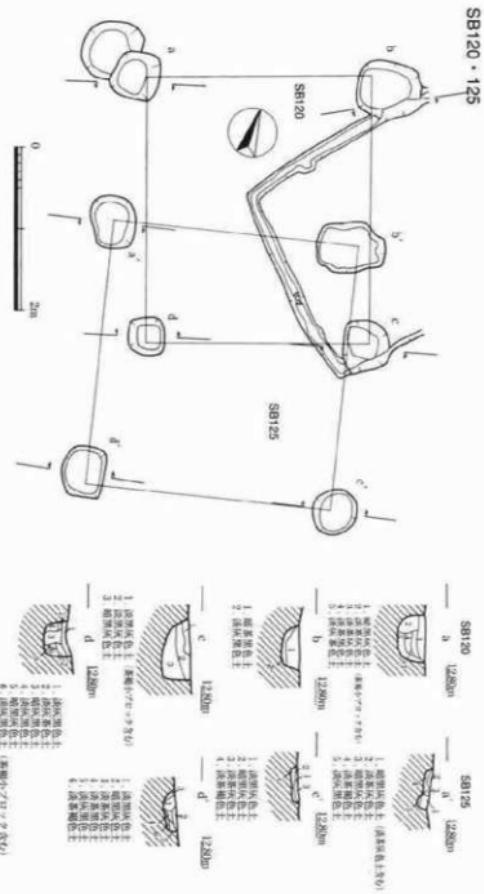


Fig.39 SB120・125遺構実測図 (1/60)

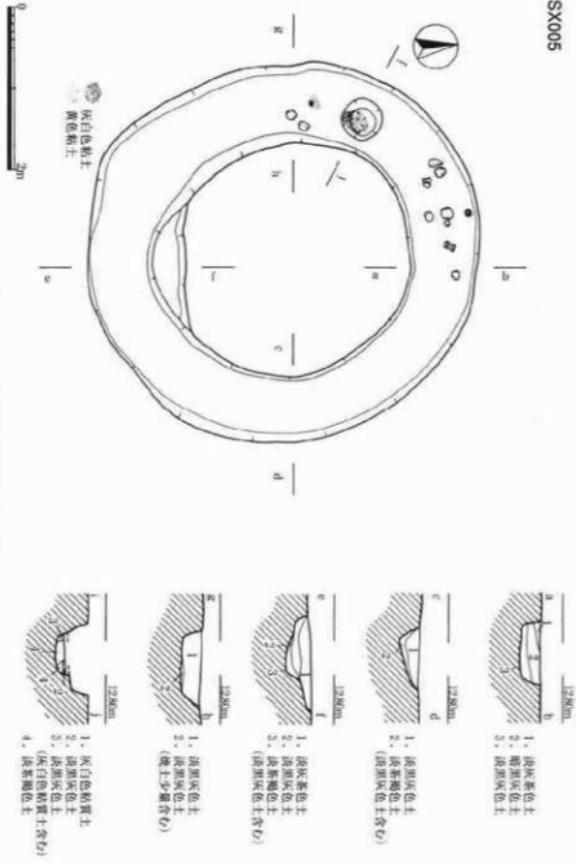


Fig.40 SX005造構実測図 (1/60)



SX020

ら壺形土器片、器台型土器片、淡灰茶色土から焼成土器片を出土している。

SX020 (Fig. 41, Pl. 32)

調査区中央に位置する周溝状遺構で、遺構全体が木の棒に覆瓦される。外径約2.6m、内径約1.15m、溝幅約0.75m、深さ0.15~0.25mを測る。溝埋土は淡黒灰色土と淡黒灰色土(茶褐色ブロック土)である。遺物は壺形土器片、磁器片、陶器片、焼土を出土している。

土壙

SK072 (Fig. 42, Pl. 32)

SI070を切る土壙であるが住居に伴う施設の可能性も考えられる。廻士はかなり縮まり、平行に堆積する。長軸約1.95m、短軸約0.75m、深さ約0.75mを測る。遺物は壺形土器片、高環型土器片、器台型土器片を出土している。

SK090 (Fig. 42, Pl. 32)

SI070南側の土壙で、検出面を一部搅乱されている。長軸約1.3m、短軸約0.75m、深さ約0.15m~0.23mを測る。遺物は壺形土器片を出土している。その他の遺構

SK036 (Fig. 43)

SI035のベット上で検出した遺構である。住居に伴う土壤の可能性がある。長軸型土器片軸約0.5m、短軸0.45m、最大深さ約0.45mを測る。遺物は壺形土器片、鉢型土器片、器台型土器片が出土している。

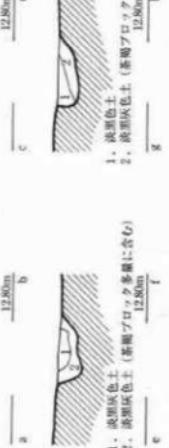
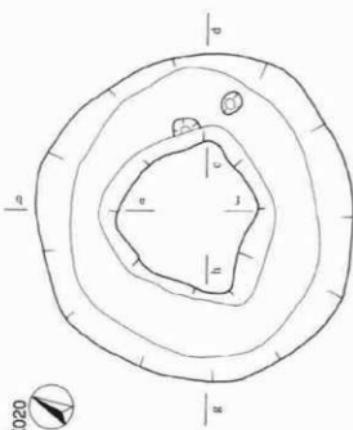
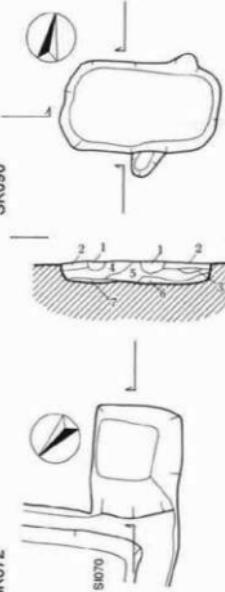


Fig. 41 SX020遺構実測図 (1/40)

SK072



SK090

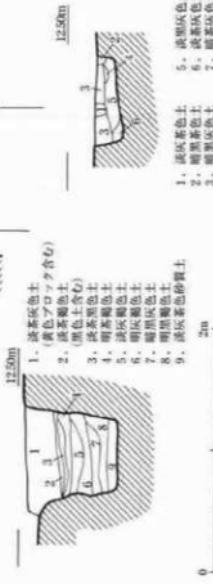


Fig. 43 SK036遺構実測図 (1/40)

SK036

Fig. 42 SK072・090遺構実測図 (1/40)

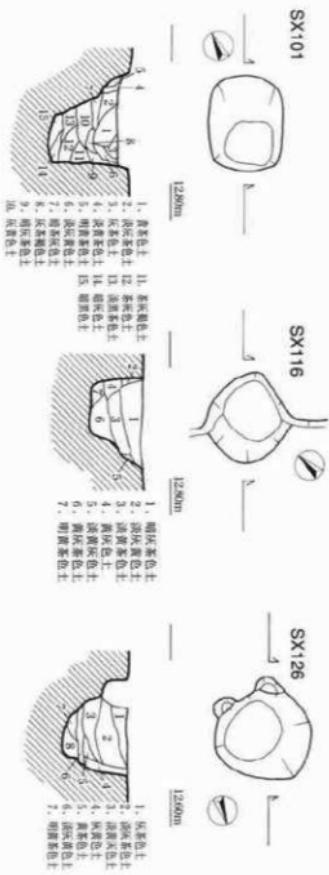
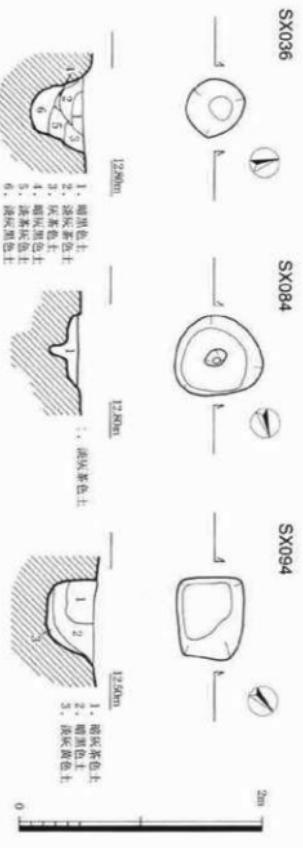


Fig.43 SX036 · 084 · 094 · 101 · 116 · 126 地质实测图 (1:40)

SX113

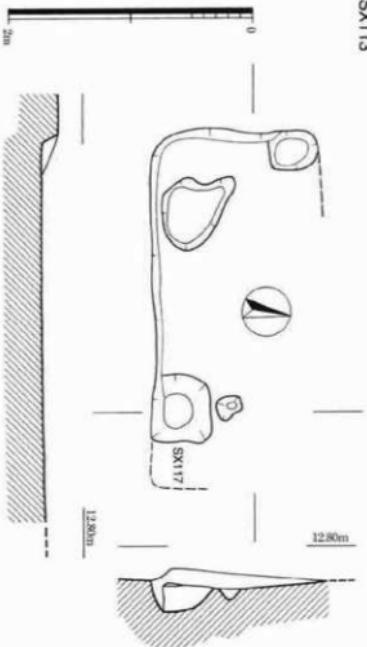


Fig.44 SX113 · 117 地质实测图 (1:40)

- SX084 (Fig. 43, Pl. 32) SI035東側で検出した遺構である。遺構中央の小穴は木の根である。長軸約0.75m、短軸約0.65m、最大深さ約0.23m、埋土は淡灰色土で、遺物は出土していない。
- SX094 (Fig. 43, Pl. 32) SX113の東側にある闇丸万形を呈する遺構で、長軸約0.68m、短軸約0.57m、最大深さ約0.38mを測る。遺物は堀型土器片を出土している。
- SX101 (Fig. 43, Pl. 33) SI095の東側で検出した闇丸万形を呈する遺構で、長軸約0.8m、短軸約0.6m、最大深さ約0.35mを測る。遺物は堀型土器片、口縁部に対面する二つの穿孔がある完形の鉢型土器、土管有孔円盤を出土している。
- SX116 (Fig. 43, Pl. 33) SI105を切る遺構で、長軸約0.75m、短軸約0.65m、最大深さ約0.45mを測る。遺物は堀型土器片を出土している。
- SX126 (Fig. 43, Pl. 33) SI080の末面から検出した遺構で、住居に伴う遺構の可能性がある。長軸約0.78m、短軸約0.77m、最大深さ約0.54mを測る。遺物は堀型土器片、鉢型土器片を出土している。
- SX113 (Fig. 44) SI085の南側で検出した遺構で、多くを搅乱されており、一部の検出に留まつた。堅穴住居になる可能性があり、検出時の平面プランが闇丸長方形で長軸約2.9m、短軸約1.4m、最大深さ約0.13mを測り、極端に小規模の住居になる。覆土除去後、床面と考えられる緩化面を検出している。遺物は堀型土器片、鉢型土器片、不明土器品を出土している。
- SX117 (Fig. 44, Pl. 33) SI113の南壁際で検出した遺構で、SI113の堅穴住居であれば、住居内土壁になる可能性がある。長軸約0.55m、短軸約0.5m、最大深さ約0.2mを測る。遺物は堀型土器片、並型土器片、ミニチュア鉢型土器片を出土している。
- 不明遺構
- SX011 (Fig. 22) 調査区中央で検出した遺構で、長軸約0.85m、短軸約0.5m、最大深さ約0.08mを測る。遺物は磁器片を出土している。
- SX022 (Fig. 22) SB065の東側で検出した遺構で、長軸約0.5m、短軸約0.4m、最大深さ約0.15mを測る。遺物は土器片を出土している。
- SX032 (Fig. 22) SB065西側で検出した遺構で、径が約0.72m、最大深さ約0.17mを測る。遺物は鉢型土器片を出土している。
- SX047 (Fig. 22) SB120aを切る遺構で、長軸約0.8m、短軸約0.7m、最大深さ約0.17mを測る。遺物は土鍋器（糸切り）小皿、磁器片を出土している。
- SX074 (Fig. 22) 調査区中央に掘られた竪坑で残置の木材や石垣の石、磁器片や陶器片が多量に出土している。
- SX078 (Fig. 22) SB025を切る遺構で、長軸約0.75m、短軸約0.6m、最大深さ約0.28mを測る。遺物は堀型土器片、並型土器片、高杯型土器片、土師器鉢、磁器片、陶器片、平瓦を出土している。
- SX083 (Fig. 22) SI070を切る遺構で、理士に多量の焼土が入っていたが壠は焼けていない。平面アングルは不定形で長軸約4.4m、最大深さ約0.47mを測る。遺物は堀型土器片、土師器鉢、磁器片、陶器皿、並、掃除棒状土製品、楽器、鉄製刀子を出土している。
- SX091 (Fig. 22) 調査区南西で検出した遺構で、北側にテラスを設ける。長軸約3.2m、短軸約2.4m、最大深さ約0.3mを測る。遺物は土師器鉢、棒状土製品、土製人形片を出土している。
- SX092 (Fig. 22) SI105東側で検出した遺構で中央にテラスを設け、その両端がピットになる。長軸約3.7m、短軸約2.1m、テラスの深さ約0.27m、ピットの深さ約0.53mを測る。遺物は土師器火鉢、鉢、盤、磁器片、陶器片、平瓦を出土している。
- SX099 (Fig. 22) SI095を切る遺構で、調査区外に延びる。検出長軸約2.65m、検出短軸約2.0m、最大深さ約0.66mを測る。遺物は土師器皿、陶器片、鉢、皿、晉、盆、棒状土製品、土製人形を出土している。

(3) 出土遺物

S1001 (Fig. 45, Pl. 38)

甕型土器 (1～3) 1、2は長胴の甕で共に内外面をハケ目で仕上げる。頭部内面の棱は明瞭であり、底部は若干レンズ状で、外面上に黒鉛が付く。3は平底の甕で、粘土に多量の角閃石が入る。磨耗が激しく調整は不明であるが、底部内面に指痕模様がある。

鉢型土器 (4) 口縁が外反するタイプの鉢で体部外面をハケ目、内面は横方向のナデ、体部内面は横方

向にナデる。口縁端部を内側に若干つまみ上げる。粘土は稍選されている。

高环甕土器 (5) 長脚の脚部のみの資材である。磨耗が激しいため調整は不明。

S1001住居内土器 (Fig. 45, Pl. 38)

甕型土器 (6) 小型の手すくねの甕で、ほぼ完形である。内外面共に指痕模様があり、体部中程と底部の境に粘土接合部が残る。焼成は良好で内外面ともに淡茶黄色土である。

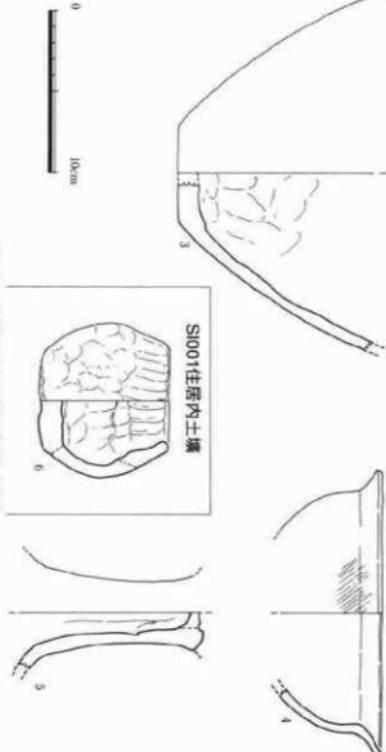
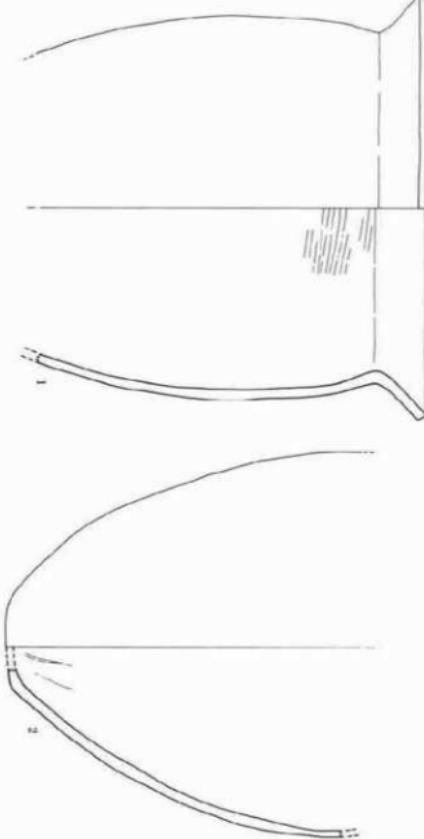


Fig. 45 S1001出土遺物実測図 (1/3)



S1001

SI010 (Fig.46~49, Pl.38~41)

壺型土器 (7~12) 7は口縁部が直立する壺で、胎毛が激しいが、内外面をハケ目で調整する。8は口縁が外反し、体内部内面は縦方向のハケ目、外面は不定方向にハケ目があり、黒斑が残る。9は内外面全体に稍凹等の植物痕が多く量に残り、調整は内外面とともにハケ目である。部分的に2次的な焼け痕を受けた色を呈している。10、11は口縁部片で、外面はハケ目、内面はナデが入る。12は底部片で9と同様に粉殻等の植物痕が全面面にあり、底部表面形成を行う。

壺型土器 (13~26) 13は丸底になる底部をもち、口縁が直に近い形で立ち上がる。体部外面とともにハケ目が施され、底部に黒斑が残る。14、15は口縁部が直立する。16、17は外面にハケ目、18は内外面ともに近い底部をもち、球形の胸部をもつ。外面をハケ目、内面は焼耗により不明。19は底部が火災によるが少し氣味の底部をもつ胸長の壺で、口縁部に刻み目を施す。体部外面上半に明きが残存し、体部中程から縱方向のハケ目が入る。内面は体部上半が不定方向にナデ、下半が縱方向にナデが入る。頭部内側の焼は明顯である。20から26は口縁部片で、21、22、26は刻み目が入る。

鉢型土器 (27~39) 素口縁とく字口縁があり、27は粗雑な作りで胎土に粗粒等の植物痕が多量に見られ、外面に指頭痕と粗いハケ目、底部内面は強いナデ、若しくはケズリとも捉えられる調整を施す。28は口縁部が内凹し内面にハケ目を施す。外面より口縁部を肥厚させる。外面は丁寧にナデ、瓶、内面にハケ目を施す。30はほぼ完形の鉢で底部を尖底に、口縁部を内凹させせる。外面はナデ、内面はハケ目が施される。31は丸底の鉢で外面をナデ、内面にハケ目を施す。32は外面とともにナデがあり、内面には工具痕が残る。33はかなり歪んだ粗製品で、胎土には粗粒等の植物痕が残り、内外面ともにハケ目を施す。体部外面には黒斑が残る。34はく字口縁をもつ脚环の鉢である。35から39は体部から口縁にかけて口縁部を内側につまみ上げる。調整は内外面ともにハケ目である。35から39は体部から口縁にかけての片で、35は胎土に角閃石が入り、外面に工具痕が残る。36は外面にナデ、内面にハケ目が入る。37は口縁部を内凹させる。38、39は小型の鉢で、内外面とともにナデで仕上げる。

高杯型土器 (40~43) 40は坏部片で内外面とともにナデが施され、口唇部には沈穂が残る。41は坏部と脚部の接合部片で、胎土がよく相違されており、外面はハケ目後ナデられており、脚上部にハケ目後ミガキが施される。42は坏部が接合面から取れてしまった脚部で、胎土がよく相違されており、脚上部にハケ目後ミガキが施される。器部や内面はハケ目で調整され、3ヶ所に穿孔が見られる。43は柄部片で外面はハケ目と端部が横方向のナデ、内面はナデと端部がハケ目で調整される。

器型土器 (44~45) 44は外面に指頭痕が強く残り、焼成不良であるが、外面は不定方向にナデを施す。45は柄部で外面に指頭痕、内面は指頭痕の上から不定方向にナデを施す。

石製品 (46~53) 46は天草系の砂岩製砥石で2面使用する。47から51は滑石若しくは明き石の類と考えられるが明瞭な使用痕跡はしない。52は不明石製品で明確な使用痕が見られない。

土製品 (53~62) 53から55は土製の支脚と考えられる。焼成は行われているがもろく、2次的な被熱は受けていない。55は面取りをしている。56は円柱状の不明土製品である。57から62は燒土塊である。

SI010底面 (Fig.50, Pl.41)

鉢型土器 (63) 脚付きの鉢で脚の一部が欠損するが、ほぼ完形である。く字口縁をもち、内外面ともに穿孔がなされる。焼成は良好で内外面ともに淡黄褐色を呈する。

SI010住居内土塊 (Fig.50, Pl.41)

壺型土器 (64) 丸底で体部が球形を呈する。内外面ともに強いハケ目であるが、外面はハケ目後ナデが入る。外面に黒斑が残り、底部付近に打ち欠いたような欠損が認められる。

SI010上面窓乱 (Fig.50, Pl.41) SI010を切る窓乱から出土した遺物である。

壺型土器 (65~66) 65は2重口縁をもつ壺で、口縁部外面に脚环目文、他をハケ目で調整する。66は胎土が非常に精選されており、器壁が薄い。外面はハケ目後幅方向に丁寧にナデが施された内面はナデが入り、脚部屈曲下には細かいハケ目が斜めに入る。

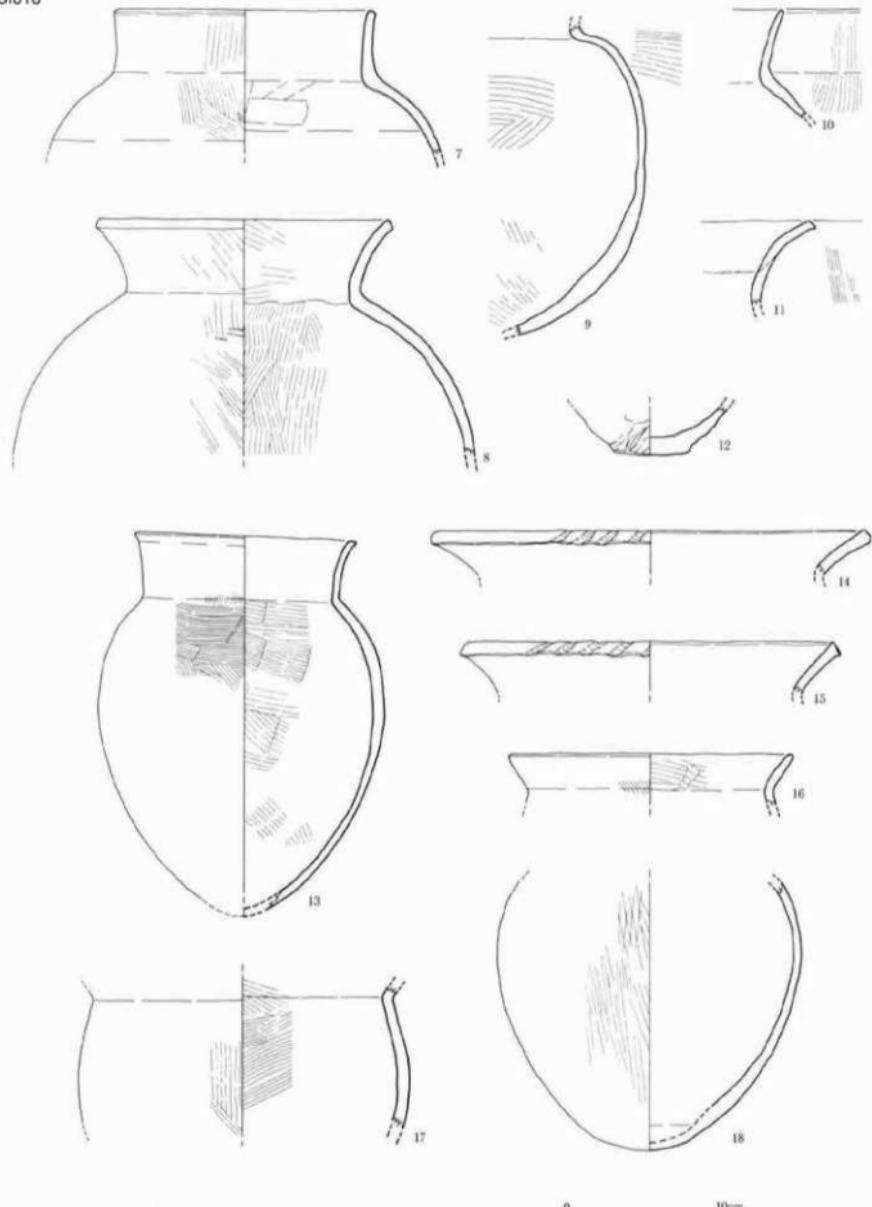


Fig.46 SI010出土遺物実測図① (1/3)

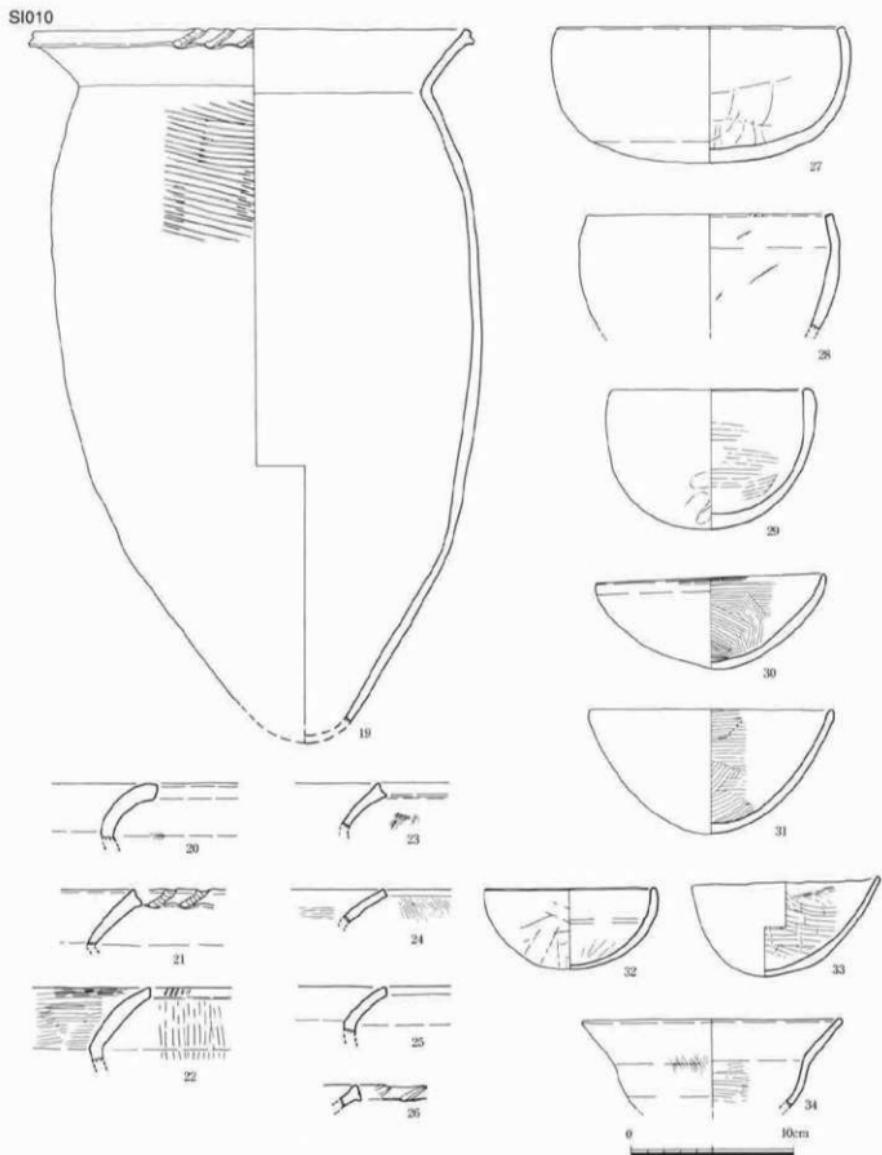


Fig.47 SI010出土遺物実測図② (1/3)

SI010

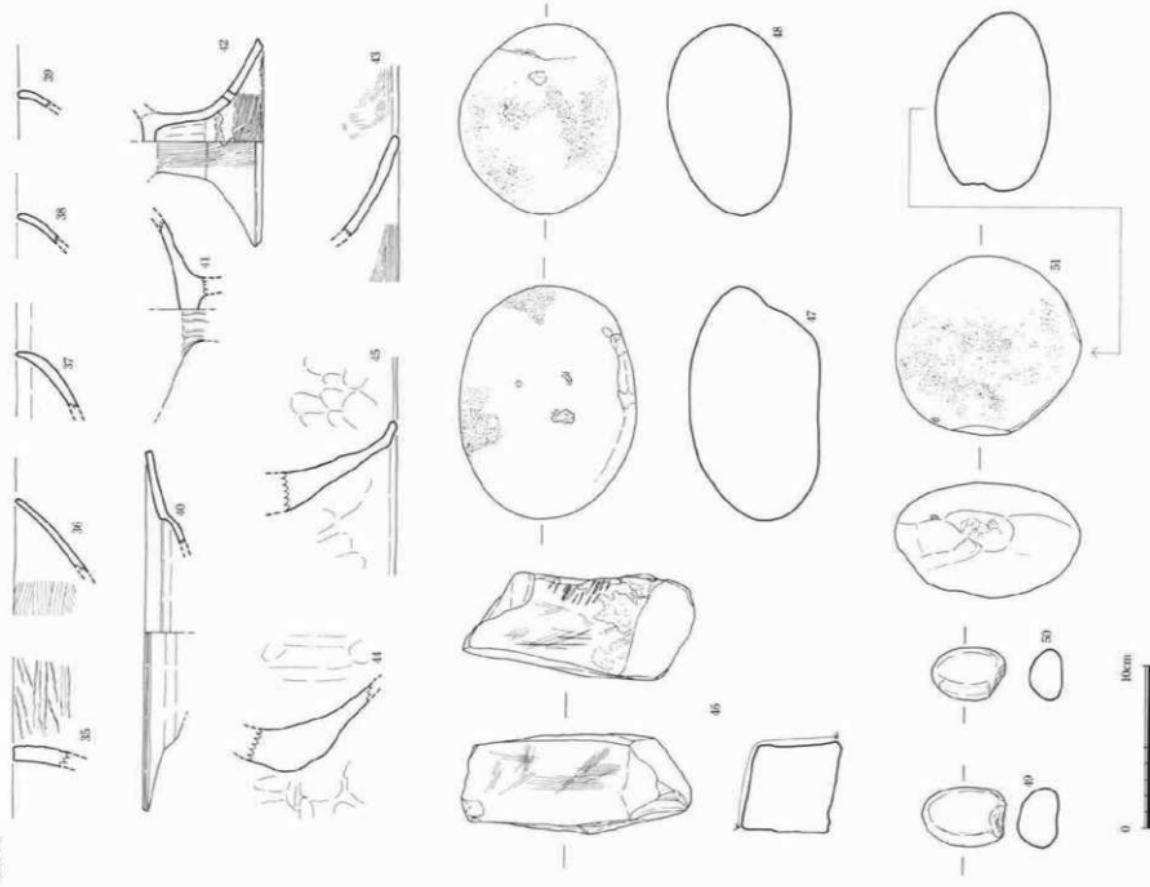


Fig. 48 SI010出土遺物測圖③ (1/3)

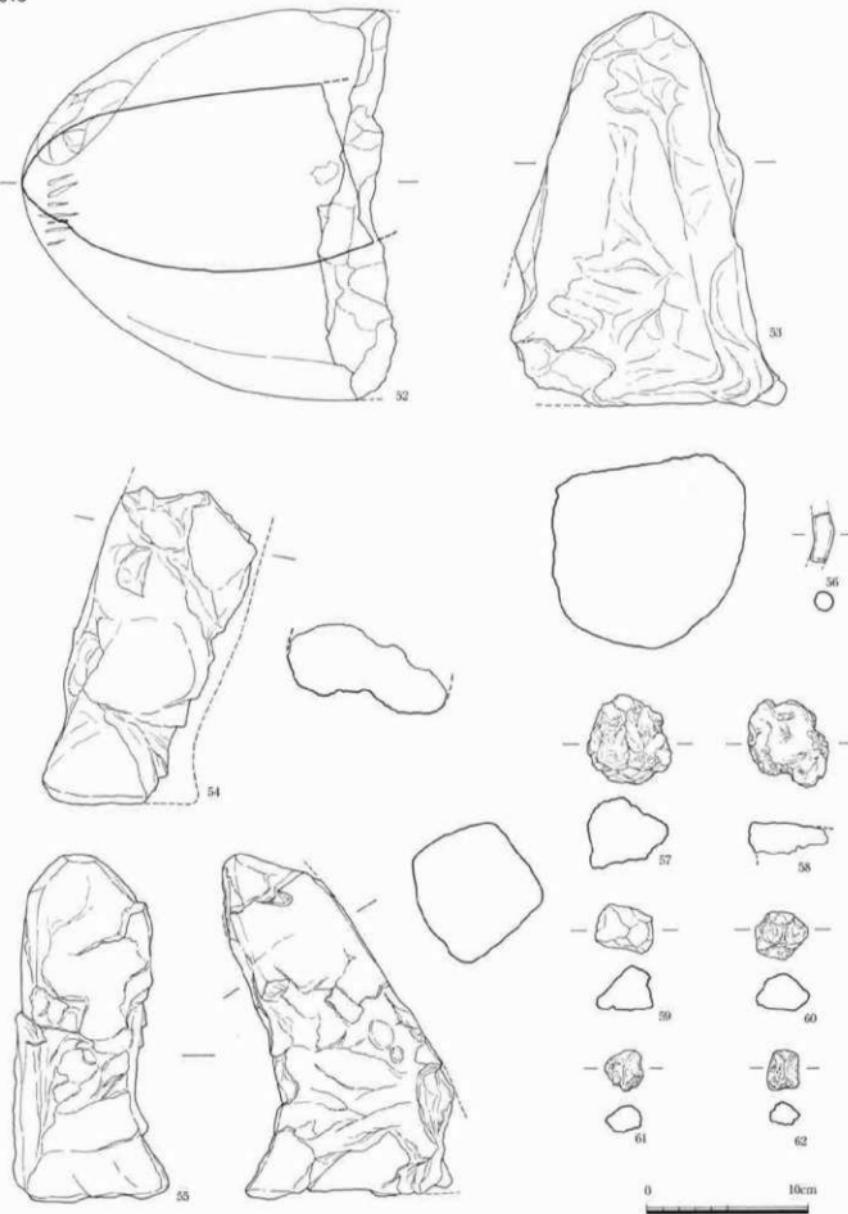
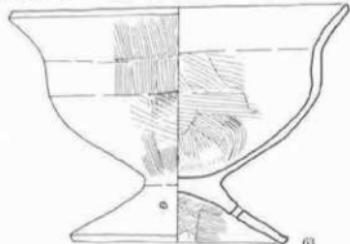
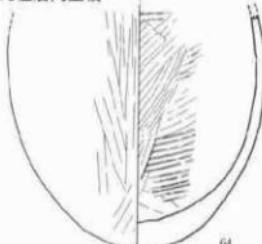


Fig.49 SI010出土遺物実測図④ (1/3)

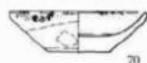
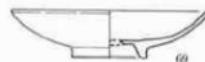
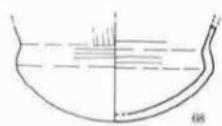
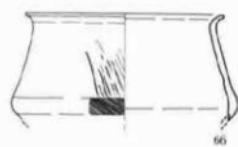
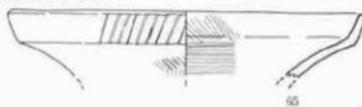
SI010床面



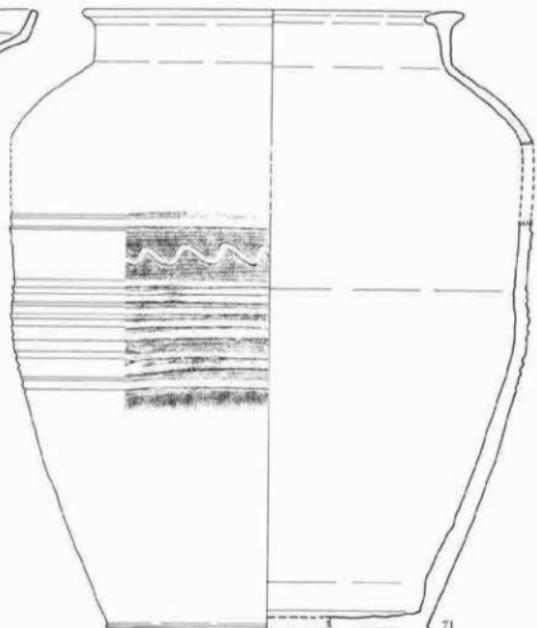
SI010住居内土壤



SI010カクラン



0 10cm



5cm
0

Fig.50 SI010出土遺物実測図⑤ (1/3) 石製品 (1/2)

鉢型土器 (67～68) 67は丸底で肉厚である。口縁部が工具により平坦に面取りされている。外面は指頭部が残り、内面は不定方向に丁寧にナデられる。68はく字型の丸底の跡で、外面は体部の屈曲まで横方向にナデかミガキのような調整を施し、体部屈曲下から底部が不定方向にナデが入る。内面は極方向に丁寧なナデが施される。

陶器 (69～71) 69は陶器の皿で、高台外面から施釉され見込み部分をカキ取る。胎土は灰色を呈し、透明に近い釉がかかる。70は底部糸切りで口縁付近に油焼が付く。71は陶器の中型甌で口縁は内外に突出し、外面には波状文と沈線が巡る。内面には格子の明きときの面は全て使用している。72は石製品 (72～73) 共に砥石で72は砂岩製で1面が削磨しているが残りの面は全て使用している。73は砂岩製で全面の使用が認められる。

S1025 (Fig.51～53, Pl.42～44)

壺型土器 (74～78) 74、75、76は丸底で口縁が直に立つ並で内外面ともにハケ目で、黒斑が残る。75の内面は底部から時計回りに丁寧なハケ目を施す。76は口唇部に沈線で口縁部に矧み目、口唇部に縫目で、内面に近い文様が入る。

壺型土器 (79～84) 79は内外面ともにハケ目、80は外面ハケ目後ナデ、内面はハケ目、口唇部に沈線が残る。81は剥長の臺で、外面にタッキ、内面にハケ目を施す。82は剥長で矢先気味の底部で、体部外而上半をタッキ、下半はハケ目、内面はハケ目を施す。外面に黒斑が残る。83、84は底部片で83は尖り気味の丸底で、外面をケズリに近い工具による強いナデが施される。84は凸レンズ状の底部で内外面ともにハケ目である。

鉢型土器 (85～91) 85から87は口縁がく字になる鉢で、88は口唇部に沈線があり、内外面ともにハケ目である。86は口縁部外面に横方向のハケ目後、縫方向のハケ目を施す。87はハケ目後、ナデを施す。

88は口唇部を平坦に面取りした歪みのない鉢で、内外面を斜めにハケ目を施す。89は内厚で粗鈍なつくりの鉢で、外面は焼成時にひび割れを起こしている。底外部外面はケスリとも扱えられる強い工具が残り、内面はハケ目である。90、91はミニチュアの鉢である。

高杯型土器 (92～93) 92は底部で口縁部が大きくなき開き、鉢の可能性がある。調整は磨耗のため不明。93は脚部で1/3残存の1ヶ所に穿孔が残る。

支脚型土器 (94～95) 94は小型の支脚で天井部が傾斜し、全面ナデを施す。95は天井部が傾斜し、底部外面にはタッキが施される。

器台型土器 (96) 脚部片で、外面はタッキ後ナデを施す。内面はハケ目。脚部部が内側に踏ん張り、平坦に仕上げる。

土製品 (97) 土製の柄杓で坏部が欠損する。握り部分に指留痕が残り、片面部はハケ目を施す。

金製品 (98) 銀製の鐘で、幅27cmの鏡板を鋸角に折り曲げており、途中で破損している。着装時の本質等は認められなかった。

石製品 (99～101) 99、100は花崗岩製の磐石と考えられ、中央部分に小さな溝みが残る。101は花崗岩の磐石である。

S1030 (Fig.54～55, Pl.44～46)

壺型土器 (102～103) 102は平底の底部を有し、内外面共にハケ目である。胎土は小砂粒が多く粗い。

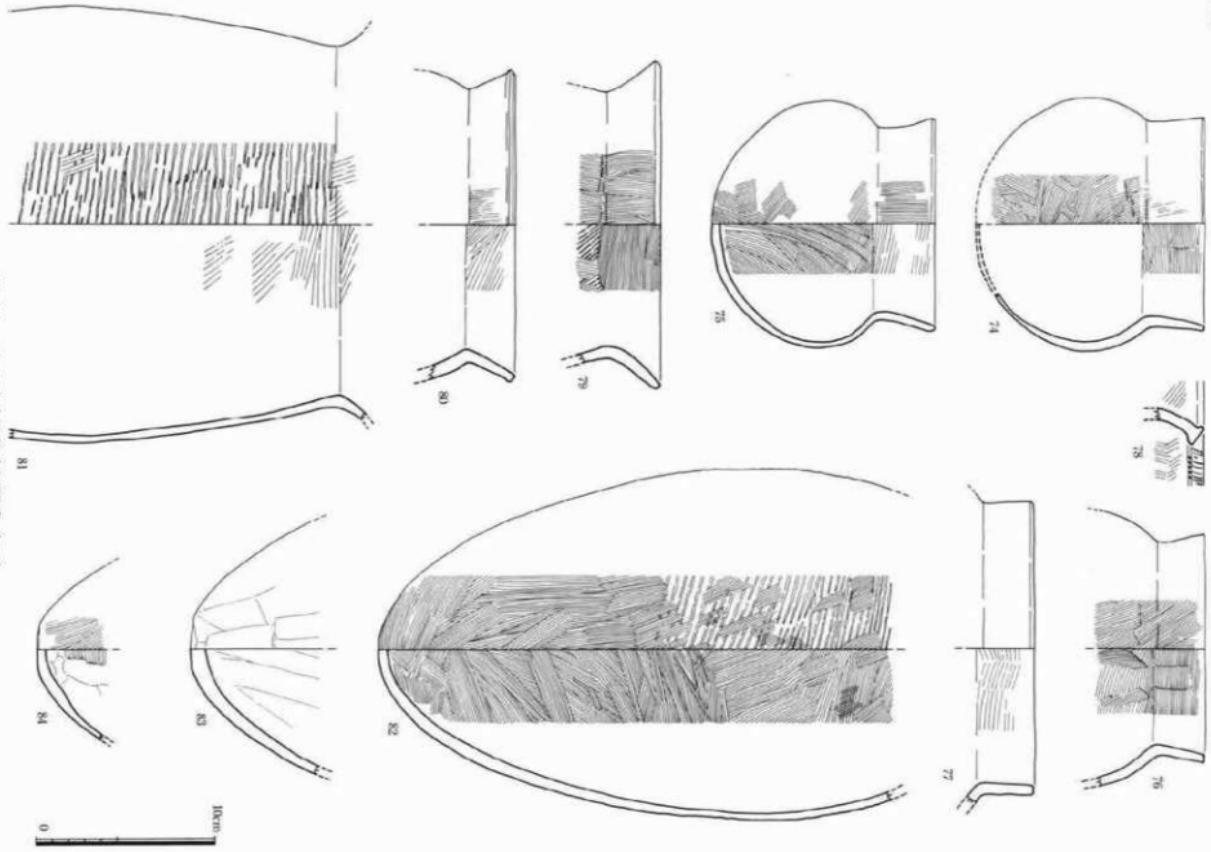
103は小砂粒を殆ど含まない精選された胎土の小型甌で、外面は不定方向のナデ、内面は横方向にナデを施す。外面全体に黒斑が残る。

壺型土器 (104～113) 104は大型の甌で、頸部に断面三角形の突起が盛り付く。内外面ともにハケ目、口縁部は横方向にナデを施す。105から109は墨口縁部片で、105は内外面をハケ目、口唇部にもハケ目が残る。106は細かく壺の施釉に入るが、内外面ともにハケ目、外面上に黒斑が残る。焼成不良である。

107は内面にハケ目が施され、外面は焼成不良のため不明。108は体部内外面に縦方向のハケ目、口縁内面は横方向のハケ目を施す。頭部から体部にかけて焼成不良である。109は体部内面に横方向のハケ目、口縫内面は横方向のナデ、外面は焼成不良のため不明。頭部内側の縫は明顯である。110は体部外面を縫方向のハケ目、内面を斜め方向のハケ目、内面は斜め方向のハケ目を施す。111から113は底部片で

S1025

Fig. 51 S1025出土遺物素描図① (1/3)



SI025

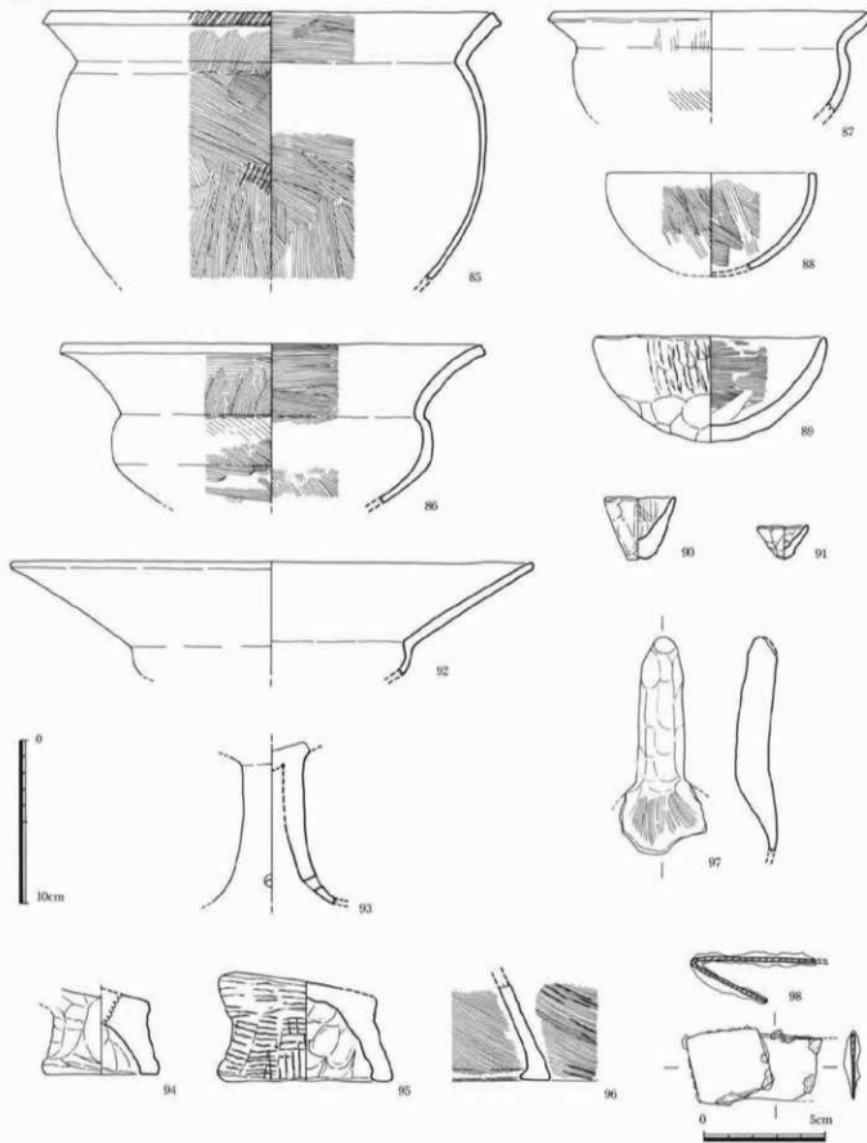


Fig.52 SI025出土遺物実測図② (1/3) 鉄製品 (1/2)

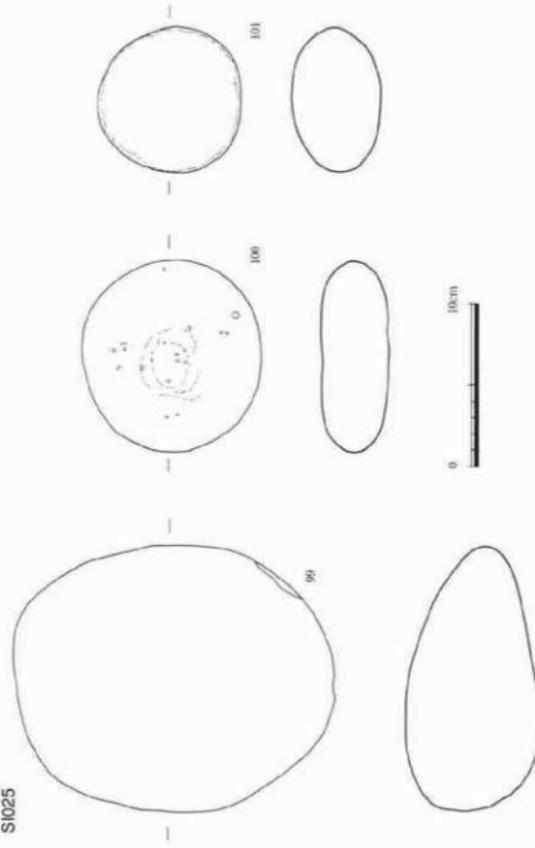


Fig.53 SI025出土遺物実測図③ (1/3)

111は内外面ともに縦方向のハケ目を施す。112、113は平底を呈し、小型である。112は外面部を不定方向のナデ、113は外面をハケ目、内面を不定方向にナデで調整する。114は塊（壺）の体部片で、上部に断面三角形、下部に断面円形の突起が貼り付けられる。焼成不良で調整は不明。
鋤型土器 (115～119) 115、116は平底の鉢で115は外面底部までハケ目、内面は丁寧にナデが入る。焼成は良好で、小粒数が比較的多く入る。116はほぼ光形で、全体的に黒灰色を呈し、外面に縱方向のハケ目、内面には不定方向にナデを施す。口縁部に沈殿が約2.3mmする。117は体部外面をハケ目、内面を縦方向にナデが入り、口縁部は横方向にナデする。内外面に黒斑が残る。118は精選された粘土で器壁が薄い丸底になる鉢である。体部下面下半にハケ目後、ナデ調整され、口縁部は横方向にナデが入る。内面は丁寧にナデを施す。119は小型の鉢で平底を呈し、外面はミガキに近い縦方向の工具痕が残る。内面は不定方向にナデを施す。

支脚型土器 (120～123) 120は体部から口縁部が直に立ち、121は根部が直に踏ん張る。外面には指頭痕が残る。122、123は器台に近く、輪部が開き、122は外側を縱方向のハケ目、内面は縦方向のナデで輪部を横方向にナデで調整する。123は内厚で外側は縦方向のハケ目。内面は縦方向にナデ、輪部を横方向にナデする。
石製品 (124～127) 124は砂岩製の砥石で1面のみの使用痕が残る。125、126は花崗岩製の小型の磨石である。127は結晶片岩製の石臼で半分が欠損している。紺穴開の芯と研磨部は約2.5cm、背までは0.9cmである。

SI035 (Fig.56, Pl.46)

壺型土器 (128～130) 128は底部が失り氣味になる丸底で、内外面にハケ目が施され、黒斑が残る。129はレンズ形の底部で、胎土に小砂粒を多く含み、焼成不良のため調整は不明。130は二重口縁兼の口縁部で接合面から剥離している。内面に横方向のハケ目を施す。
鋤型土器 (131～133) 131は腹部内側の棱が明顯で、体部外側中位にタスキ後、縦方向のハケ目を施し、口縁外面は斜め方向にハケ目が入る。体部内面は斜め方向にハケ目、口縁内面には横方向のナデを施す。2ヶ所に黒斑が残り、内外面とも淡黄褐色を呈する。

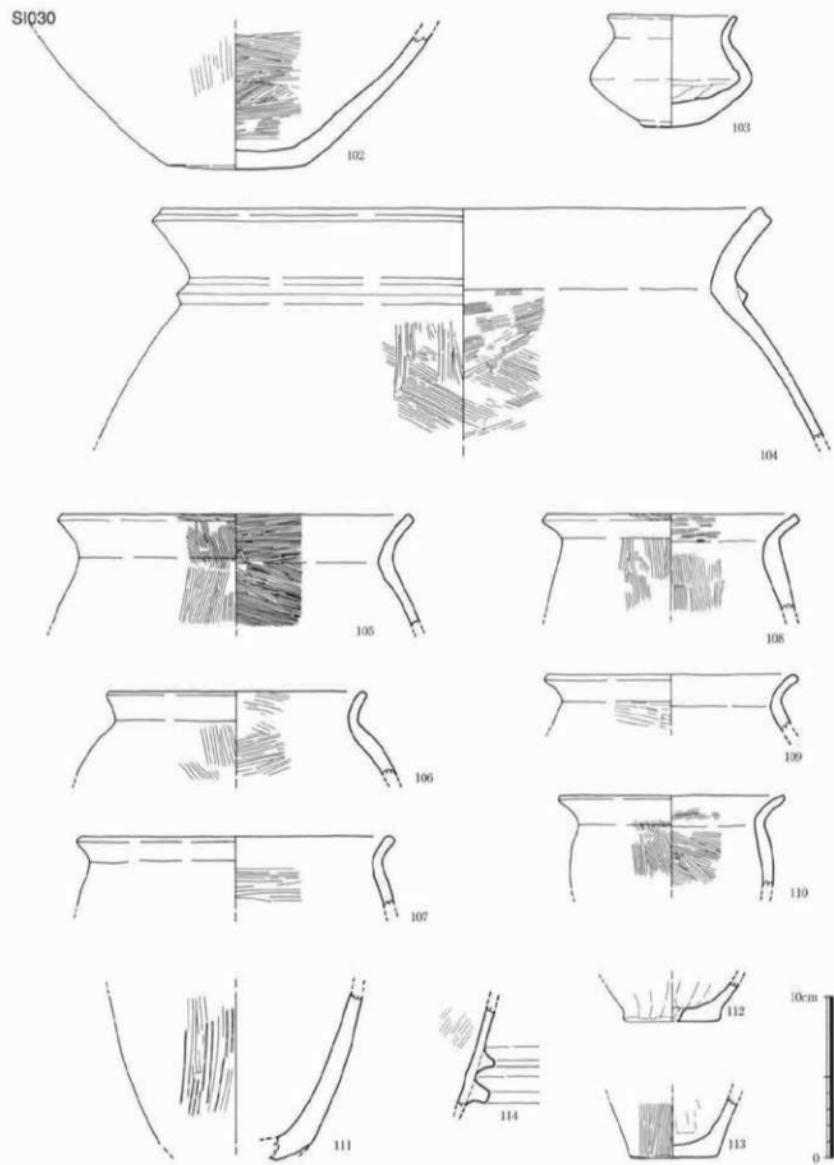
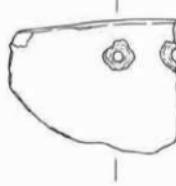
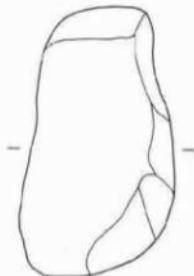
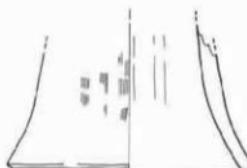
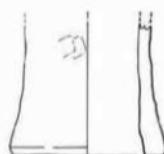
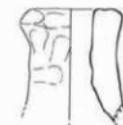
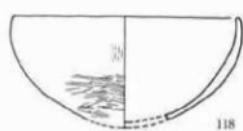
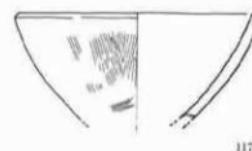
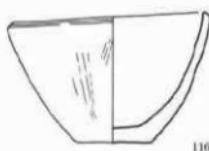
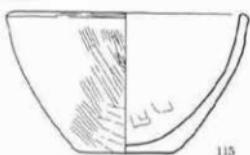


Fig.54 SI030出土遺物実測図① (1/3)

SI030



0 10cm

0 5cm

Fig.55 SI030出土遺物実測図②(1/3) 石包丁(1/2)

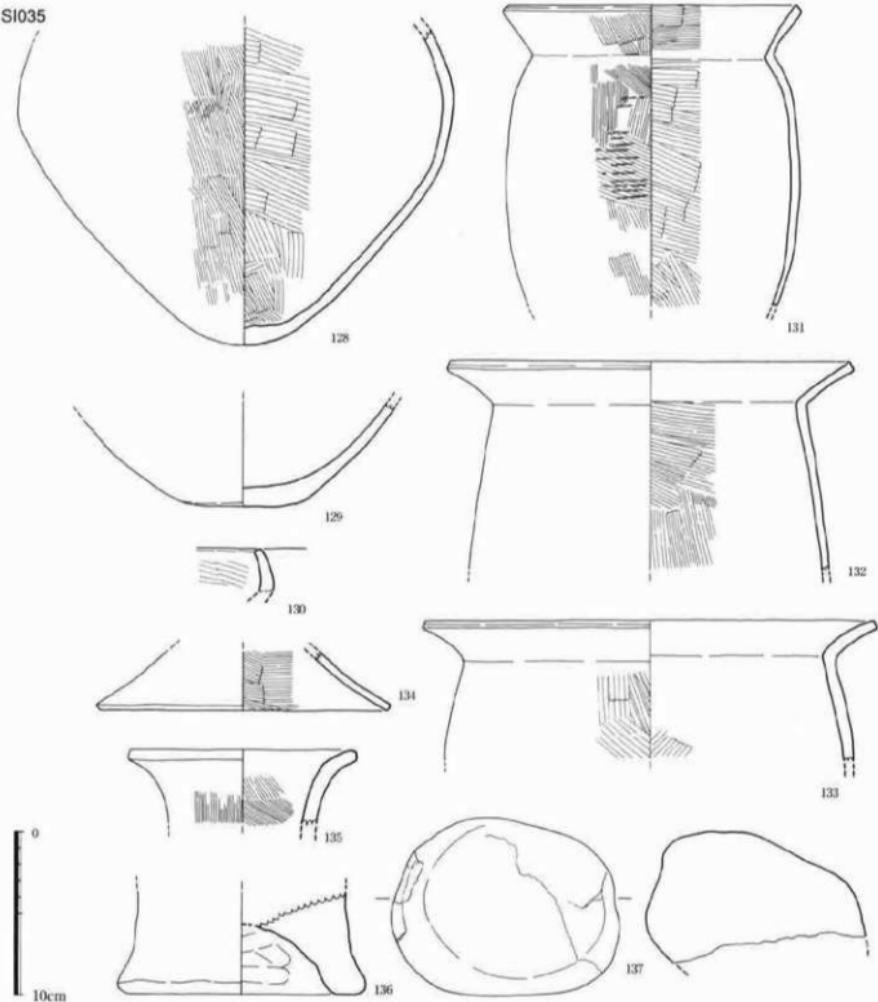


Fig.56 SI035出土遺物実測図③ (1/3)

132は頸部屈曲が明瞭な壺で、外面は磨耗のため調整は不明。内面はハケ目が入る。口唇部に浅い沈線が巡る。133は外面にハケ目、内面にナデを施す。焼成は不良である。

高壺型土器（134） 外面は縱方向のナデ、内面はハケ目を施す。胎土はよく精選されている。焼成は不良で外面は明橙茶色、内面は淡黄褐色を呈する。

器台型土器（135） 口縁部片で、内外面ともにハケ目を施す。胎土には小砂粒が多く入り、焼成は不良。
支脚型土器（136） 粗雑な作りで厚みのある支脚で胎土は精選されており、植物痕が看取できる。内外面にナデを施す。焼成は不良で内外面ともに明赤褐色を呈する。

石製品（137） 不明石製品で叩き石等の類か。

SI050 (Fig.57, Pl.47)

壺型土器（138） 複合口縁壺で、口縁が内側に屈曲する。外面は縱方向のハケ目、口縁端部外面は横方向のナデ、内面はハケ目、口縁端部内側は横方向にナデが入る。焼成は良好で、淡黄灰色を呈する。

壺型土器（139） 口縁屈曲から後が入り、胴部が張らない壺で、体部外面はハケ目、内面は縱方向にハケ目が入る。全体的に焼成が不良で調整が不鮮明である。

器台型土器（140） 肉厚で体部外面に縱方向の強い工具痕が残る。内面は縱方向のハケ目を施す。

SI070 (Fig.57~58, Pl.47, 48)

壺型土器（141） 底部片で、丸底を呈する。胎土に小砂粒が多く入り、内外面ともにハケ目が施される。

壺型土器（142~147） 142は体部外面にタタキが残り、口縁部は縱方向のハケ目が入る。体部内面はハケ目が施される。淡黄褐色を呈する。143は体部外面に縱方向のハケ目、体部内面は斜め方向のハケ目、口縁内面は横方向のハケ目を施す。比較的薄い器壁で、淡茶褐色を呈する。144は外面口縁付近まで縱方向のハケ目、体部内面は斜め方向のハケ目、口縁内面は横方向のハケ目を施し、淡黄褐色を呈し、外面に黒斑が残る。145は口縁部屈曲が明瞭で、外面の口縁一部にまでタタキが入り、内面はナデを施す。焼成はやや不良で淡黄灰色を呈する。146は口縁小片で、口縁外面ナデ、内面は横方向のハケ目を施す。147は丸底で内外面ともにハケ目を施す。

鉢型土器（148~152） 148は体部外面にタタキに似た工具痕が残り、ナデ消している。内面は横方向のナデを施す。149はく字口縁をもつ鉢で、口縁屈曲が明瞭である。調整は磨耗のため不明。150はく字口縁の鉢で、体部外面は口縁部までハケ目、底部に近い部分でハケのような工具痕が残る。内面はハケ目を施す。内外面に黒斑が残る。152は口縁部が直に立つ小型の丸底（壺）で、外面底部から体部の屈曲までをヘラケズリに近い工具痕が残り、体部の屈曲から頸部にかけて斜め方向のハケ目、口縁部は縱方向のハケ目後、横方向にナデを施す。内面はハケ目である。

高坏型土器（153~154） 153は脚部片で磨耗が著しいため調整は不明であるが、胎土は精選されている。154は脚部片で内外面ともにハケ目を施す。

土製品（155~156） 共にメンコ状土製品で壺片である。

SI070床面 (Fig.58, Pl.48)

壺型土器（157~158） 157は外面屈曲下半は不定方向のハケ目、内面はナデ、口縁内外面は横方向のナデ。158は口縁が直に立ち上がりをもつ壺で器壁が薄い。焼成不良で調整は不明。

SI070住居内土壠 (Fig.58, Pl.48)

壺型土器（159） 壺小片で、口縁屈曲が明瞭である。磨耗のため調整は体部外面にハケ目が看取できるのみである。小砂粒を若干含み、淡黄褐色を呈する。

鉢型土器（160~162） 160は口縁を端部を内湾させ、体部外面から底部にかけてミガキ、ケズリとも捉えられる工具痕が残る。内面はハケ目後、ナデで仕上げる。161は小型の鉢で、体部外面にケズリのような工具痕が残り、口縁内外面は横方向にナデを施す。162はミニチュアの鉢で外面をハケ目、内面をナデで調整する。

SI075 (Fig.58~59, Pl.48~50)

壺型土器（163~168） 163は体部外面をハケ目、内面を斜め方向のハケ目、口縁外面は縱方向のハケ目、内面は斜め方向のハケ目を施す。165は底部が凸レンズ状を呈し、体部外面縱方向のハケ目、内面はハケ目、底部はナデで調整する。164は無頭壺で口縁が内側に入る。体部内外面をハケ目、口縁内外面を横方向にナデする。166は丸底の壺で、球形を呈する。外面は内外面ともにハケ目を施す。167、168はく字口縁の壺で胴部最大径部分に縱方向のハケ目、体部下位に横方向のミガキが入る。内面上位は横方向のハケ目、下半に不定方向のハケ目を施す。2点は同一個体の可能性があるが接合面がない為、あえて

別図にしている。

壺型土器（169～175） 169は外面を斜め方向のハケ目、内面は横方向のハケ目。170は外面ハケ目、内面はナデ。171は口縁端部を内側に摘み上げる。外面は縱方向のハケ目後、横方向のナデ、内面は横方向のハケ目を施す。172は口縁部屈曲が明瞭で体部外面ハケ目、内面は不定方向のナデ、口縁外面は縱方向のハケ目後、横方向のナデを施す。173は体部内外面にハケ目を施す。174は胴部片で内外面ともにハケ目を施す。175は底部片で丸底を呈するものと考えられ、内外面ともにハケ目を施す。

鉢型土器（176～186） 176から179は丸底の鉢で、176は体部外面が焼成時にひび割れしている。内外面共にナデ調整。177は内面をナデ、外面は磨耗により不明。178は体部外面から底部をケズリを施したような工具痕が残り、内面はナデを施す。坏の範疇に入れてよいのではないか。179は尖り気味の底部を有する鉢で、底部外面から体部の一部分にケズリのような工具痕が残り、内面はハケ目後、ナデが入る。180は底部が厚く、体部外面は焼成時にひび割れをおこしている。体部下半から底部にかけて、ケズリのような工具痕が残る。内面は不定方向のナデ。181は大ぶりの鉢で、口縁部が肉厚で口唇部を平坦に仕上げる。内外面ともにハケ目、外面に黒斑が残る。182、183は壺とも捉えられる小片である。外面は縱方向のハケ目、内面は口縁部が横方向のハケ目、体部がナデである。184は無頸の壺で体部から口縁部にかけて直線的に立ち上がる。体部内外面ハケ目、口縁部は横方向のナデが入り、外面には黒斑が残る。185はく字に開く鉢で、脚付きの可能性がある。内面をナデ、外面は磨耗のため不明。186は小型の鉢で、口縁部を外側に摘み出す。焼成不良で磨耗のため調整は不明。

高环型土器（187～189） 187は外面を刷毛目を施す。188、189は脚部で188は内外面ともにハケ目を施す。189は2ヶ所に穿孔が施され、欠損部分を復元すると4ヶ所の穿孔が想定される。内外面ともにハケ目、焼成は不良である。

土製品（190～191） 不明粘土塊で、190は精選された胎土で淡黄褐色を呈する。191は淡黄褐色である。
SI080 (Fig.60, Pl.50)

壺型土器（193～194） 口縁がく字に開く壺で、口唇部に刻み目を施す。外面はハケ目、内面はナデを施す。194は口縁が直に近い立ち上がりの壺で、体部内外面はケズリに近い工具痕が残る。口縁部は内外面共に横方向のナデを施す。

鉢型土器（195～201） 195は完形の平底鉢で、全体的に黒灰色を呈し固く焼き締まっている。外面はハケ目であるが、底部付近にケズリが入る。内面は丁寧なナデを施す。196から201はほぼ完形の丸底鉢で、196、197、198は焼成時のひび割れが残る。196外面を不定方向のハケ目、内面はコテ当てのような工具によるナデが残り、底部には黒斑が残る。197、198は体部下半から底部にかけてケズリが入り、内面は不定方向のナデを施す。200の外面はハケ目後、ナデ消している。斜め方向のハケ目を施す。199、201は薄いつくりで、内外面をハケ目で仕上げている。共に土師器坏の範疇に入るものである。

SI080柱穴 (Fig.60, Pl.51)

壺型土器（203） 口縁部小片で、内外面ともに横方向のナデ。淡茶褐色を呈する。

鉢型土器（202） 小型のく字口縁になる鉢で、内外面ともにハケ目で淡黄褐色を呈する。

SI080第1床面 (Fig.60, Pl.51)

壺型土器（204） 平底の壺で、内外面ともにハケ目。外面は淡茶黒色、内面は淡茶褐色を呈する。

鉢型土器（205） ミニチュアの鉢で皿に近い。内外面に指頭痕が残り、ナデで調整する。黒斑が残る。

SI080第2下床面 (Fig.60, Pl.51)

壺型土器（206） 193に近似した壺で内外面にハケ目を施す。口唇部に刻み目を有する。

石製品（207～208） 207は不明石製品で磨石の類か。208は黒曜石製の剥片錐で抉り部分を丁寧に作る。

SI080住居内土壤 (Fig.60, Pl.51)

鉢型土器（209） 小片であるが、体部外面に横方向のケズリが入り、口縁は斜め方向のハケ目、内面は横方向にナデを施す。

石製品（210） 210は不明石製品で磨石の類か。

土製品（211） 不明土製品で、棒状のもので穿孔されたような痕跡が残る。

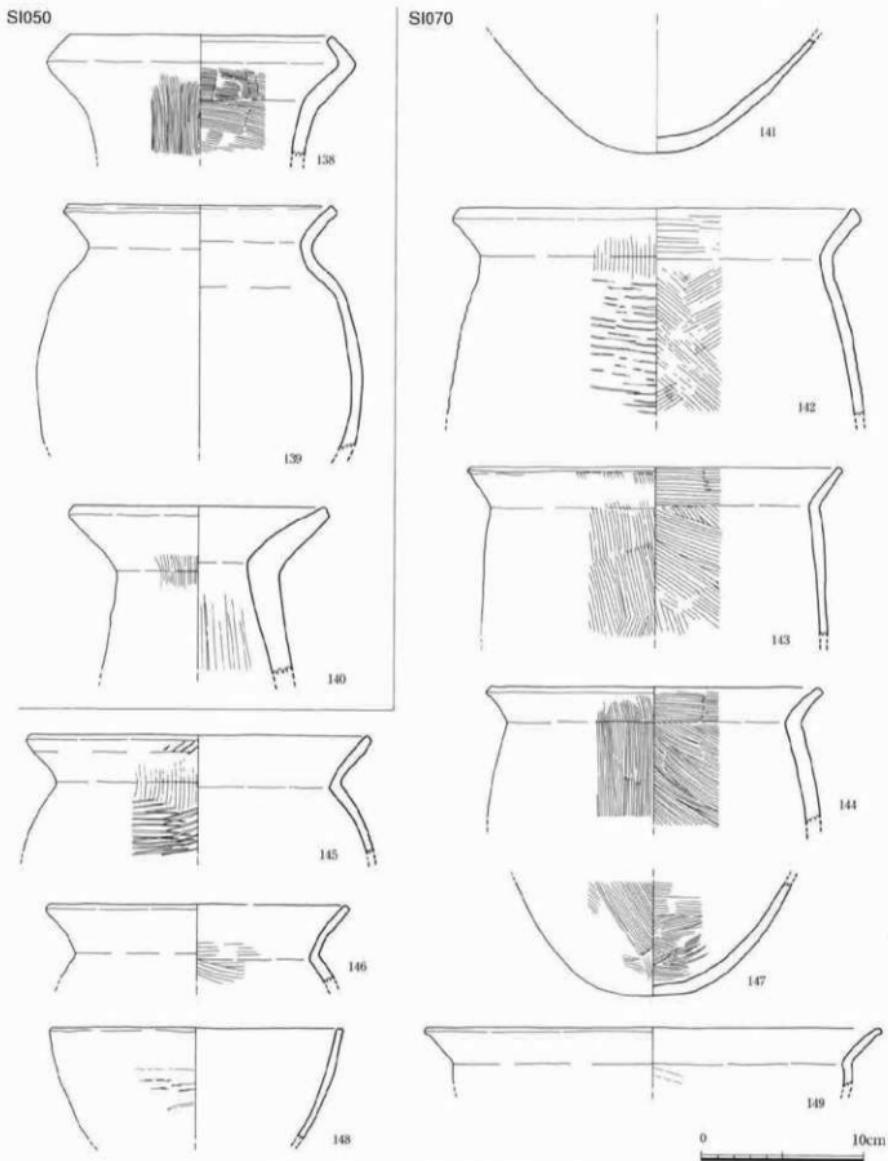


Fig.57 SI050・070出土遺物実測図① (1/3)

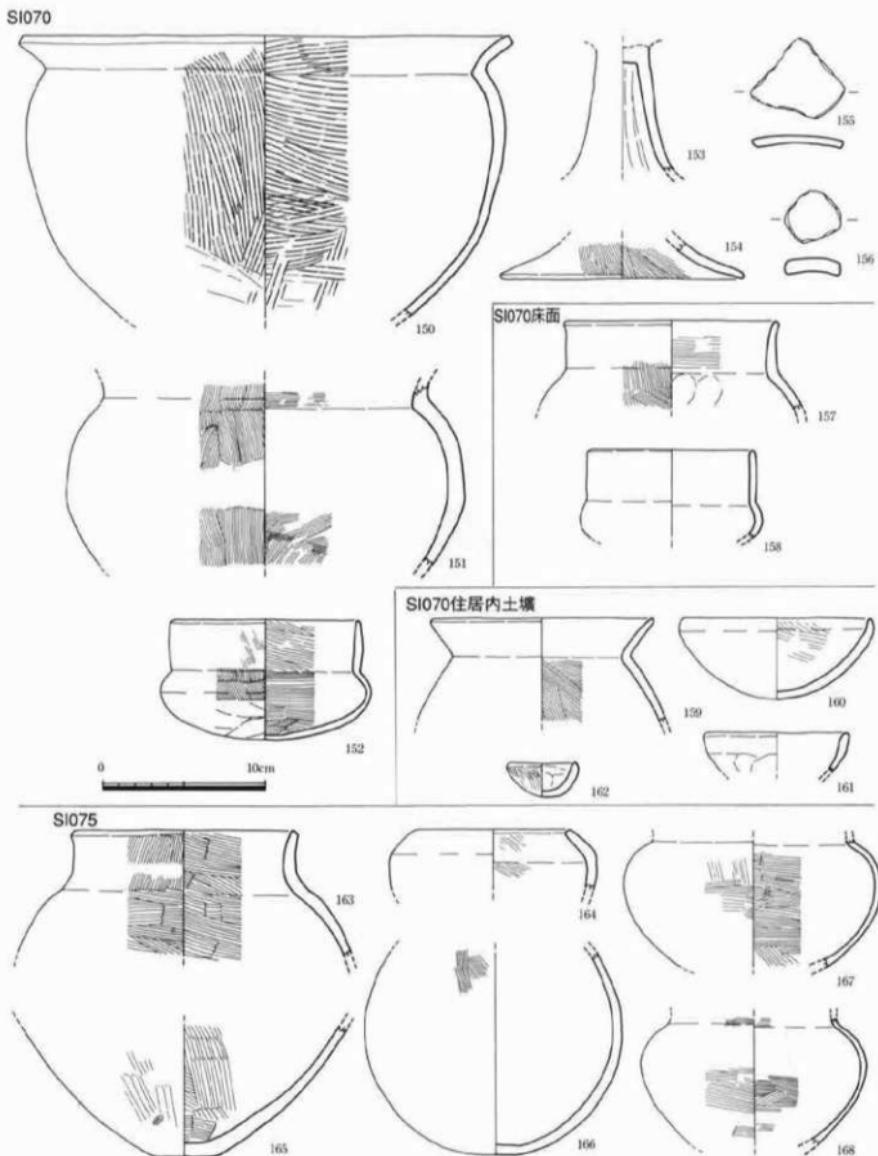


Fig.58 SI070・075出土遺物実測図② (1/3)

SI075

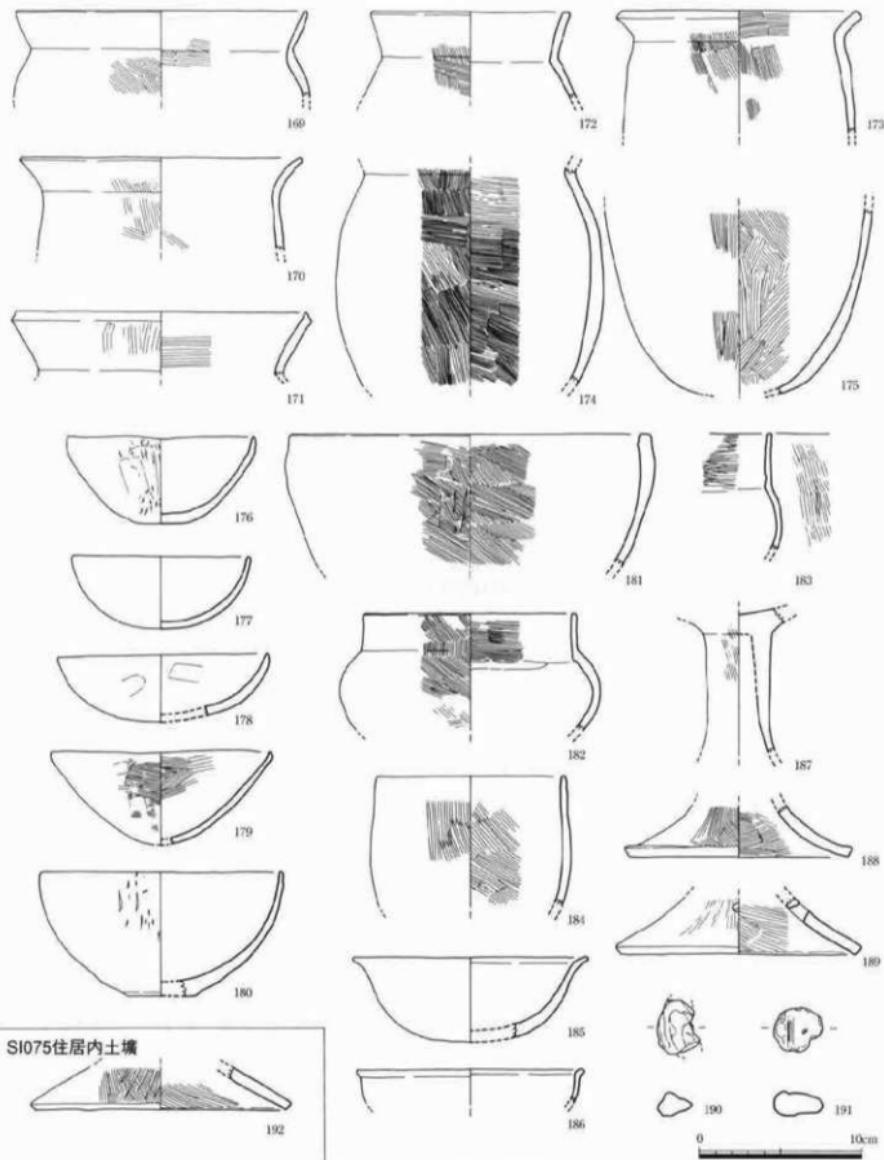
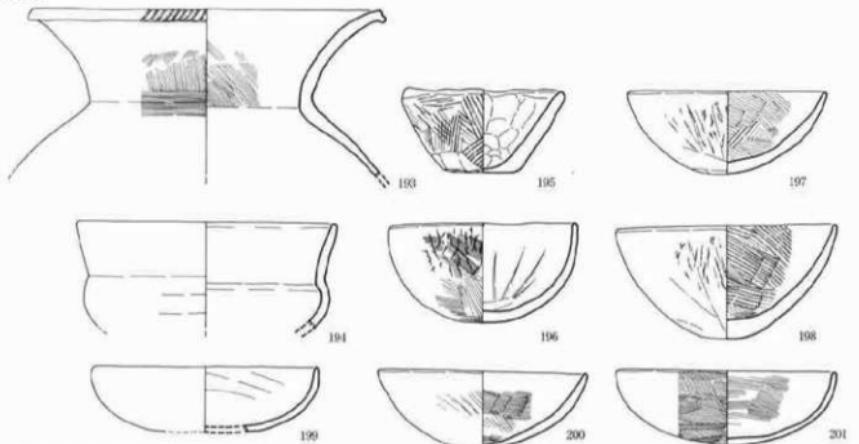


Fig.59 SI075出土遺物実測図③ (1/3)

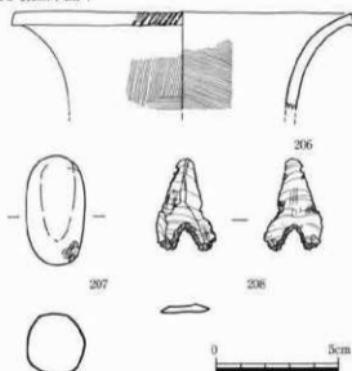
SI080



SI080 柱穴



SI080 第2床面下



SI095

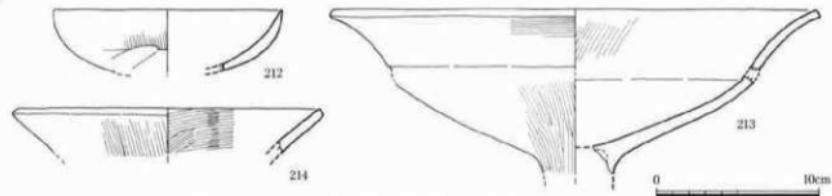


Fig.60 SI080・085・095出土遺物実測図 (1/3) 石製品・土製品 (1/2)

SI095 (Fig. 60, Pl. 51)

鉢型土器 (212) 基土がよく精選されており、外側は底部ケズり、体部ハケ目、口縁幅方向のナデ、内面は横方向のナデで調整する。焼成は良好で淡赤褐色を呈する。

高杯型土器 (213)

口縁部が屈曲し外反する高杯で、底部外面に縦方向のハケ目、内面はナデを施す。

器合型土器 (214) 口縁部片で外面はハケ目後、ナデ、内面は横方向にナデを施す。

SI100 (Fig. 61, Pl. 51, 52)

鉢型土器 (215～217) 215は頭部が若干縮まる形で、体部内外面を横方向のハケ目、口縁内外面を横方向にナデを施す。216は外側を縦方向のハケ目、体部内面を斜め方向のハケ目、口縁は横方向のハケ目を施す。217は口縁屈曲が明顯で、体部外面を縦方向のハケ目、口縁は横方向のナデ、体部内面は斜め方向のハケ目を施す。

SI105 (Fig. 61～62, Pl. 52)

壺型土器 (222～223) 222は底部片で平底を呈す。体部外面にハケ目を施す。底部外面はナデを施す。

223は底部片で平底を呈する。内外面ともにハケ目を施す。

模型土器 (220～221) 220、221は同一個体と考えられるが接合面がない為、別図にしている。口縁屈

曲の痕は明瞭である。体部外面を横方向のハケ目、口縁は横方向のナデ、体部内面は斜め方向のハケ目、

口縁は横方向のハケ目を施す。

模型土器 (220) 平底の鉢で、内外面底部にまでハケ目を施す。底部外面に黒斑が残る。

高杯型土器 (225) 壺部片で口縁が屈曲し外反して、口縁端部で更に外反する。内面に横方向のミガキ、

外側には波状の磨文と横方向のミガキを施し、淡茶褐色を呈する。

器台型土器 (226) ミニチュアの器台で、内外面を横方向にナデを施す。

石製品 (227～230) 227は頁岩製の石剣で刃先部を欠損する。研ぎの方向に縞が出ており、基部を折損

した後に2次加工をして再利用している。残存長約7.1cm、幅3.2cm、厚さ0.7cmを測り、2本の歯は明

瞭で、丁寧な作りである。228はサヌカイト製の石礫である。229、230は不明石製品で磨石の類か。

SI105床面 (Fig. 62, Pl. 53)

石製品 (231) 縮泥片岩である。

SI105住居内土塊 (Fig. 62, Pl. 53)

鉢型土器 (232) は完全形の鉢で、外側をハケ目、内面の口縁部を横方向のナデ、底部から体部にかけてを不定方向のナデを施す。焼成良好で淡茶黒色を呈する。外側に黒斑が残る。

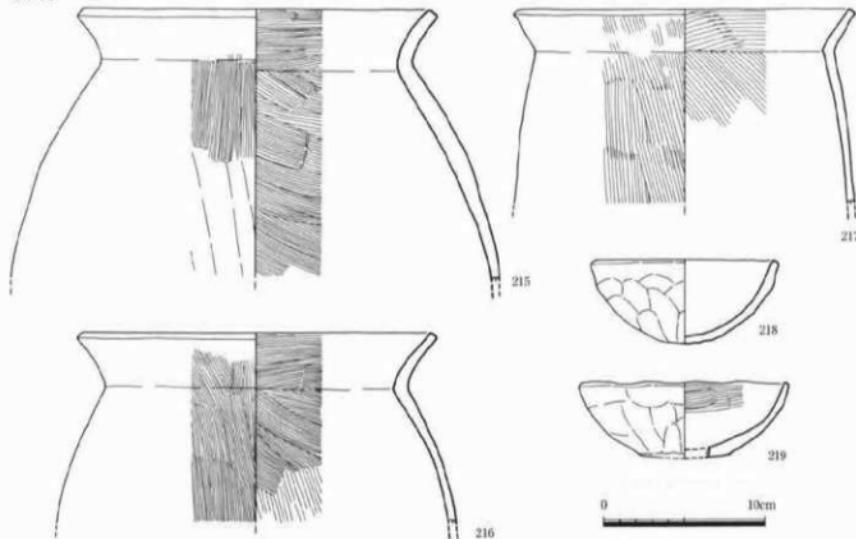
模型土器 (233) 口縁部が若干欠けた形で、平底を呈する。体部外面を縦方向のケズり、底部をケズり、口縁部にナデを施す。内面は縦方向に工具紋が残り、口縁部は横方向のハケ目を施す。固く焼き締まり、黒灰紫色を呈する。

石製品 (234) 不明石製品で磨石の類か。

SI105床下 (Fig. 62, Pl. 53)

石製品 (235) サスカイト製の石礫で、切先部を欠損する。粗い作りで抉部が退化している。

SI100



SI105

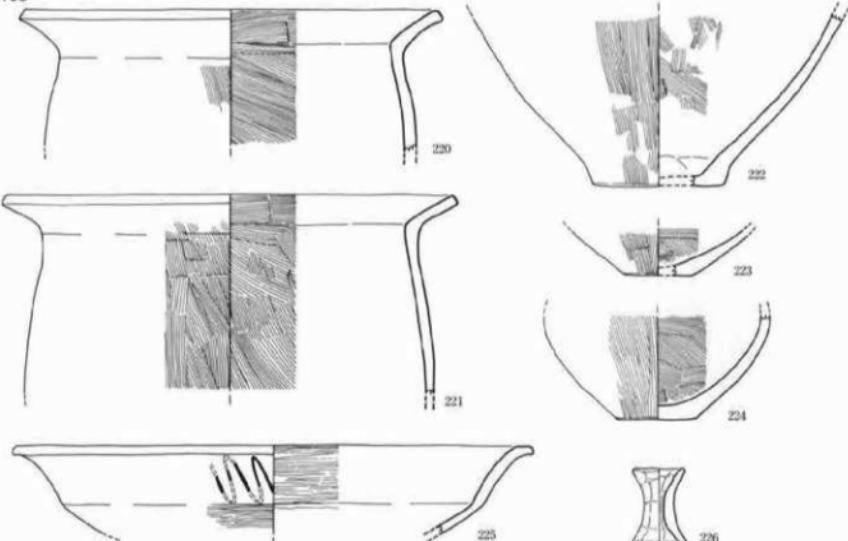


Fig.61 SI100・105出土遺物実測図① (1/3)

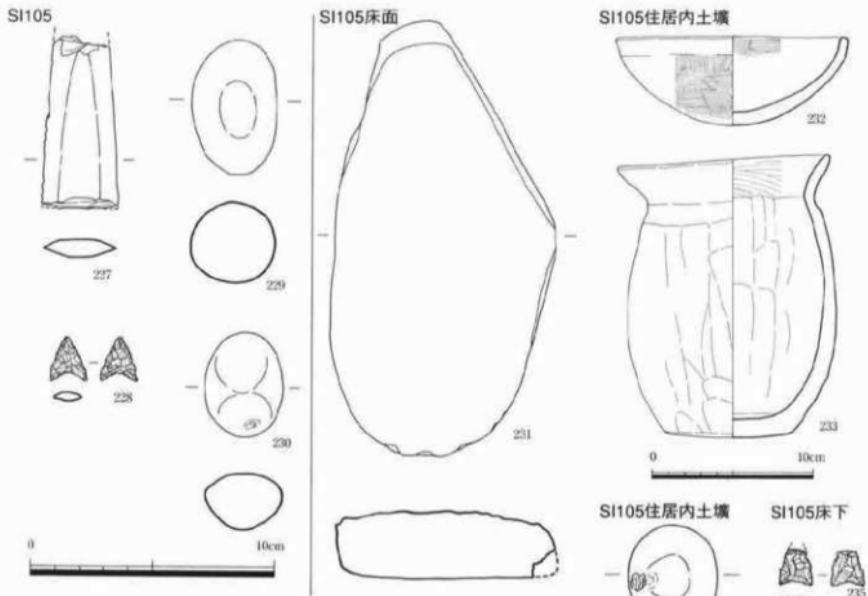


Fig.62 SI105出土遺物実測図(2) (1/3)

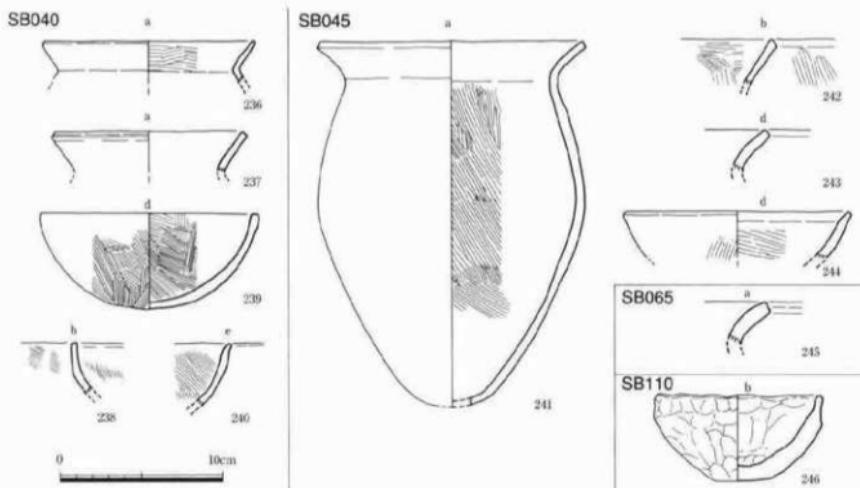


Fig. 63 挖立柱建物出土遺物実測図 (1/3)

S0B040 (Fig. 63, Pl. 53)

ビット a (断測図No. S-66)

変型土器 (236～237) 236、237ともに小型の壺で、236は口縁部内面は横方向のハケ目、外面は横方向のナデを施す。口縁屈曲の棱は明顯である。237は内外面ともに横方向のナデを施す。

ビット b (断測図No. S-61)

変型土器 (238) 内外面にハケ目を施す薄手のつくりである。内外面ともに淡黄褐色である。

ビット d (断測図No. S-63)

外型土器 (239) 体部内外面を不定方向のハケ目を施し、口縁外面は横方向のハケ目を施す。

ビット e (断測図No. S-64)

外型土器 (240) 内面にハケ目を施し、磨耗のため外面の調整は不明である。

SB045 (Fig. 63, Pl. 53, 54)

ビット a (断測図No. S-42)

変型土器 (241) 口縁部と底部の破片資料で、尖り氣味の丸底を呈する。外面は底部から体部中位までケズリ、口縁は横方向のナデ、内面は体部が不定方向のハケ目、口縁部は横方向のナデを施す。

ビット b (断測図No. S-41)

変型土器 (242) 外縁を縱方向のハケ目、内面を横方向のハケ目を施す。口縫部に工具による段が入る。

ビット d (断測図No. S-77)

変型土器 (243) 磨耗が著しく内外面ともに調整は不明。

ビット e (断測図No. S-48)

外型土器 (244) 体部が内凹し、口縁部で若干外反する。磨耗が著しく調整は不明。

SB065 (Fig. 63, Pl. 54)

ビット a (断測図No. S-68)

変型土器 (245) 外面を横方向にナデ、内面は磨耗が著しいため不明。

SB110 (Fig. 63, Pl. 54)

ビット b (断測図No. S-48)

外型土器 (246) ほぼ完形の体で、凸レンズ状の底部を呈し、外面は指痕と焼成時のひび割れが残る、内面は不定方向のナデを施す。内面が暗黒灰を呈し、外面は淡黄褐色を呈する。

SX005

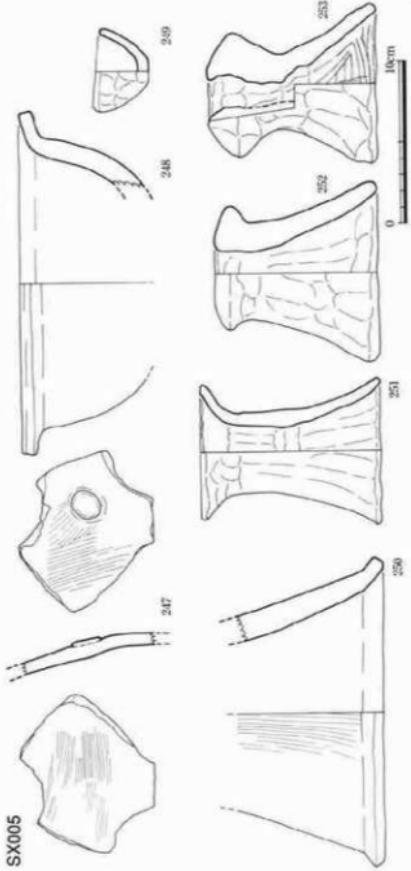


Fig. 64 SX005出土遺物実測図 (1/3)

SX005 (Fig. 64, Pl. 54)
类型土器 (247) 剥離片とを考えられ、外面にボタン状の粘土を貼り付けている。粘土は3mm程度の小砂粒を多く含み、内外面に不定方向のハケ目を有する。

鉢型土器 (248～249) 248は土器内部が剥離しており、接着している。内外面ともに磨耗が著しく不明で、淡褐色を呈する。249はほぼ完形のミニチュアの鉢で、内外面ともにナデを施す。外面に黒斑が残る。丁寧なつくりである。
器皿削土器 (250～251) 250は外面を縱方向のハケ目、内面をナデで仕上げる。裾端部の内外面は横方向のナデを施した為、粘土が内側に移動している。
支脚削土器 (252～253) 252, 253ともに天井部に円形の穿孔があり、天井部をナデ、外面体部から裾部にかけて横方向のナデ、内面は横方向のハケ目に近い工具痕が残る。253は完形である。

SX011 (Fig. 65, Pl. 55)

磁器 (254) 白磁碗で、全面に背みがかった釉をかけ、高台置付が露呈。底土はきめ細かく精良である。

SX022 (Fig. 65, Pl. 55)

土師器 (255) 鉢の口縁とと考えられ、外面を縱方向の工具痕が残り、内面をヨコナデを施す。

SX036 (Fig. 65, Pl. 55)

外型土器 (256～257) 256は口縁部にかけて内湾する鉢で、外面は底部をケスリ後、ナデ、体部を斜め方向の工具痕、口縁部に横方向のナデを施す。内面には不定方向に工具によるナデが入る。丁寧な作りで美しい。257は脚付鉢の坯部片で、外面は体部を縱方向のハケ目、口縁部を横方向のナデ、内面は不定方向にナデ、口縁部は磨耗が著しいため不明。

SX047 (Fig. 65)

土師器 (258～259) 共に小皿で、体部内外面をヨコナデ、底部斜切りである。258は復元口径7.8cm、器高1.8cm、底径4.2cm、259は復元口径6.8cm、器高1.7cm、底径3.6cmである。

磁器 (260) 集合碗片で外面に文様を入れる。具須はくすんだ青色を呈する。復元口径9.6cm。

SX072 (Fig. 65, Pl. 55)

类型土器 (261) 器台の可能性があるが、外面は磨耗が著いため不明、内面は横方向のナデ。

外型土器 (262) 内外面に横方向のナデを施す。外面を淡黄褐色、内面は淡黄褐色を呈する。

SX074 (Fig. 65, Pl. 55)

土師器 (263) 口縁が外側に屈曲し、外面にスタンプが入るが磨耗が著しいため不明。内面は断紫橙色の付着物が見られる。外面は淡黄褐色である。

陶器 (264) 瓢片で、外面体部に淡黄青褐色の釉がかかり、高台外面は露胎、内面には透明釉がかかり、見込みにキャ取りが見られる。

土器品 (265～266) 265は軽半瓦片で、内外面ともにナデを施し、淡橙褐色を呈し、焼成不良。266は棒状土器品で4面をナデで仕上げ、2次的に1面のみ火を受けており、鉢物が壊解した付着物が残る。

SX078 (Fig. 65)

类型土器 (267～269) 267の外面は体部を縱方向のハケ目、口縁をナデ、内面の体部は横方向にナデ、口縫部は横方向のハケ目を有する。口唇部に沈線が遺る。268, 269は口縁外面をナデ、口縫内面を横方向のナデを施す。269は口唇部に浅い刻み目を有する。

鉢型土器 (270) 体部から口縁部にかけて内湾する鉢で、外面をハケ目、内面をナデで仕上げる。

SX083 (Fig. 66, Pl. 55～57)

磁器 (271) 白磁碗で粗製品である。全面施釉で、高台置付をカキ取る。高台径4.4cmを測る。

陶器 (272～274) 272は灯明皿で、内面と口縁外面に灰釉、底外部に白灰色の釉がかかり、口縫端部に焼け付着する。273は瓶の底面部2面で内面と外面に施釉しており、高台内側をケズり出している。船上には小砂粒を含み粗い。274は溜鉢で、全面に暗紫黒色の釉を施す。底土は若干小砂粒が混じるが精良である。

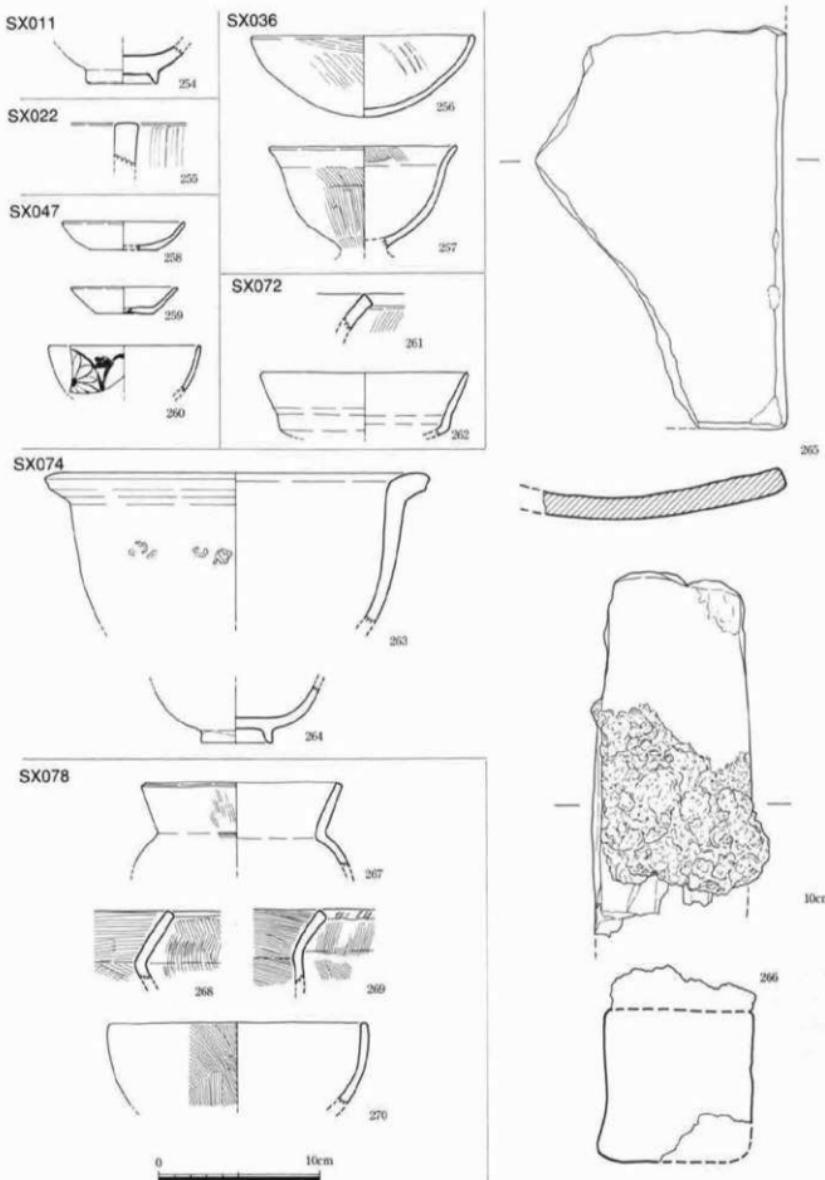


Fig.65 その他、不明遺構出土遺物実測図① (1/3)

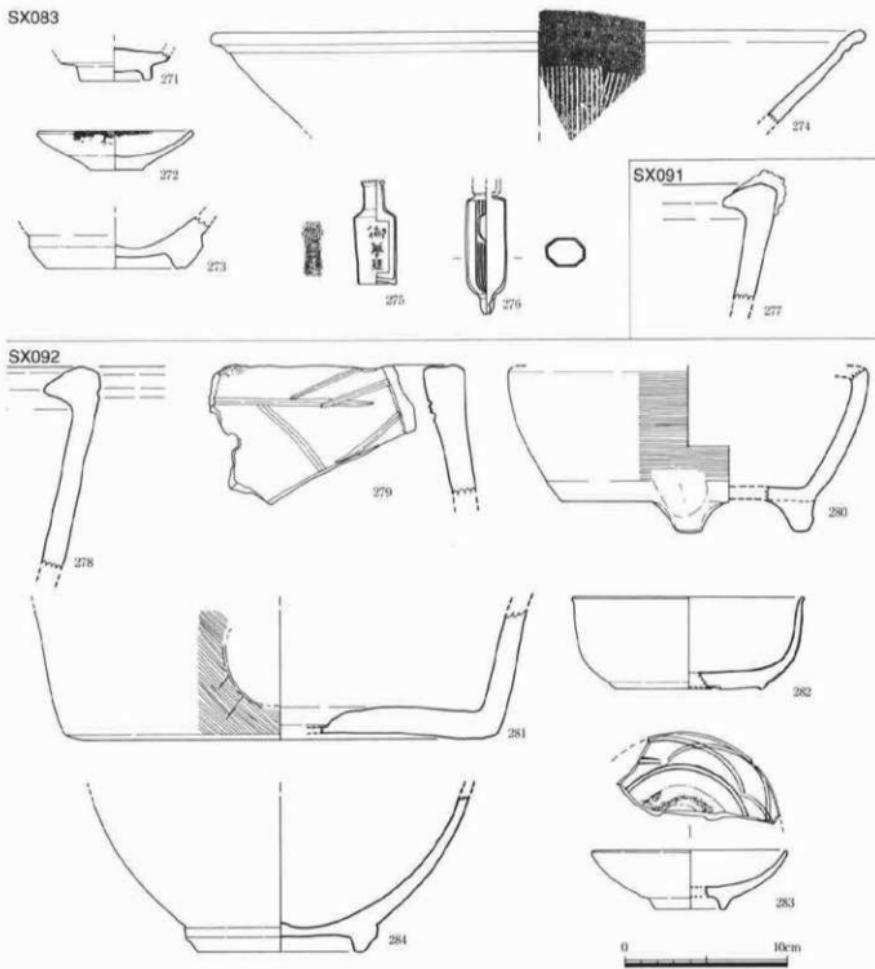


Fig.66 その他、不明遺構出土遺物実測図(2) (1/3)

ガラス製品（275～276） 275は透明の化粧瓶か薬瓶と考えられ、体部に「御夢旭」若しくは「御夢想」の文字が浮き出される。276は青色の目薬瓶である。

SX091 (Fig.66, Pl.56)

土師器（277） 火鉢と考えられ、口縁外面に棒状土製品と同様な付着物が見られ、全面に2次的に熱を受ける。

SX092 (Fig.66, 67, Pl.56)

土師器（278～281） 278は鉢で、火鉢の一種か。内外面ともにナデで仕上げる。279は内面にヘラで沈線を描く。内面に277と同様の付着物が見られる。280は火鉢で体部内外面をヨコナデを施す。281は体

部外面を不定方向のナデ、内面にヨコナデを施す。体部に円孔の一部が見られる。
磁器 (282～283) 282は白磁碗で、外面の高台内側を蛇の目に輪をカキ取る。胎土は精良で青みがかつた透明釉をかける。283は聚付の皿で内面に施し、全面に口味がかった輪をかけ、内面見込み部分の輪をカキ取る。質須はくすんだ青色を呈する。

陶器 (284) 帯になる可能性もあるが、高台以外に断端黒色の輪を施す。

土製品 (285～288) 棒状土製品で各面をナデで調整している。2次的に火を受けており、胎物が融解した付着物が付く。小型から大型まで幾種類が存在している。

SX094 (Fig. 68, Pl. 57)

焼成土器 (289) 口縁部に刺み目を施し、外面は体部をタタキ後、斜め方向のハケ目、口縁部を縱方向のハケ目、内面は斜め方向のハケ目、口縁部は横方向にハケ目を施す。焼成良好で淡茶褐色である。

SX099 (Fig. 68～70, Pl. 57～59)

土動器 (290～291) 290は环で、外面は底部を不定方向のナデ、体部から口縁部をヨコナデ、内面は底部から体部にかけて不定方向のナデ、口縁部付近にヨコナデを施す。胎土がよく精製品である。291は土鍋で、口縁部を丸く仕上げ、その下に突端を貼り付ける。外面は真黒に焼が付着しており調整は不明、内面はヨコナデを施す。

磁器 (292～310) 292は白磁皿で、口縁部を外反させ輪花状に描み出す。全面輪軸であるが、底部内面と高台接地面には輪をカキ取り、全面に買入が入る。293から300は紫付皿である。293は内面に丸文を入れ、口縁部は波板に仕上げる。294は口縁端部を玉縁状に仕上げ、内面に妙口跡が残る。295は内面に梅と竹、外に唐草文様を描く。296は口縁を玉縁状に仕上げ、内面にくすんだ貝須で文様を入れ、底部高台内側の輪をカキ取り。297は内面に丸文、外側に文様を描き、全周輪軸。298は底部内面と高台接地面の輪をカキ取り、内面には山本文を描き、高台端部は露胎する。300は底部の日状に輪をカキ取り、底面部内面に山本文を描き、重ね焼き跡が3ヶ所残る。301は小碗 (环) で外面に文様を描く。302は小碗で手書きの文が入る。301から307は紫付碗である。301は輪を施す。302はくわんか碗で外面に文様を描くが良欠で入れ、高台接地面には砂目捺が残る。302ははげ完全形。308は荷舟碗ではげ完全形。309は筒茶碗である。内面に針文跡が残る。303はくわんか碗で外面に文様を描き、透明に近い輪をかけるが全体的に灰白色を呈する。304は伝東甌で外面に文様を描き、高台端部は露胎する。305は乳白色の釉を施し、外面に文様を描く。306は口縁が若干外反する端反り碗で、内外面に文様を描く。307は外面と底部内面中央に重鉄格子の文様を描く。308は荷舟碗ではげ完全形。外面に青黒色の文様を描く。309は筒茶碗で底部内面に削れた五分花文を入れ、高台接地面には跡目跡が残る。310は蓋で内外面に文様を入れる。

削器 (320～325) 320は小皿で、底部赤切り、内面見込み部分を蛇の目に輪をカキ取る。高台は袖だれしているが、露胎である。ほげ完全形。322は透明に近い輪が施され、高台は露胎。323は小碗で、内外面に透明に近い輪が施される。輪筋は露胎。324は筒茶碗で内外面に暗黒色の輪が施される。325は露輪で内外面に暗紫黒色の輪が施される。

土製品 (311～318) 311から317は棒状土製品である。2次的に熱を受けており、赤褐色に変色し、歓物が融解した付着物が付く。318は本田焼の素焼きの入形で、一部欠損しているが、ほぼ完形である。

瓦製品 (319) 鋼製の管で一部欠損しているがほぼ完形である。玉は水晶製である。

SX101 (Fig. 70, Pl. 60)

焼成土器 (326) 小型の邊で外面を縱方向のハケ目、内面を斜め方向のハケ目を施す。326は完全形で外側に黒斑が残る。

土製品 (329) 土製の有孔円盤で中央に穿孔があり、ほぼ完形である。

SX113 (Fig. 70, Pl. 60)

鉢形土器 (330) 底部片で、平淡を呈し、内面はナデ、外側は成型時の穿孔が見られる。外面は不定方向にハケ目を施し、内面はハケ目後、ナデを施す。

土製品（331～332）331、332は不明土製品で、331は端部に穿孔の痕跡が残る。調整は消耗のため不明。
332は右手で粘土を握っただけの成形で焼かれた土製品で一部に欠損が見られる。

SX117 (Fig.70, Pl.60)

斧形土器（333～334）333は小型の筆で内面に粘土接合跡跡が残りハケ目を施し、外面は磨耗のため不明。334は新しいしは鉢の底部片で外表面は磨耗のため調整は不明、内面は工具によるナデの痕跡が残る。
鉢形土器（335～337）335は手すくねの小型鉢で、尖底である。外面は全体的に指頭痕が残り、調整は内面面ともにナデである。336はミニチュアの鉢で指頭痕が残り、粗雑なつくりである。337は小型の口縁がくぐりになる鉢片で内外面に指頭痕が残る。

石製品（338）砂岩製の砾石である。

斧形土器（Fig.70, Pl.60, 61）直槽上面の包含層出土遺物である。

斧形土器（339～340）339は凸レンズ状の底部片で外面は磨耗のため調整は不明、内面は縱方向の工具痕が残る。外面に黒斑が残り、胎土には角閃石がある。340は口縁部片で端部外面にに刻み目を施し、外面を横方向のナデ、内面はハケ目後、ナデを施す。胎土がよく精選されている。

鎌形土器（342～345）342は外面を不定方向のハケ目、外面に黒斑が残る。343は外面をハケ目、内面はケズリに近い工具痕が残る。焼成不良である。344は体部外面をハケ目、口縁部は内外面を横方向にに刻み目を施す。345は口縁部外面を縦方向のナデ、内面を横方向のハケ目、口唇部に浅い刻み目を施す。体部は外面は斜め方向のハケ目、内面はナデを施す。

鉢形土器（341）口縁がく字になる鉢で、内面をナデ、外面は磨耗のため不明。

石製品（346）黒曜石製の石鉢で、先端と抉り部を欠損する。

擦乱出土遺物 (Fig.71～72, Pl.61～63)番号は略測図番号である。

S-9

鎌形土器（347）複合口縁部で、横方向のナデを施す。

鉢形土器（348）小型の口縁が若干内湾する鉢で、外面には指頭痕が残り、内面はナデである。

S-27

土師器（349）鉢の口縁片で外面に波状文が施される。内外面ともにヨコナデである。

磁器（350）染付碗で外面に斜格子の文様を描き、呉須は淡灰緑色で、透明に近い釉を施す。

陶器（351）片口鉢で全面施釉をするが、焼成不良である。

S-32

鉢形土器（352）外面は磨耗のため不明。内面は縦方向のナデを施す。

S-34

壺型土器（353）口縁部片で、内面を横方向のナデを施す。外面は磨耗のため不明。

S-76

鉢形土器（354）く字口縁の鉢で外面を口縁近くまでタタキ後、ハケ目を施し、体部内面は斜め方向のハケ目、口縁内面はナデを施す。

土師器（355）火鉢片で脚が欠損する。内外面をヨコナデ調整する。

磁器（356）染付皿で、内面に文様を描き、底部中央に五弁花文を入れ、透明に近い釉を施し、内面見込みの釉をカキ取る。

陶器（357）前口縁部で全面に鉄輪が施される。

S-79

土師器（358）坪片で、口縁内外面をヨコナデ、体部外面を不定方向にナデ、体部内面には工具によるナデの痕跡が残り、焼成良好。胎土がよく精選されたもので外面には黒斑が残る。

S-93

焼炉土器（359）内外面ともに磨耗が著しいため調整は不明であるが、口唇部に浅い刻み目を有する。

S-102

鉢形土器 (362) く字口縁の鉢で、体部外面をハケ目、口縁外面と体部内面はナデを施す。
支脚型土器 (363) 天井部が傾斜する支脚で、外面をタタキ後、ナデ、内面は縦方向にナデを施す。
紐器 (364～366) 364は突付皿片で内面に文様を焼き、外面上には針支えが削り取られず、そのまま残る。
365は内外面に施文される。366は弘飯具と考えられ、外面に丸文が彫られる。

陶器 (368～369) 368は短軸で、内面見込みを蛇の目状に輪をカキ取る。高台は輪筋。369は全面に灰

釉を施し、短軸を一部に施す。内面見込み部分の輪を蛇の目状にカキ取る。

S-103

磁器 (370) 象付碗で外面に草花文を焼く。
陶器 (371～376) 371は不明製品で外面に暗褐色の釉が施される。372、373は長頸の瓶で372は褐色の
釉がかかり、白色の輪で波状に文様を描く。373は頸部から口縁にかけて鉄軸、体部は透明に近い釉を
かけける。374から376は土瓶で374は外面に淡緑色の釉が施され、375、376は灰釉が施され底部には煤が
付着する。

石製品 (377) 青岩製の砥石で、表面に落書きのような痕跡が残る。

S-109

甕型土器 (378～379) 378は体部外面を履方向のハケ目、内面を横方向のハケ目を施す。379は大型の
甕で、口縁屈曲部に断面三角形の突帯を貼る。口縁内外面を横方向のナデ、体部内外面をハケ目。

鉢形土器 (380) く字口縁の鉢で、体部外面を縱方向のハケ目、内面にナデを施す。

土製品 (381) 土製の玉で中央部に穿孔される。

表土出土遺物 (Fig. 72, P. 63) 腹食区での表土遺物である。

鉢形土器 (382) 体部外面を縦方向のハケ目、内面は口縁までハケ目を施す。焼成不良。
器台形土器 (383) 天井部を強いハケ目が残り、体部外面は頸部から体部中位の下方に向にハケ目、腹部
までを上方向にケスリに近い工具痕が残る。内面はハケ目後、ナデを施す。

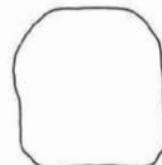
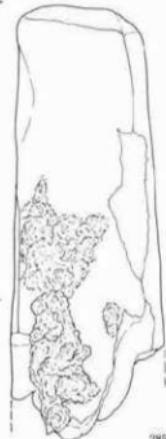
土飾器 (384・389) 384は瓦質の土器片で、外面に「西郷村」の押し墨が入る。内面はヨコナデ。389
はサナで穿孔が2ヶ所残る。

磁器 (385～387) 385は碗で、外面に緑青色の釉が全面に厚くかかる。386、387は染付皿で、386は内
面に文様を焼き、見込み部分の輪をカキ取る。387無高台の皿で、内面に文様を焼き、輪は淡緑白色の
釉を施し、外面は淡白色の釉を施す。

陶器 (388) 底部糸切りの灯明皿で、内面から口縁外面にかけて茶褐色の釉が施される。口縁端部に油
煙が残る。

土製品 (390) 土製の幼年車と考えられ、中央に穿孔され、完形品である。

SX092

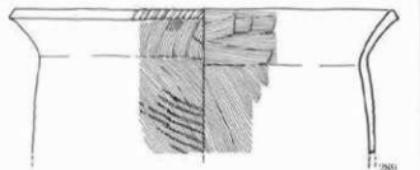


熱を強く受ける



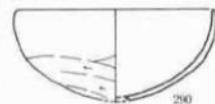
Fig.67 その他、不明遺構出土遺物実測図③ (1/2)

SX094



292

SX099



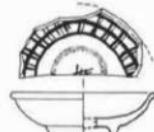
290



291



293



294



295



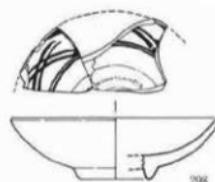
296



297



298



299



300



301



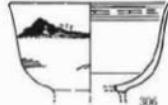
302



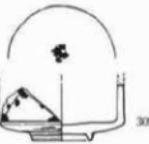
303



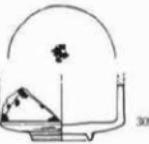
304



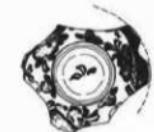
305



306



307



308



309

0 10cm

Fig.68 その他、不明遺構出土遺物実測図④ (1/3)

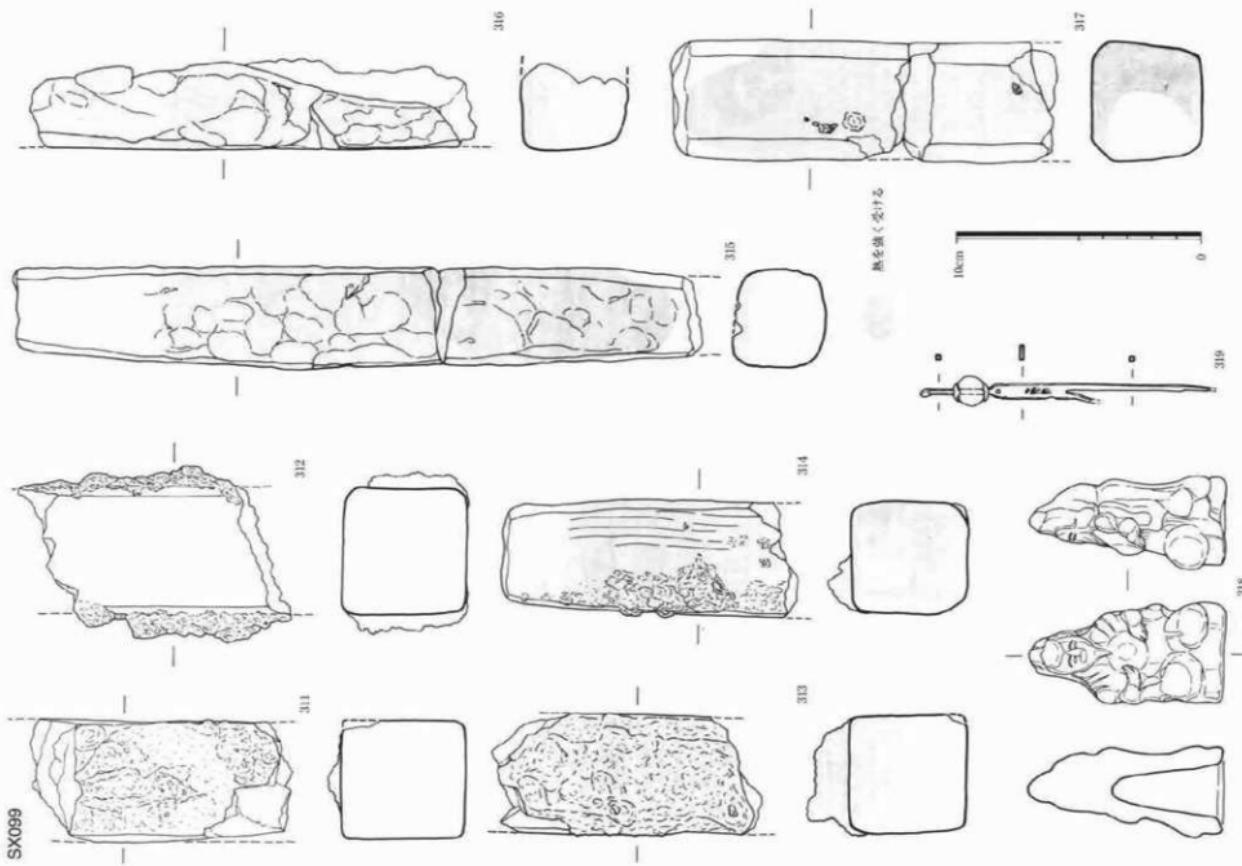


Fig.69 その他、不明確露出した細胞実質因子(1/2)

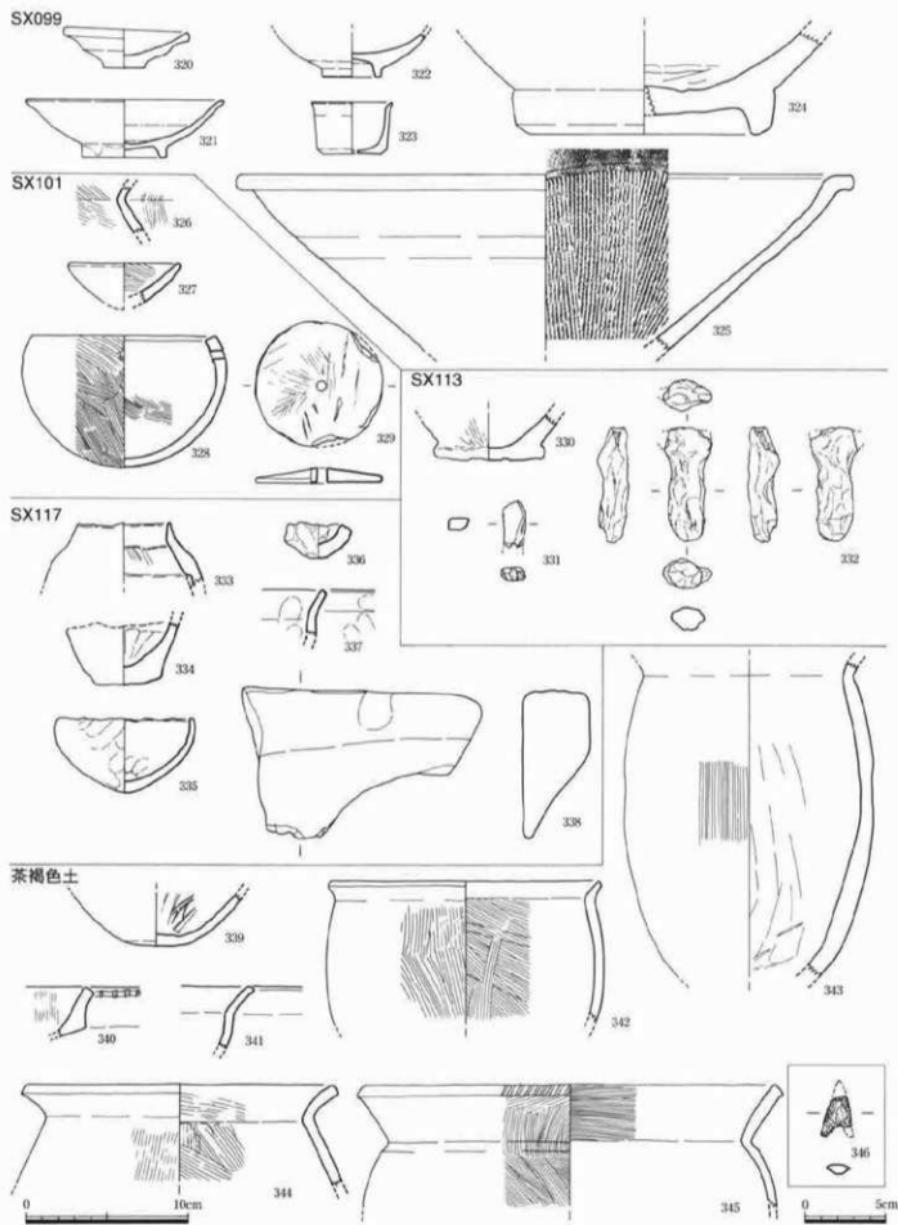


Fig.70 その他、不明遺構、茶褐色土出土遺物実測図 (1/3) (石錠1/2)

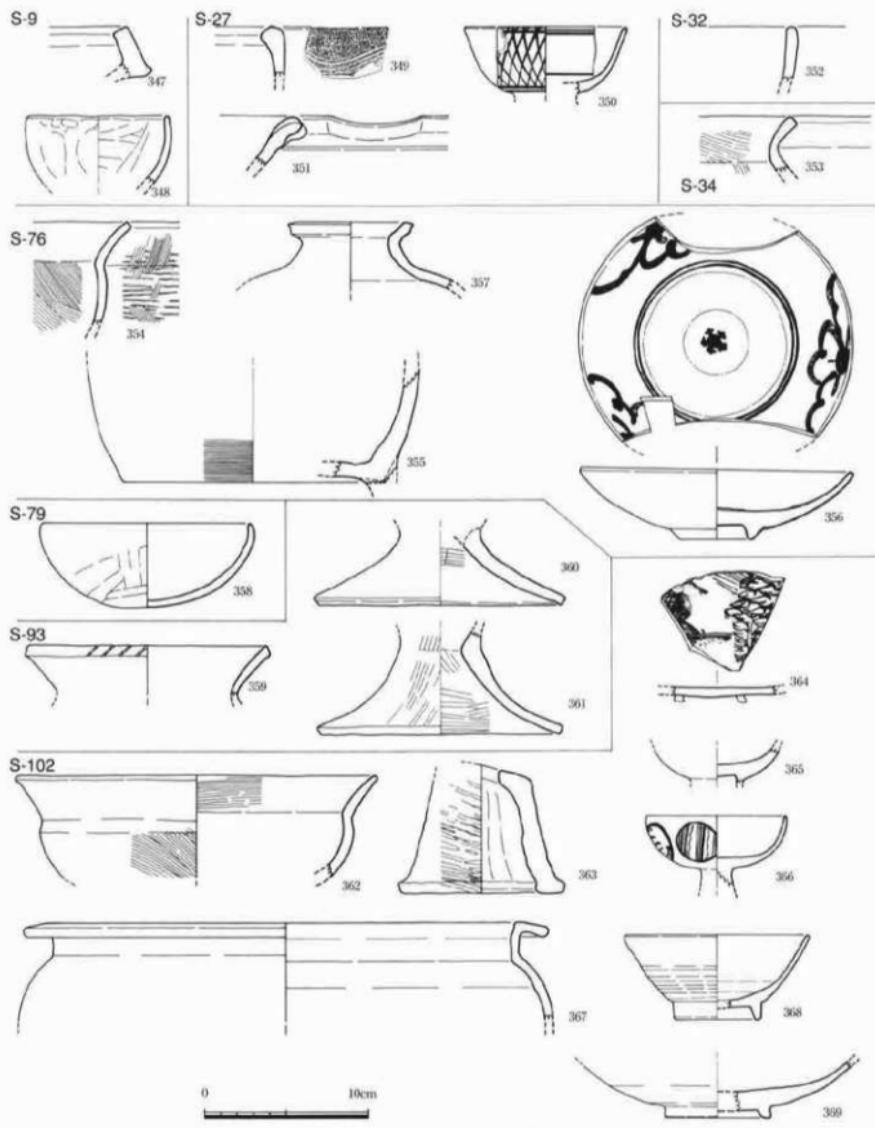
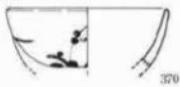
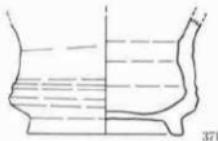


Fig.71 撥乱出土遺物実測図 (1/3)

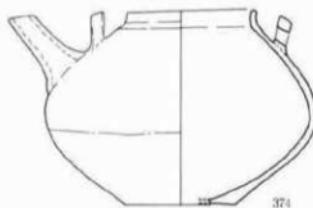
S-103



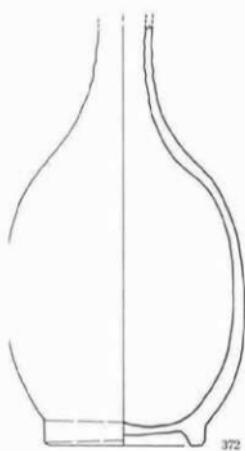
370



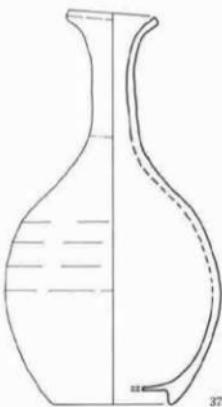
371



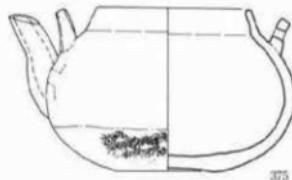
374



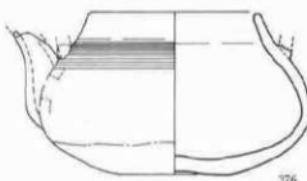
372



373



375

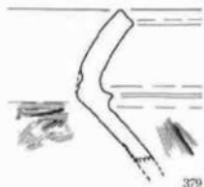


376

S-109



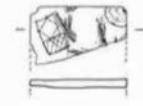
378



379



381



377

表土



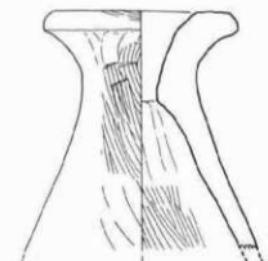
384



386



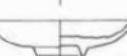
388



383



385



387



389



390

Fig.72 墓乱、表土出土遺物実測図 (1/3)

(4) 小結

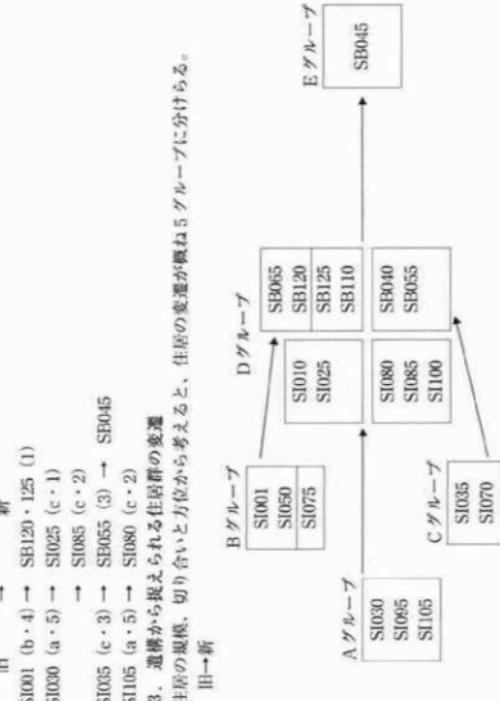
今回の発掘調査では13棟の墨穴住居と9棟の掘立柱建物、2基の周囲状況遺構など体生時代後期末を中心とした遺構を検出している。また櫛風等の出土であるが、近世の遺物も多量に出土している。以下に遺跡と遺物に分けて述べてみる。

100

1. 壓空室の性能と規模について (Tab.9, 10)
13棟の空室性を検出したが平面プランについては、横長方形である。規模は、大型ではSI105の
6.8m×4.45m、小形ではSI05の3.9m×9.7mになり、底面積から4ゲループ型に分けられる。

床面積 約30m ²	約25m ²	約20m ² ～約15m ²	約15m ² ～約10m ²
a グループ	b グループ	c グループ	d グループ
SI100	SI10 (26.5)	SI001 (16.5)	SI050 (10.5)
SI105 (30.2)	SI005 (25.5)	SI025 (17.6)	SI075 (12.9)
SI100 (30.8)		SI080 (19.7)	
		SI085 (19.0)	
2. 積穴住居・獨立柱建物の方位と切り合い関係について (Fig.73)			
方位から5グループに分けられる。	3グループ	4グループ	5グループ
a グループ	N-69°～60°-E	N-59°～50°-E	N-49°～40°-E
SI10 (b) (71')	SI080 (c) (64°)	SI035 (53°)	SI001 (c) (45°)
SI025 (c) (79')	SI085 (c) (63°)	SI070 (c) (57°)	SI050 (d) (45°)
SI100 (a) (60°)	SB065	SB040 (58°)	SI075 (d) (45°)
	SB120	SB055 (56°)	SI105 (a) (31°)

SB125 検出時の切り合い関係は以下のとおりである。(カッコ内は、1、2のグループ分け)



Tab.9 積穴住居一覧表

遺構番号	Fig.番号	I. 軸	平面プラン	長 軸	短 軸	面積	ベッド	柱	壁小窓	住居内土壙
00	20	N<45°-E	長方形	4.65m	3.95m	○	×	×	-	南壁
01B	23	N<71°-E	椭丸長方形	3.90	4.50	○	4	4	○	南壁
02B	24	N<79°-E	長方形	5.20	3.10	○	2	2	-	南壁
03B	25	N<30°-E	長方形	6.10	4.70	×	2	2	○	南壁
03S	26	N<33°-E	長方形	5.95	4.30	○	4	2	○	南壁
05B	27	N<45°-E	椭丸長方形	3.90	2.70	○	×	×	○	南壁
07B	28	N<57°-E	方形	*3.1	*2.2	-	*1	2	*	南壁
07S	28	N<45°-E	長方形	4.80	2.70	×	*1	2	*	南壁
08B	29	N<64°-E	長方形	5.70	3.47	○	?	2	*	*
08S	30	N<63°-E	椭丸長方形	4.95	3.85	×	?	2?	*	南壁
09B	31	N<27°-E	方形	*3.9	*3.2	-	*1	-	○	-
10B	31	N<60°-E	長方形	6.70	*3.3	-	*2	-	○	-
10S	32	N<31°-E	長方形	6.80	4.45	×	1	*	○	南壁

*は残存・検出長。×は道筋なし。-は調査区分

Tab.10 挖立柱建物一覧表

遺構番号	Fig.番号	主 軸	面 × 高	総 数	北 墓	朽木周	朽木周
01S	33	N<33° 24' 44"-E	1×1	5.5m	5m	-	-
01D	34	N<58° 12' 4"-E	1×2	3.00	2.25	1.35m	1.65m
04S	35	N<21° 25' 14"-E	1×1	3.25	3.25	-	-
05S	35	N<56° 53' 19"-E	1×1	3.50	2.40	-	-
06S	35	N<66° 41' 53"-E	1×1	3.00	2.60	-	-
06S	37	N<26° 19' 23"-W	1×1	3.00	2.86	-	-
11B	38	N<7° 52' 59"-W	1×1	3.25	3.25	-	-
12B	39	N<18° 9' 10"-W	1×1	3.20	2.75	-	-
12S	39	N<12° 9' 18"-W	1×1	3.25	3.00	-	-

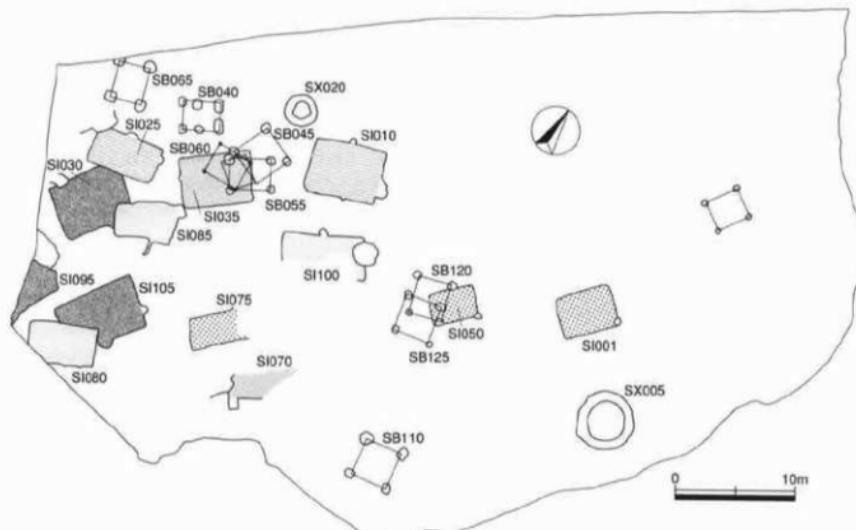


Fig.73 主要遺構配置模式図 (1/400)

4. 壁穴住居内の諸施設について

(1) 炉跡

13棟中6棟から検出している。住居中央に設けるが、比較的浅く窪んでいるだけで、埋土には焼土を確認したものはあるが、炉の床面が焼けている痕跡は殆ど検出していない。

(2) ベッド状遺構

検出した住居の9棟から検出しており、5種の形態を呈している。

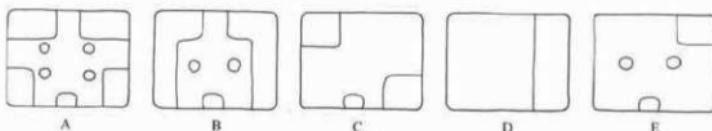


Fig.74 ベッド状遺構の配置

ベッドの構築については、1.盛り土による貼付、2.地山削り出し+盛り土貼付の2種類が存在する。

1. SI030	2. SI010	左図のように分けられ、1.についてはA・Bグループ、2.についてはC・Dグループに分けられ、この事からベッドは盛り土によるものから地山削り出し+盛り土貼付に変化していることが解る。また、SI035の南東隅のベッドは右半分を盛り土貼付、左半分を地山削り出しになり、変則的な構築方法である。
SI075	SI025	
SI095	SI035	
SI105	SI085	
SI100		

(3) 柱穴

SI010では4本柱を検出し、他は長軸に2本柱の構成である。しかし、小型の住居であるSI001、050、大型住居であるSI105からは柱穴を検出していない。田佛遺跡7号住居では住居外の南北にピットが設けられており、SI001、SI050、SI105についても住居外に柱を据えている可能性が考えられるが検出に至っていない。また、SI030の柱穴は東西に溝状に掘り、両端を深く掘り窪め柱穴(布掘り)としている。

(4) 溝小溝

7棟の住居から検出しており、4棟からは確認できなかった。溝はSI050のみ住居全辺を巡り、他は間隔が開くものや小さいピット等を検出している。また、住居内土壌との関係については、接続しているもの、離れているもの等混在している。

(5) 住居内土壌

10棟の住居から検出している。全て南方向の壁面で検出しており、土壌上部に床の硬化面を持たず、埋土も住居覆土と同様であることから住居内の生活空間に存在していたと考えられる。使用目的を屋内貯蔵や出入口に伴う梯子の設置等諸説を明確に裏付ける資料は確認していないが、SI035土壌からは両端に小ピットを検出している。

(6) 貼床

SI050以外の住居からは硬化面を持つ床面を検出している。SI080については2面の硬化面を確認しているが、最初の床面では柱穴や炉を検出しておらず、床面も凹凸が激しい状態で検出しており床面として認識出来るのかは疑問である。

(7) その他の施設

SI035の北東隅ベッド状遺構にピットを検出している。プランが円形を呈しており、他の掘立柱建物の柱穴と並ばない事や住居覆土除去後、ベット確認時に検出していることから住居内の施設の可能性を考えられ、甘木市立野遺跡135号住居等での検出例と同様である。使用目的についても立野遺跡での報告から諸説論じられており、貯蔵・保管施設の可能性が指摘できる。

5. 穹穴住居・獨立柱建物出土遺物について

3. で分けられたグループ毎に遺物を概観していく。カッコ番号は挿図番号である。

A グループ

(SI030)

小型の壺 (103) は特異性のある遺物であるが、突帯の付く大型壺 (104、114)、平底を呈する壺 (112、113) は畿内五様式系の遺物であり、平底の鉢は底部外面にハケ目が残る。出土した土器の中では古い様相を呈する。

(SI095)

出土遺物が少なく資料に欠けるが、底部にケズリを施す鋤ないしは环 (212)、环部が中位で屈曲反転し、口縁部で外反する鉢 (213) 等SI030に比べて新しい様相を示す。

(SI105)

壺の底部は平底 (222、224)、レンズ状 (223) を呈し、底部外面にハケ目が入り、壺は脚部より口縁部が最大を測るタイプ (220、221)、高环は环部で屈曲反転し口縁端部で大きく外反する (225) が挙げられ、下大隈段階の遺物ではないか。

B グループ

(SI001)

壺は手すくねの小型の平底 (6) のみで、壺は長脚で底部はレンズ状で径が小さくなる (1、2、3)、鉢は口縁がく字になり端部をつまみ (4)、高环は脚部が長く (5) なる。

(SI050)

壺は複合口縁で (138) 器壁は厚い。壺は口縁部より脚部により最大径を測り (139)、器台は口縁部がく字で器壁が厚い (140)。

(SI075)

壺の口縁は直に立ち (163、168)、内湾する無頸壺 (161)、底部がレンズ状 (165)、丸底 (166、175) があり、壺も口縁が直に近く立つ (169、172)、口縁屈曲が殆どない (170) 等がある。鉢は並として提示される直立口縁の (182、183)、は古式土師器の範疇に入れてもよいが、調整にケズリは用いていない。

C グループ

(SI035)

壺は丸底で脚部が張る (128) やレンズ状底部を呈する (129)、複合口縁の (130)、壺には外面に叩きがあり、壺も口縁が直に長脚である (131)。高环はつくりが希薄で幅が聞く (134) 等がある。

(SI070)

壺は直立口縁で (152、158)、布留系古墳階の遺物である。壺は外面に叩きが入り (142、145) 丸底である (147)、鉢は在地の外面に叩きが入る (150) がある。

D グループ

(SI010)

壺は直立口縁の (7)、頸部径が小さく脚部が強まるもの (8)、壺も口縁が直に近い立ち上がり、丸底を呈し、肩部に横ハケを呈する五様式系の (13)、壺は口縁に割み目のある (14、15、19)、外面に明きがあり丸底を呈するもの (19)、鉢は丸底 (30~33)、く字口縁で脚付き (63)、高环は短脚で精製品である (42) は布留系、环部が浅く口縁が聞く (40) がある。

(SI025)

壺は直立口縁で完全に丸底化し (74~76)、壺は長脚で外面に叩きが入り、丸底である (81~84)、鉢はく字で口縁に最大径を求める在地の (85~87)、高环は外縁が屈曲部から口縁までが長く直線的な

(S2) は布留系の遺物である。器台は柄部が聞くか暗んとするタイプ (96)、支脚は外面に叩きが残り天井部の傾斜があるタイプ (95) がある。

(SI080)

蓋は頸部後が小さく口縁に施み目のある (193、206)、直口縁で丸底の (174) は布留系、鉢は平底の (175) 以外は丸底で (196~198)、土師器の頸の施縫に入る (199、201) がある。

(SI085)

出土資料が少なく、鉢は直に立つ (209)。

(SI100)

蓋は頸部に最大径を測り長軸になる (216、217)、胸部に最大径を測る (215)、鉢は手すくねで平底に近く器壁が厚手の (218、219) がある。

(SI065)

資料が少なくて甕の口縁片 (245)。

(SI110)

平底の鉢 (246) 出土。

(SI040)

蓋は直立口縁 (238)、甕の口縁屈曲が明晰で (236)、鉢は丸底 (239)、口縁端部が若干開く (240) がある。

E グループ

(SI045)

蓋は口縁が緩やかに立ち (242)、胸部中位が最大径を測り、底部は丸底に近く径が小さく、(241)、鉢は口縁がつまみ出される (244) がある。

6. 堅穴住・掘立柱建物出土遺物の時期について
堅後地城での弥生時代後期の土器については、鳳塚遺跡¹¹⁵、室岡遺跡群¹¹⁶で編年が示されている。鳳塚は堅穴住の重複関係（切り合い）から器種のセット関係を用い、室岡遺跡では筑前での各遺跡から併行関係を求める、鳳塚はⅢ期、室岡はⅣ期に分けられた。各編年の後期の土器は筑前で基礎となる森貞次郎氏の「高三編」「下大隈」「西新」に対比しており、室岡と鳳塚（上北島式）が古式土器の時期に設定されている。

弥生時代	後期前半	後期中～後半	後期終末
筑前地域	高三編	下大隈	西新町
室岡遺跡群	室岡Ⅰ（古）・Ⅱ（新）	室岡Ⅲ	
鳳塚（上北島式）		上北島Ⅰ・Ⅱ	

上記の編年を基に鶴田西牛ヶ池住居出土遺物を觀察してみると、以下の現象を指摘できる。

1. 下大隈期の複合口縁蓋が鳳塚が鳳塚遺跡と同様に極端に少ない。また、長颈瓶もない。
2. 甕の体部はハケ目から叩きを施すようになる。また、器台や支脚にも叩きが残る。
3. 高环は口縁部が屈曲し直に立つものがない。环部の口縁部が屈曲し反転して外反するタイプ。
4. 平底を呈する甕、蓋がSI030、105を除いて殆ど存在しない。レンズ状か丸底を呈している。
5. 無颈の鉢は平底で体部器壁が厚く、直線的に立ち上がるタイプと土師器群に近い丸底の口縁部が内湾するタイプが混在するが、手すくね系の平底鉢は調整や焼成が同様である。
6. 無颈の鉢の外面にケズリの痕跡を若干認めるが、内外面にケズリ調整する遺物は殆どない。
7. 外来系とわれる遺物が殆ど入っていない。

以上の点を考慮して各竪穴住居出土遺物の時期的幅は以下の様になる。(カッコのアルファベットは遺構グループである。)

弥生後期	中頃	後半	終末/庄内・布留併行期
筑前	下大隈		西新町/庄内・布留
筑後	室岡Ⅲ		上北島 (*1)
		(A) SI001	-----
		(D) SI010	-----
		(D) SI025	-----
	(A) SI030		-----
	(B) SI050	(C) SI035	-----
			(C) SI070 -----
			(B) SI075 -----
			(D) SI080 -----
		(D) SI100	
	(A) SI105		(A) SI095 -----
		(D) SI040	(E) SI045 -----

(*1) 狐塚遺跡 1.2.3.11.12.16.19.21号住居出土遺物

7. 鶴田西牛ヶ池遺跡

調査地は狐塚遺跡から東南に約900mの地点にあり、裏山遺跡から北東に約600mの位置に展開する。遺構に関しては調査区西寄りに密集する。特に弥生時代後期を中心とする竪穴住居、掘立柱建物が検出され、当該期の主要な市内遺跡としては狐塚遺跡、蔵敷森ノ木遺跡、田佛遺跡での調査例が報告されている。

先述した遺構、遺物の報告から蔵敷森ノ木のV～VIに該当するが、蔵敷森ノ木では複合口縁の壺の出土頻度が高く、様相としては狐塚遺跡に類似している。また、以前から狐塚遺跡のⅢ期区分設定に関しての前後関係の疑問点が指摘されてきたが、鶴田西牛ヶ池遺跡では遺物時期幅が狭く後期を全体的に包括する遺物資料が提示できず、器種の系譜等を追える資料提示ができなかった。八女市室岡遺跡群での幅年では、SI025・070出土遺物が室岡Ⅲ期の後にくる資料になるのではないか。しかし、遺物の扱いについては全て住居覆土遺物であり、遺構のグルーピングによる結果との時期差が狭い範囲であるが生じており、遺構時期の判断についての危険性は否めない。調査時の遺物廃棄のクループをある程度掘んで取り上げる等、緻密な調査方法を取ることは遺物を正確に判断し取り扱う絶対条件であることを痛感した。

また、周溝状遺構が2基検出されており、SX005については、溝底部にピットを検出しているが溝埋土との前後関係を掘んでおらず、埋土も灰白色粘土であること等、不明な点を残した。遺物は体部にボタン状の貼付がある甕が特異な遺物として挙げられる。

近世の遺物も多量に出土している。これらは搅乱(重機で掘られたもの)出土や不定形の土壤からの出土であるが、18世紀後半から幕末にかけての資料である。その中でも土製の棒状土製品については、久留米市で中世(13世紀)の土器と出土しており、瓦器焼成等の窯道具や工房に関する道具の一種とされている。しかし、今回出土した棒状土製品は近世の遺物と出土(一部搅乱のため現代遺物も混じる)しており、付着物痕等を観察すると、かなりの高温(1000°以上)で2次的に熱を受けている事や、法量が大型から小型まであり、久留米市の出土遺物と一種趣を異にしている。

以上、鶴田西牛ヶ池遺跡の調査成果である。遺構は調査区から西側に広がりをもつと考えられ、筑後市内の周辺遺跡の調査成果や資料の増加により今後、筑後地区での弥生時代後期の生活の実態や土器相の成果を期待するところである。

(註) 参考文献

- 註1. 「大野原遺跡」佐賀市文化財調査報告書第48集
註2. 「田代遺跡」筑後市文化財調査報告書第5集
註3. (1)「まかだま」福岡県立小倉高等学校創立八十周年記念
(2)「九州便り動車道埋蔵文化財調査報告書XIX」
八女市室町所在遺跡の調査
註4. 「九州便り自軒車道埋蔵文化財調査報告書-X-」
廿木市立野路の調査 (3)
註5. 「風寒遺跡」筑後市文化財調査報告書第2集
註6. 「註3.(2)と同じ」
註7. 「筑山遺跡」筑後市文化財調査報告書第1集
註8. 「城跡遺跡」筑後市文化財調査報告書第6集
註9. 岩本省三「土器から見た豪州社会の動態」
—北部九州地方の後期を中心として—「柳山清一先生追悼記念論集」
柳田康應「三・四世纪の土器と鏡」
—「伊都」の土器から見た北部九州—「轟真次郎博士古稀記念古文化論集」
「三沢塚原遺跡III・IV」小郡市文化財調査報告書第23集
註10. 「大曾寺北毫地区遺跡群Ⅲ」久留米市文化財調査報告書第92集
参考文献
「西新町遺跡」福岡市埋蔵文化財調査報告書第79集 福岡市教育委員会 1982
福岡市行「古墳時代初期後半の土器編年」「調査研究報告第16集」 佐賀県立博物館・佐賀県立美術館 1991
「太宰府・佐野地区遺跡群Ⅳ」太宰府市の文化財第31集 太宰府市教育委員会 1996
久住謙雄「北部九州における区内六群早期の土器模様」「庄内式土器研究XIX」 庄内式土器研究会 1995

Tab.11 鶴田西牛ヶ池遺跡出土遺物一覽表

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
新石器時代 縄文文化	縄文文化 中期	縄文文化 後期									
土器	土器	土器	土器	土器	土器	土器	土器	土器	土器	土器	土器
石器	石器	石器	石器	石器	石器	石器	石器	石器	石器	石器	石器
骨器	骨器	骨器	骨器	骨器	骨器	骨器	骨器	骨器	骨器	骨器	骨器
貝器	貝器	貝器	貝器	貝器	貝器	貝器	貝器	貝器	貝器	貝器	貝器
其他	其他	其他	其他	其他	其他	其他	其他	其他	其他	其他	其他
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
新石器時代 縄文文化	縄文文化 中期	縄文文化 後期									
土器	土器	土器	土器	土器	土器	土器	土器	土器	土器	土器	土器
石器	石器	石器	石器	石器	石器	石器	石器	石器	石器	石器	石器
骨器	骨器	骨器	骨器	骨器	骨器	骨器	骨器	骨器	骨器	骨器	骨器
貝器	貝器	貝器	貝器	貝器	貝器	貝器	貝器	貝器	貝器	貝器	貝器
其他	其他	其他	其他	其他	其他	其他	其他	其他	其他	其他	其他

Tab.12 鶴田西牛ヶ池遺跡遺物観察表

通 號	件 號	分 類	番 号	名 稱	形 態	長 度	寬 度	厚 度	重 量	規 格	性 質	存 在 地	考 證	【測定值(mm)・記載面積】	
														長	寬
S000	45	1	費型土器	素	001	*260	*25.8	*21.9	*0.8	*1.4	-	-	-	3.4	-
	45	2	費型土器	素	002	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	45	3	費型土器	素	003	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	45	4	林形土器	素	005	*175	*6.3	-	-	-	-	-	-	-	-
	45	5	高脚费型土器	高脚	006	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
S000(付)内上層	45	6	费型土器	素	007	*6.5	*6.0	*5.8	-	-	-	-	-	-	-
S0103	46	7	费型土器	素	008	*160	*8.0	-	-	-	-	-	-	-	-
	46	8	费型土器	素	009	*18.2	*14.6	-	-	-	-	-	-	-	-
	46	9	费型土器	素	007	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	46	10	费型土器	素	011	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	46	11	费型土器	素	012	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	46	12	费型土器	素	002	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	47	13	费型土器	素	013	*25.0	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	47	13	费型土器	素	055	*13.6	*22.5	-	-	-	-	-	-	-	-
	47	14	费型土器	素	008	*27.0	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	46	15	费型土器	素	009	*23.4	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	46	16	费型土器	素	010	*17.6	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	46	17	费型土器	素	045	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	46	18	费型土器	素	001	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	47	19	费型土器	素	040	*27.3	*6.0	-	-	-	-	-	-	-	-
	47	20	费型土器	素	014	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	47	21	费型土器	素	012	*26.0	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	47	23	费型土器	素	016	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	47	24	费型土器	素	017	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	47	25	费型土器	素	015	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	47	27	林形土器	林	051	*16.2	*8.1	-	-	-	-	-	-	-	-
	47	28	林形土器	林	053	*15.0	*7.2	-	-	-	-	-	-	-	-
	47	29	林形土器	林	004	*11.9	*5.5	-	-	-	-	-	-	-	-
	47	30	林形土器	林	014	*14.2	*6.0	-	-	-	-	-	-	-	-
	47	31	林形土器	林	003	*14.6	*7.6	-	-	-	-	-	-	-	-
	47	32	林形土器	林	050	*15.1	*4.9	-	-	-	-	-	-	-	-
	47	33	林形土器	林	049	*11.6	*6.1	-	-	-	-	-	-	-	-
	47	34	林形土器	林	042	*16.0	*5.5	-	-	-	-	-	-	-	-
	45	25	林形土器	林	016	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	48	36	林形土器	林	002	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	48	37	林形土器	林	019	*18.0	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	49	38	林形土器	林	020	*17.0	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	48	39	林形土器	林	021	*15.0	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	48	40	林形土器	林	039	*21.0	*2.4	-	-	-	-	-	-	-	-
	48	41	高脚土器	高脚	025	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	48	42	高脚土器	高脚	048	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	48	43	高脚土器	高脚	026	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	48	44	高脚土器	高脚	028	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	48	45	高脚土器	高脚	027	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	48	46	石器	石器	057	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	49	52	石器	石器	052	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	49	53	石器	石器	058	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	49	54	石器	石器	059	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	49	55	石器	石器	056	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	48	49	石器	石器	043	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	49	56	石器	石器	023	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	49	57	石器	石器	029	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	49	58	石器	石器	031	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	49	59	石器	石器	031	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-

	49	60	土製品	鶴土壤	032						
	49	61	土製品	鶴土壤	033						
	49	62	土製品	鶴土壤	034						
SB10车厢	50	63	鉢型土器	鉢	062	209	148	*134	4/3		
SB10堆居内土器	50	64	壺型土器	壺	061		*156		1/2		
SB10上面覆瓦	50	65	壺型土器	壺	072	*220			口縫部片		
	50	66	壺型土器	壺	065	122	66		口縫部片		
	50	67	鉢型土器	鉢	063	130	72		口縫部定形		
	50	68	鉢型土器	鉢	064		*61		1/6		
	50	69	陶器	瓶	067	*120	29	*46			
	50	70	陶器	瓶	068	*95	25	*38			
	50	71	陶器	壺	066	*234		*198	1/4		
	50	72	石製品	砾石	070						
SB25	50	73	石製品	砾石	069						
	51	74	壺型土器	壺	007	*130	*140		上平1/2		
	51	75	壺型土器	壺	025	130	137		口縫部定形		
	51	76	壺型土器	壺	006	*140			口縫部1/2		
	51	77	壺型土器	壺	005	*180					
	51	78	壺型土器	壺	004						
	51	79	壺型土器	壺	003	*200					
	51	80	壺型土器	壺	002	*160					
	51	81	壺型土器	壺	001						
	51	82	壺型土器	壺	026		*320		体部2/3		
	51	83	壺型土器	壺	014				底部片		
	51	84	壺型土器	壺	015		32		底部片		
	52	85	壺型土器	壺	013	*280			口縫部1/4		
	52	86	鉢型土器	鉢	009	*260			口縫部片		
	52	87	外形土器	鉢	008	*260			口縫部片		
	52	88	鉢型土器	鉢	010	*130	*64		1/2		
	52	89	鉢型土器	鉢	011	*144	65		口縫1/3欠		
	52	90	鉢型土器	鉢	022	*44	38	13	1/2		
	52	91	高形土器	鉢	023	*32	20		1/3		
	52	92	高环型土器	高环	016	*520			口縫部片		
	52	93	高环型土器	高环	017				底部片		
	52	94	支脚型土器	支脚	020		*72		1/2		
	52	95	支脚型土器	支脚	021	9.5	67	10.6	口縫定形		
	52	96	器台型土器	器台?	019						
	52	97	土製品	柄杓	024		*133		环部欠損		
	52	98	陶製品	糠	027						
	53	99	石製品	不明石	028						
	53	100	石製品	不明石	029						
SB30	53	101	石製品	不明石	030						
	54	102	壺型土器	壺	022			8.6	底部片		
	54	103	壺型土器	壺	012				1/2		
	54	104	壺型土器	壺	013	*382			口縫部1/3		
	54	105	壺型土器	壺	014	*220			口縫部1/8		
	54	106	壺型土器	壺	020	*162			口縫部1/6		
	54	107	壺型土器	壺	019	*16.6			口縫部1/8		
	54	108	壺型土器	壺	017	*16.0			口縫部1/6		
	54	109	壺型土器	壺	015	*158			口縫部1/6		
	54	110	壺型土器	壺	016	*140			口縫部1/6		
	54	111	壺型土器	壺	021						
	54	112	壺型土器	壺	011			*5.8	底部1/2		
	54	113	壺型土器	壺	010			*5.4	底部片		
	54	114	壺型土器	壺	018						
	55	115	鉢型土器	鉢	001	*15.0	8.6	6.1	1/3		
	55	116	鉢型土器	鉢	004	125	7.7	4.8	口縫部定形		
	55	117	鉢型土器	鉢	003	*15.0					
	55	118	鉢型土器	鉢	005	138	*6.8	*1.3	底部欠		
	55	119	外形土器	鉢	002	*5.6	6.4	*2.8	1/3	ミニチュア	
	55	120	器台型土器	器台	008	6.3					
	55	121	器台型土器	器台	009	*96			1/6		

59	184	鉢形土器	鉢	022	*11.8		口縁部 1/6	
59	185	鉢形土器	鉢	017	*14.4	52	1/2	
59	186	鉢形土器	鉢	023	*14.0		口縁部 1/8	
59	187	高环型土器	高环	031			側面片	
59	188	高环型土器	高环	026			*14.0 側面 1/6	
59	189	高环型土器	高环	025			*15.0 側面 1/2	
59	190	土製品	粘土塊	027				
59	191	土製品	粘土塊	028				
SJ075住居内土器	59	192	高环型土器	高环	032		側面細片	
SJ080	60	193	壺型土器	壺	001	21.8	口縁部片	
	61	194	壺型土器	壺	008	*16.0	主手 1/5	
	63	195	鉢形土器	鉢	002	10.0	52	4.6 変形
	60	196	鉢形土器	鉢	003	11.7	6.1	ほぼ完形
	60	197	鉢形土器	鉢	004	12.2	5.1	ほぼ完形
	60	198	鉢形土器	鉢	005	13.7	7.0	2.0 変形
	60	199	鉢形土器	鉢	010	*14.0	*4.0	1/3
	60	200	鉢形土器	鉢	006	12.9	4.8	ほぼ完形
	60	201	鉢形土器	鉢	007	13.6	4.6	一部欠
SJ080用穴	60	202	鉢形土器	鉢	002		口縁部片	
	60	203	壺型土器	壺	001		口縁部片	
SJ080第一床面	63	204	壺型土器	壺	012		*4.3 底端片	
	60	205	鉢形土器	鉢	011	7.2	2.3	ほぼ完形
SJ02第二床面下	60	206	壺型土器	壺	001	*21.0	口縁部片	
	60	207	石製品	不明石	002			
	60	208	石製品	石礫	013		変形	
SJ085住居内土器	60	209	鉢形土器	鉢	001		口縁部片	
	60	210	石製品	不明石	002			
	60	211	土製品	不明品	003		穿孔有り	
SJ095	63	212	鉢形土器	鉢	001	*14.0	口縁部片	
	63	213	高环型土器	高环	004	*30.0	口縁部片	
	60	214	壺型土器	壺台	002	*19.0	口縁部片	
SJ100	61	215	壺型土器	壺	003	*22.0	口縁部片	
	61	216	壺型土器	壺	002	*22.0	口縁部 1/4	
	61	217	壺型土器	壺	001	*21.0	口縁部 1/5	
	61	218	鉢形土器	鉢	004	*11.6	5.3	2/3
	61	219	鉢形土器	鉢	005	*13.0	*4.8 *5.6	1/2
SJ105	61	220	壺型土器	壺	012	*26.0	17.6	7.8 口縁部片
	61	221	壺型土器	壺	001	*28.0		口縁部 1/4
	61	222	壺型土器	壺	002			*8.0 底部 1/3
	61	223	壺型土器	壺	004			4.2 底部片
	61	224	鉢形土器	鉢	003			4.8 底部片
	61	225	高环型土器	高环	005	*32.0		口縁部 1/6
	61	226	壺型土器	壺台	006	*3.3	4.7	*3.3 ミニチュア
	62	227	石製品	石礫	007	3.0	7.1	一部欠
	62	228	石製品	石礫	008			変形
	62	229	石製品	不明石	010			サヌカイト
	62	230	石製品	不明石	011			
SJ105床面	62	231	石製品	不明石	017			
SJ105住居内土器	62	232	鉢形土器	鉢	014	14.5	3.6	ほぼ完形
	62	233	壺型土器	壺	013	*13.2		一部欠
	62	234	石製品	不明石	015			
SJ105床下	62	235	石製品	石礫	016			サヌカイト
SJ040 (S-60)	63	236	壺型土器	壺	001	*13.0		口縁部片
(S-61)	63	237	壺型土器	壺	002	*12.0		口縁部片
(S-63)	63	238	壺型土器	壺	001			口縁部片
(S-64)	63	239	鉢形土器	鉢	001	*13.4	5.9	1/5
SJ045 (S-42)	63	240	鉢形土器	鉢	001			口縁部片
(S-41)	63	241	壺型土器	壺	001	*16.4	*22.5	1/2
(S-77)	63	242	壺型土器	壺	001			口縁部片
	63	243	壺型土器	壺	001			口縁部片
	63	244	鉢形土器	鉢	002	*14.0		口縁部片
SB005 (S-68)	63	245	壺型土器	壺	001			口縁部片

SBL10 (S-48)	63	246	鉢形土器	鉢	001	10.2	5.3	3.5	ほぼ完形	
SX006	64	247	甕形土器	甕	003				底部片	ボタン状付着
	64	248	鉢形土器	鉢	007	*21.0				
	64	249	鉢形土器	鉢	005	5.1	3.4	0.9	ほぼ完形	ミニチュア
	64	250	器台型土器	器台	002				*19.0	
	64	251	器台型土器	器台	001	*8.2	11.0	*9.0	一部欠	
	64	252	支脚型土器	支脚	006	7.6	10.0	*11.0	ほぼ完形	
	64	253	支脚型土器	支脚	004	7.6	10.1	9.8	完形	
SX011	65	254	白磁	碗	001				底部片	
SX022	65	255	土師器	鉢	001				口縁部片	
SX036	65	256	鉢形土器	鉢	001	*14.0	5.1		1/2	
	65	257	鉢形土器	鉢	002	*11.8			口縁部1/2	
SX047	65	258	土師器	小皿	001	*7.8	1.8	*4.2	1/4	
	65	259	土師器	小皿	002	*6.8	1.7	*3.6	1/3	
	65	260	陶器	陶付機	003	*9.6			口縁部1/6	
SX072	65	261	甕型土器	甕	001				口縁部片	
	65	262	鉢形土器	鉢	002	*11.0				
SX074	65	263	土師器	鉢	001	*24.0		4.4		
	65	264	陶器	碗	002				底部1/2	
	65	265	土質品	平底	003					
	65	266	土質品	棒状土質品	004	6.4	6.4	*15.0		
SX078	65	267	甕型土器	甕	003	*13.0			口縁部片	
	65	268	甕型土器	甕	001				口縁部片	
	65	269	甕型土器	甕	002				口縁部片	
	65	270	鉢形土器	鉢	004	*16.0			口縁部1/6	
SX083	66	271	白磁	碗	004			4.4	底部片	
	66	272	陶器	小皿	002	*9.6	2.4	3.2	2/3	
	66	273	陶器	碗	003			8.6	底部片	
	66	274	陶器	瓶	001	*40.0			口縁部片	
	66	275	ガラス製品	瓶	005	1.4	5.4	2.4	完形	
	66	276	ガラス製品	瓶	006			8.0	一部欠	
SX091	66	277	土師器	鉢	001				口縁部片	火跡か?
SX092	66	278	土師器	鉢	001				口縁部片	
	66	279	土師器	甕	002				口縁部片	
	66	280	土師器	火鉢	003			*15.5	1/4	
	66	281	土師器	不明品	004			*26.4	底部1/2	穿孔あり
	66	282	白磁	碗	007	*14.2	5.6	*9.0	1/6	
	66	283	陶器	陶付機	006	*12.0	3.6	*4.3	1/3	
	66	284	陶器	鉢	005			*18.0	底部1/2	
	67	285	土質品	棒状土質品	009	5.7	*17.5	5.8	一部欠	
	67	286	土質品	棒状土質品	008	5.2	*20.0	5.1	一部欠	
	67	287	土質品	棒状土質品	010	6.5	6.0	*15.8	一部欠	
	67	288	土質品	棒状土質品	011	8.0	7.4	*31.0	一部欠	
SX094	68	289	甕型土器	甕	001	*24.0			口縁部片	
SX099	68	290	土師器	环	008	*12.6	*5.8		1/3	
	68	291	土師器	土網	009				口縁部片	
	68	292	白磁	皿	038	*13.8	4.1	4.2	1/2	
	68	293	陶器	皿	031	9.5	2.0	5.8	3/4	
	68	294	陶器	皿	030	*9.0	2.6	*4.0	1/2	
	68	295	陶器	皿	035	*21.0	3.2	*12.2	1/6	
	68	296	陶器	皿	032	*13.0	3.2	*8.0		
	68	297	陶器	皿	029	*8.4	2.2	*6.2	1/3	
	68	298	陶器	皿	033	*13.0	3.8	*4.4		
	68	299	陶器	皿	034	*13.0	3.4	7.3	口縁部3/4欠	
	68	300	陶器	皿	036				底部片	
	68	301	陶器	环?	028	6.4	2.2	2.5	口縁部3/4欠	
	68	302	磁器	陶付機	021			4.2	底部片	
	68	303	磁器	陶付機	022			*4.7	底部片	
	68	304	磁器	陶付機	019			*5.8		
	68	305	磁器	陶付機	023	*11.2	5.5	*4.8	1/4	
	68	306	磁器	陶付機	024	*10.0			1/6	
	68	307	磁器	陶付機	025			*3.9	底部1/2	

S.003	72	320	細蕊	全開	200	270	300	300	300	300	300
	72	371	細蕊	半開	003	003	003	003	003	003	003
	72	372	細蕊	長	005	005	005	005	005	005	005
	72	373	細蕊	長	004	004	004	004	004	004	004
	72	374	細蕊	長	008	008	008	008	008	008	008
	72	375	細蕊	長	005	005	005	005	005	005	005
	72	376	細蕊	長	007	007	007	007	007	007	007
\$100	72	377	石斑花	短	100	100	100	100	100	100	100
	72	378	葉狀花	短	200	200	200	200	200	200	200
	72	379	葉狀花	短	100	100	100	100	100	100	100
	72	380	葉狀花	短	003	003	003	003	003	003	003
	72	381	±葉狀	短	004	004	004	004	004	004	004
左上	72	382	葉狀花	短	002	002	002	002	002	002	002
	72	383	荷葉型	短	001	001	001	001	001	001	001
	72	384	±葉狀	短	008	008	008	008	008	008	008
	72	385	細蕊	角	003	003	003	003	003	003	003
	72	386	細蕊	角	004	004	004	004	004	004	004
	72	387	細蕊	角	005	005	005	005	005	005	005
	72	388	細蕊	角	006	006	006	006	006	006	006
	72	389	±葉狀	角	007	007	007	007	007	007	007
	72	390	±葉狀	角	009	009	009	009	009	009	009

5. 鶴田木屋ノ角・鶴牛ヶ池遺跡第2次調査

(1)はじめに

今回報告する鶴田木屋ノ角遺跡は筑後市大字鶴田木屋ノ角559番地に、鶴田牛ヶ池遺跡は筑後市大字鶴田字牛ヶ池81番地に、それぞれ所住する。調査は水見が担当し、一部で小林の協力を得た。調査面積は合計で2,727m²で、調査期間は平成10年11月1日から平成11年2月10日であった。この調査は、古代官道「西海道」の路線確認を主たる目的として実施した。事前の工事主体との協議の結果、遺構を破壊しない内容の工事を実施することで合意していたため、水路が新設される北端の80mを除いて遺跡の平面プランの確認にとどめた。したがって、木路予定地以外にある遺構は完掘に到っていない。



Fig.75 鶴田木屋ノ角遺跡鶴田牛ヶ池遺跡(第2次調査)調査区位置図(1/2,500)

(2) 検出遺構

今回は西海道の路線確認のための調査であるため、当然のことながら道路跡を検出している。鶴田牛ヶ池遺跡第2次調査で検出が予想されたが、明確な遺構は確認できなかったため、全体図のみを報告する。また、水路予定地内で土壙を2基検出したので併せて報告する。以下、鶴田木屋ノ角遺跡の検出遺構を遺構種別ごとに記載する。

道路状遺構

SF20 (SD01・SD05・SD10)

今回の調査で確認した道路跡である。SD01とSD05が、それぞれ西と東の側溝にあたると考えられる。また、路盤の中央にSD10が縱走しているが、道路との関係は確認できない。SD10の残存する深さは、最大で0.25m程である。側溝の断面形状は、東西ともに大きく崩れた逆台形で、極めて不整形である。

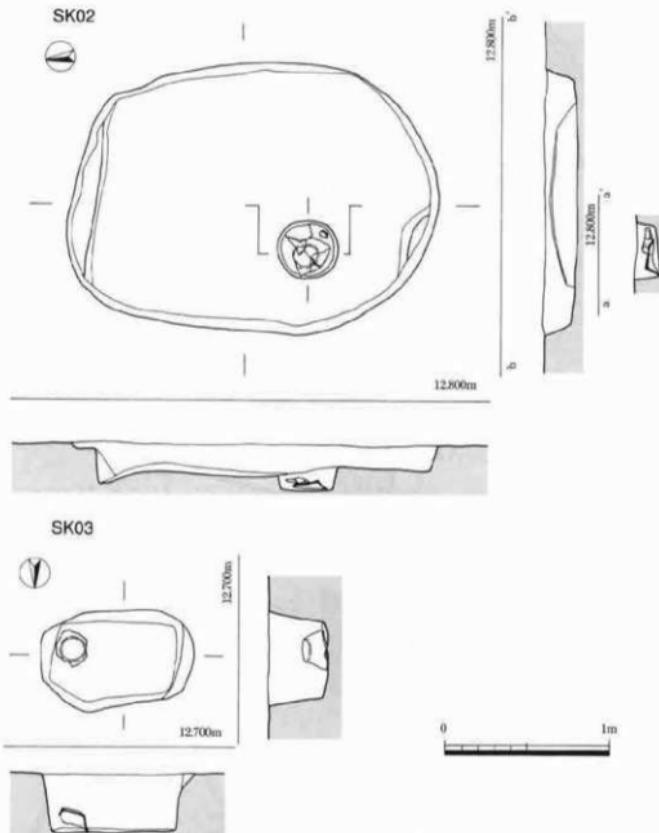


Fig.76 土壙実測図 (1/30)

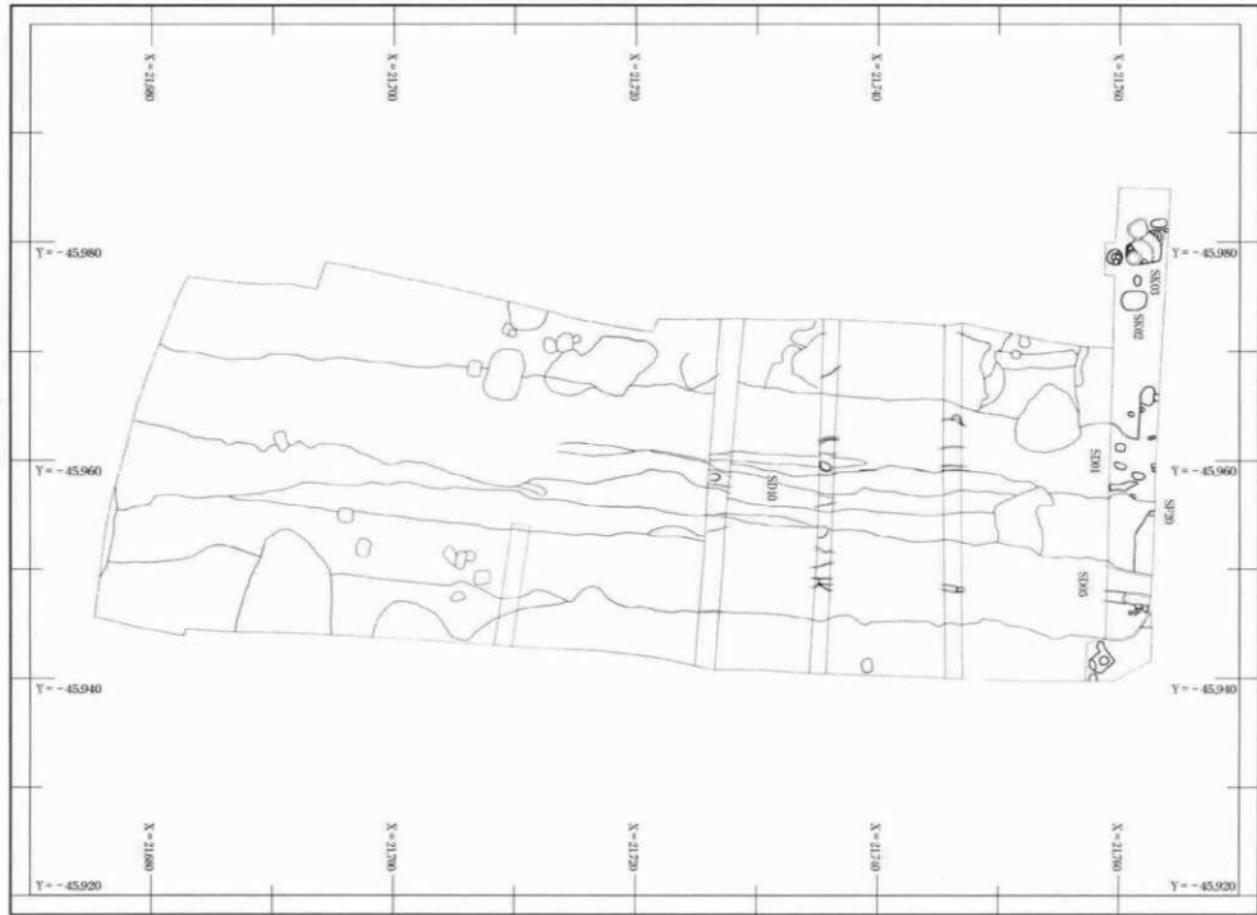


Fig.77-1 鶴田木屋ノ角道路構配図 (1/400)

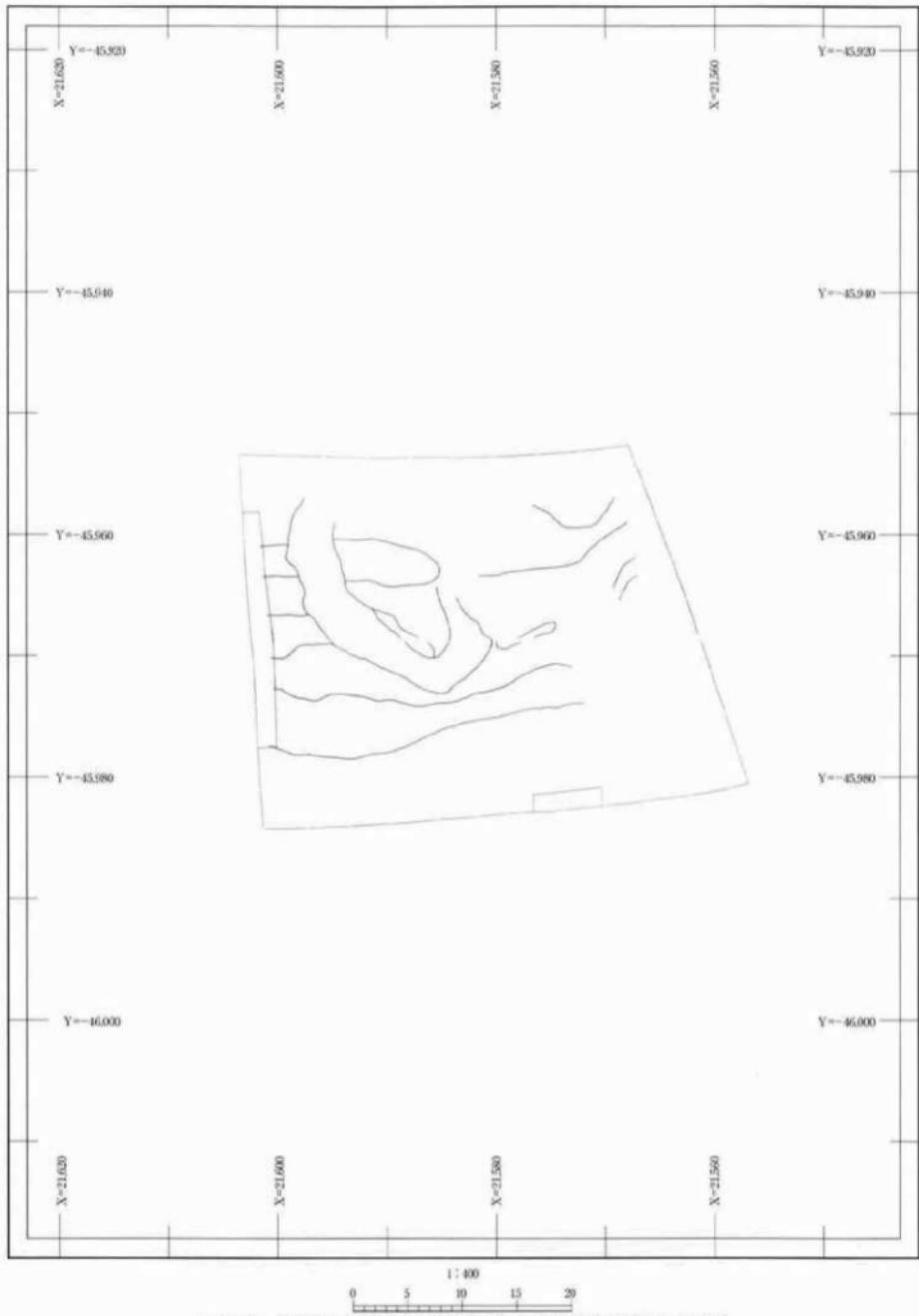


Fig.77-2 鶴田牛ヶ池遺跡（第2次調査）A調査区遺構配置図（1/400）

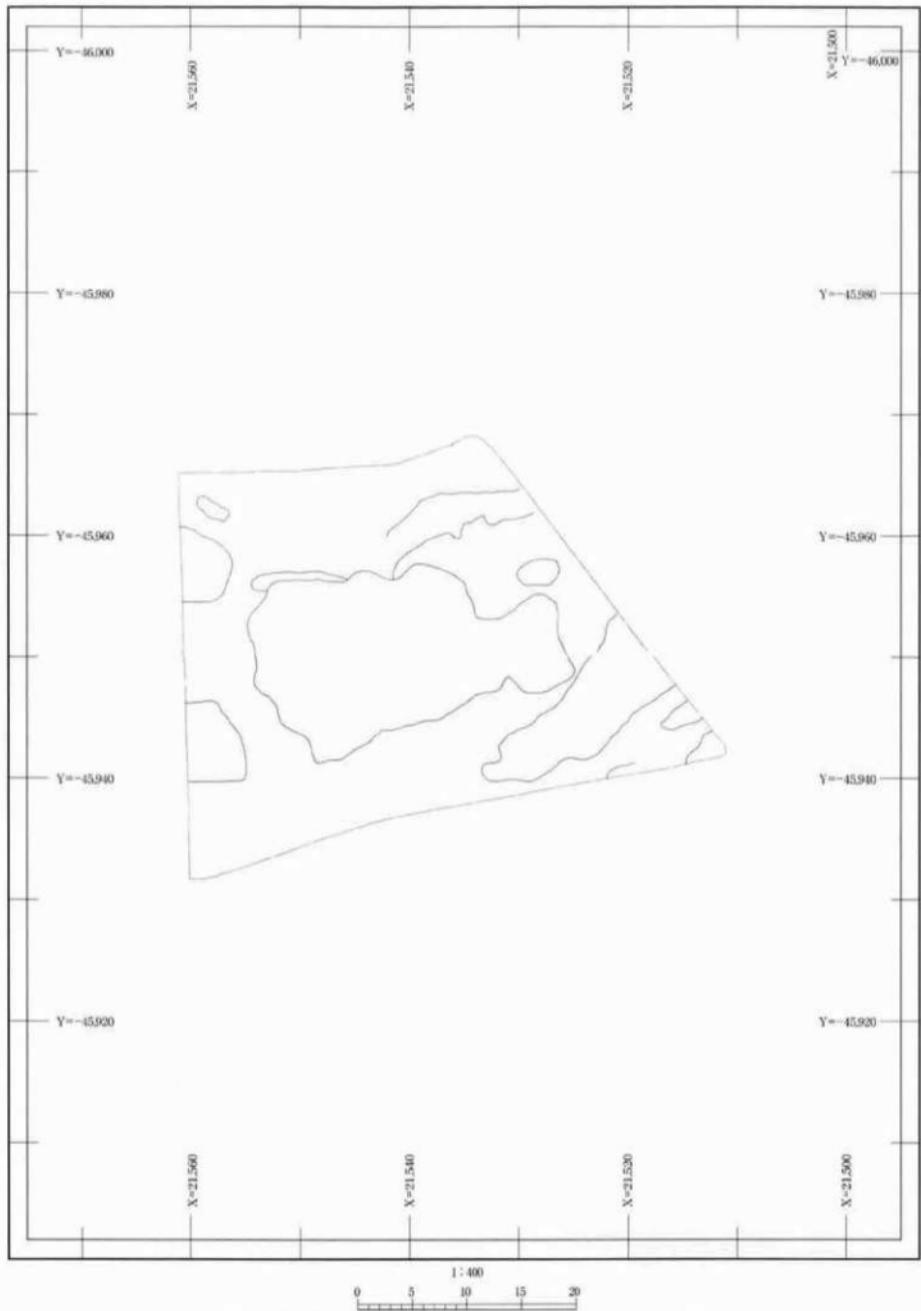


Fig.77-3 鶴田牛ヶ池遺跡（第2次調査）B調査区遺構配置図（1/400）

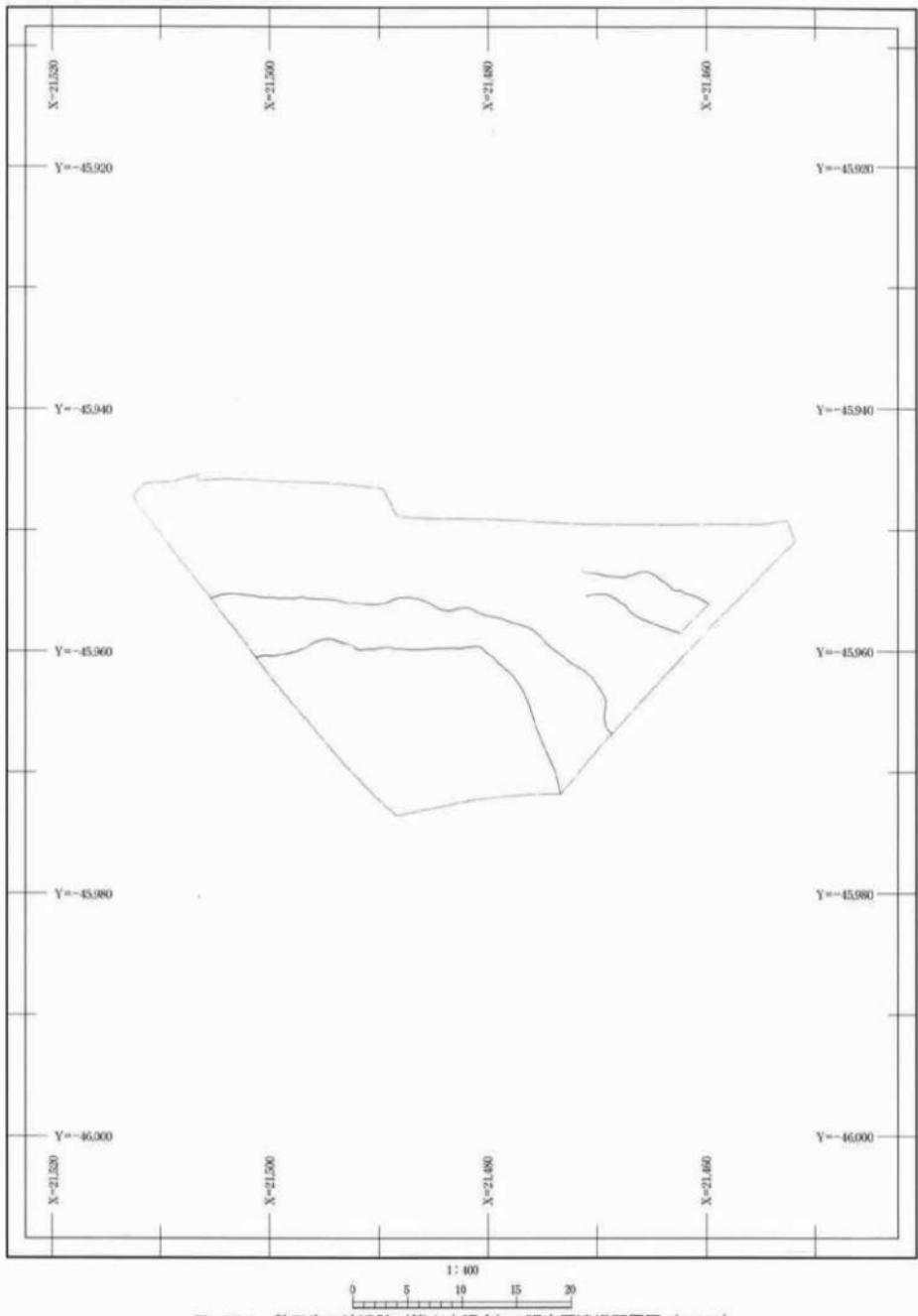
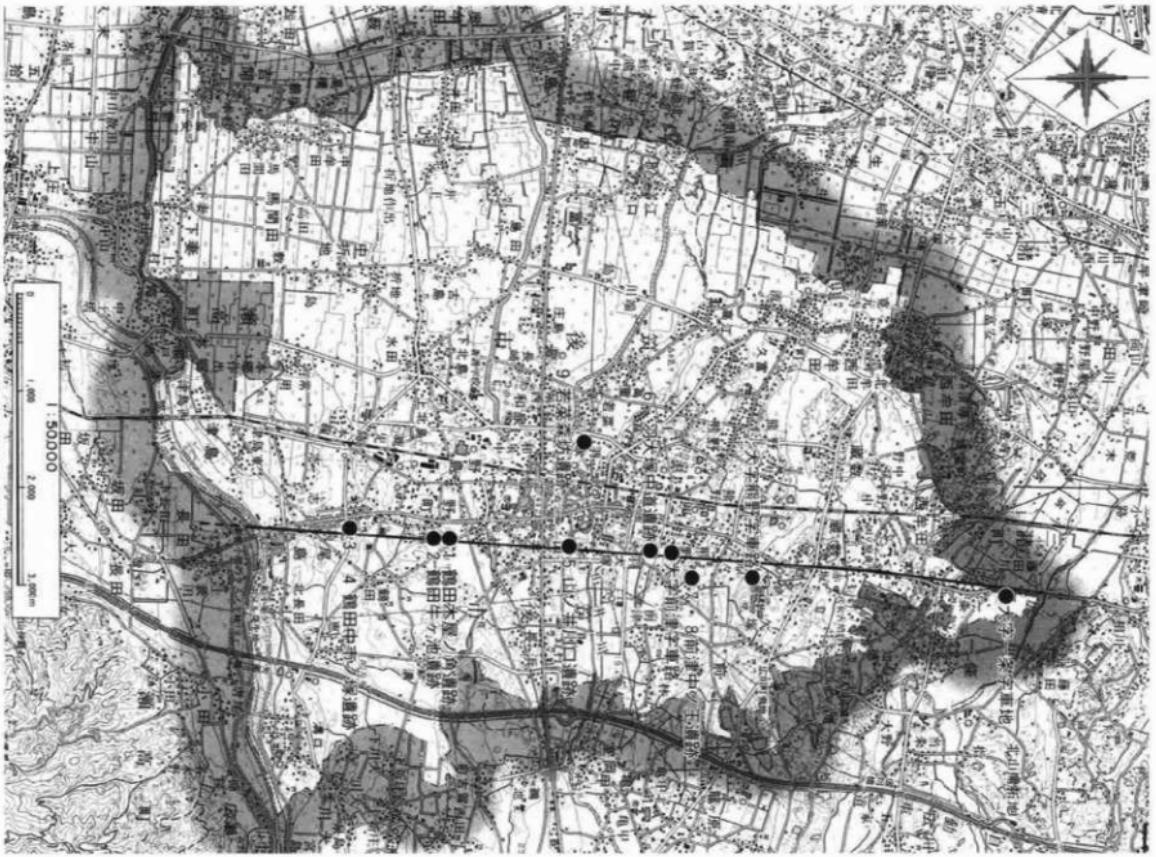


Fig.77-4 鶴田牛ヶ池遺跡（第2次調査）C調査区遺構配置図（1/400）

Fig. 78 筑後市内西海道開通道路分布図 (1:50,000)



土壤

SK02 (Fig.76・Pl.65)

調査区の北端西寄りに位置する。平面形は、ほぼ円形である。規模は南北2.3m、東西1.7m、深さ0.2mをはかる。

SK03 (Fig.76・Pl.66)

調査区の北端西寄りに位置し、SK02の西隣にあたる。平面形は、隅丸方形である。規模は南北0.6m、東西0.8m、深さ0.65mをはかる。

(3) 出土遺物

今回の調査では土師器・須恵器・瓦質土器・陶磁器を出土した。以下、出土遺構別に報告する。

SK02 (Fig.79・Pl.67)

土師器・須恵器が出土した。1・2は土師器の壺である。1は口縁部が外反し、2は緩く外反する口縁部を丸くおさめている。

3は須恵器の壺蓋である。体部外面に不明瞭ながら墨書が認められる。「林家」ではないかと思われるが、一文字めは「北」二文字目は「寶」の可能性もある。一文字は二文字目と比べて肉太に書かれている。但し、不明瞭なため図示していない。また、内面は硯として使用されて平滑になっていて、墨痕も認められる。4は須恵器の壺の体部である。高台径は11.0cmを測る。

SD02 (Fig.79・Pl.67)

瓦質土器が出土した。5は瓦質土器のすり鉢である。1ヶ所に口が残存しているが他にあったかどうかは不明である。

SD03 (Fig.79・Pl.67)

瓦質土器・陶磁器が出土した。6は瓦質土器のすり鉢である。1ヶ所に口が残存しているが他にあったかどうかは不明である。7は白磁の合子蓋である。体部外面に呉貝による施文が認められる。8は、染付の皿である。内底見込みに施文されるが、図柄は不明である。

(4) 小結

遺構の報告文でも触れたが、鶴田牛ヶ池遺跡第2次調査では西海道関連の遺構は明確な形では確認できなかった。溝状の遺構の中には、道路側溝の可能性を否定しきれないものもあるが、現時点での明確な判断はつかない。遺構全体図を報告しているので、各方面からの御教示を賜われば幸いである。

ここでは、鶴田木屋ノ角遺跡第1次調査での成果を中心に若干の考察を試みたい。現在のところ、筑後市内で確認されている西海道と思われる道路状遺構はTab.13のとおりである。今回の調査で確認された路線は、山ノ井川口遺跡と鶴田中市ノ塚遺跡との間にあたる。側溝の断面形状を比較すると、山ノ井川口遺跡では比較的逆台形の形が整っているが、鶴田木屋ノ角遺跡では肩部が不明瞭になり、随分と崩れた断面形状である印象を受ける。

また、出土遺物から道路側溝の埋没時期は、8C後半を中心とした年代が与えられると思うが、今回の調査は道路側溝のごく一部を掘ったに過ぎないので、今後の周辺調査の結果を踏まえて議論することが重要であろう。

西海道の路線については、木下良氏の研究が現状ではもっとも説得力があると思われる。(註1) 筑後市付近の路線は、筑後市大字一条・熊野・前津の字車路(および車地)の大字界の延長をそれと考え、筑後市内は大字蔵敷の1ヶ所で僅かに屈曲する以外は、ほぼ直線に走るとしている。また、筑後市内に比定される葛野駅は大字前津字車路付近とされている。

路線については、市の中央部付近では西寄りの大字和泉を迂回するとした意見もあるが、今までの発掘調査の成果を照らし合わせると説得力に欠ける。なお、今日までに発掘調査で確認した官道クラスの道路状遺構は、すべて木下氏の推定路線上で確認されている。

また、葛野駅についても同様で、筑後中学校屋内運動場建設の際に調査した羽犬塚中道遺跡では、大

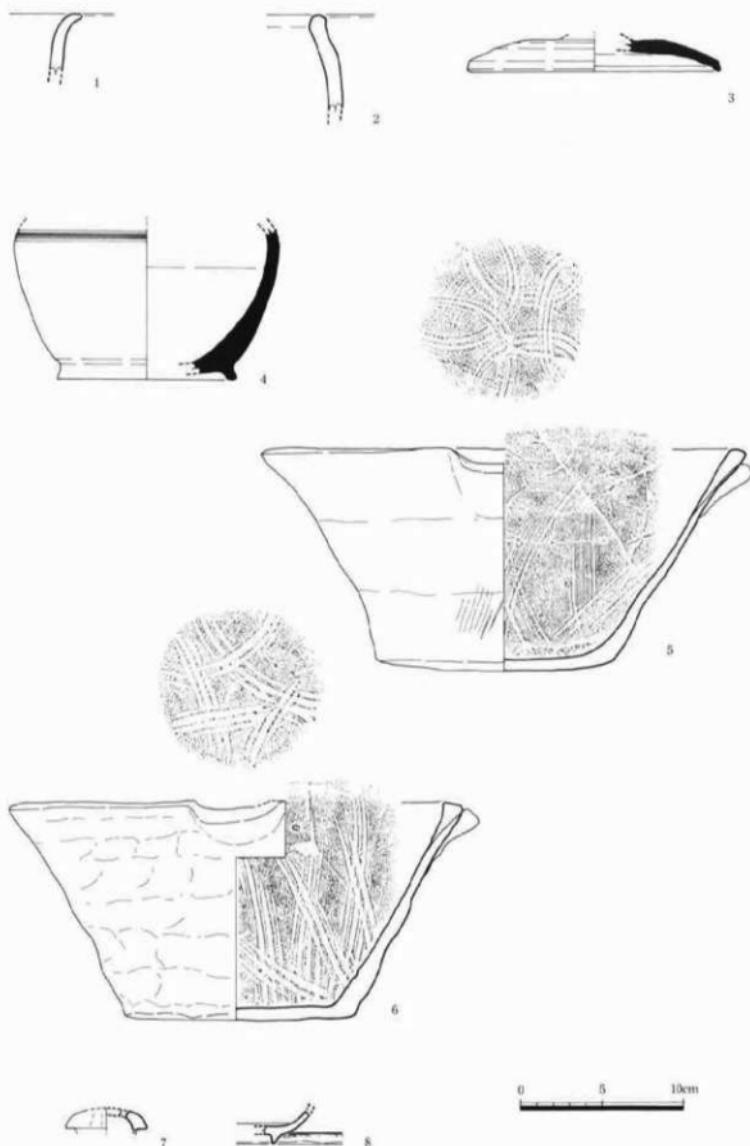


Fig.79 鶴田木屋ノ角遺跡出土遺物実測図（1/3）

No.	遺跡名	主な検出遺構	主な出土遺物	調査面積	調査年度	備考
1	鶴田木屋ノ角遺跡 (第1次調査)	古代官道	埴輪器、土器器	1,000m ²	平成10年度	「林家」? 墓書土器
2	鶴田牛ヶ池遺跡 (第2次調査)	溝	なし	1,327m ²	平成10年度	
3	鶴田中町ノ角遺跡 (第1次調査)	古代官道	土器器	2,600m ²	平成5年度	
4	鶴田中町ノ角遺跡 (第1次調査)	古代官道	土器器	1,000m ²	平成7年度	「□都為葛□」「東」墨書き器
5	山ノ井川口遺跡 (第1次調査)	古代官道	埴輪器、土器器	1,000m ²	平成10年度	「祝」墨書き土器
6	羽大中ノ角遺跡 (第2次調査)	掘立柱建物、 壁穴式住居	埴輪器、土器器	1,000m ²	平成8年度	
7	前津中ノ玉遺跡 (第1次調査)	壁穴式住居、 掘立柱建物	埴輪器、土器器	1,000m ²	昭和60年度	
8	前津中ノ玉遺跡 (第2次調査)	壁穴式住居、 掘立柱建物	埴輪器、土器器	1,383m ²	平成9年度	
9	若狭森野遺跡 (第1次調査)	壁穴式住居、 掘立柱建物	埴輪器、土器器、 麻布陶器	12,000m ²	平成4年度	

Tab.13 筑後市内西海道関連遺跡

型の掘立柱建物が確認され、大量の墨書き土器が出土している。大半は「東」の字が書かれているが、須恵器の坏体部に「□都為葛□」と思われる墨書きも確認している。

今回の調査でも墨書き土器が1点出土している。この墨書き土器は官道の側溝と考えられる遺構から出土した、須恵器の坏蓋である。宝珠つまみをもつタイプである。体部上面の鋸削りが施されないところから、8 C中頃から後半の年代が与えられると思われる。墨書きは、不鮮明ながら「林家」ではないかと思われる。この墨書きの示す意味は現状では判然としなが、律令期に「林」姓の存在は知られており、そのあたりがひとつ可能性を示唆しているのではないだろうか。また、「家」は役所等の意味を持つことから、「林」氏が管理する役所的なもの的存在を考えることも可能である。いずれにしても現在は推測の域を出ない。

なお、今回の報告にあたり、墨書きの判読については太宰府市文化ふれあい館・太宰府市教育委員会・太宰府市史編纂室の協力を得た。末筆ではあるが、記して謝意を表したい。

註

1 木下良 「車路考」藤岡謙二郎退官記念論集 1978

Tab.14 鶴田木屋ノ角・牛ヶ池2次調査遺物観察表

No.	遺構番号	層位	種別	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	残存	口縁部	体外面	体内面	内底面	外底面	色調	胎土	焼成	口縁部 形状	備考	No.
1	ISD01	土器	壺					口縁部 細片	不明	不明	不明			淡基褐色	繊維粒含	やや不良	外反		1
2	ISD01	土器	壺					口縁部 細片	不明	不明	不明			明褐色	赤色粒子多	不良	極く外反		2
3	ISD01	D45	須恵	环盡	158			1 / 3	横ナゲ	横ナゲ	横ナゲ			淡青灰褐色	はは精良	はは良	環筋にかえりあり	上面に「林家」の墨書きあり 転用況 背面に沈殿とカキ目をめぐらす	8
4	ISD01	須恵	壺		11.0			1 / 4	鋸削り 横ナゲ	横ナゲ	ナゲ	横ナゲ	淡青灰褐色	黑色粒子含	精良	良			3
5	ISK02	瓦質	ナリ鉢	30.0	14.5	13.7		口縁部1/2 欠損	横ナゲ	ナゲ	ナゲ	ナゲ	雨打褐色	上部精良	やや良	直線的にひらく 口付	ナリ自は曲線を多用したものの 直線的にひらく 口付	4	
6	ISK03	瓦質	ナリ鉢	28.0	14.0	13.5		口縁部2/3 欠損	横ナゲ	ナゲ	ナゲ	ナゲ	木調整	暗褐色	上部精良 底部細粒多	やや良	直線的にひらく 口付	ナリ自は曲線を多用したものの 直線的にひらく 口付	5
7	ISK03	白磁	合子	5.0				1 / 3	施釉	施釉	施釉	施釉	乳白色	精良	良好		体部に穿孔有		7
8	ISK03	染付	壺					底部細片	施釉	施釉	施釉	施釉	乳白色	精良	良好		内底見込みの焼物 は不明		6

6. 鶴田牛ヶ池遺跡第3次調査

(1)はじめに

当遺跡は、筑後市大字鶴田字牛ヶ池に所在し、標高11.0m位の中位段丘上にある。調査は、平成10年度に施工された県営ほ場整備事業筑後東部地区12工区内において、遺構が掘削・削平を受ける約420m²を実施した。調査期間は平成11年2月17日から6年3月31日までである。この間、重機による表土除去、遺構の検出、掘削、実測、写真撮影等を行った。調査は小林勇作が担当し、高田知恵の協力を得た。

調査の結果、調査区からはピット等を検出し、以下はその成果について報告する。

(2)検出遺構

ピット群

調査区のはば全面から、円形及び椭円形状のピットが多數確認された。ピットの殆どは黒褐色の土壌で、深さは10cm未満と浅いものであった。遺構としては可能性は低く、遺構面の凹部に堆积した鉢底、若しくは桶等による粗重と考えられる。遺物はSP1及びSP2から縄文土器片を1点づつ出土している。

(3)出土遺物

SP1 [Fig.80]

縄文土器

鉢 (1) 口縁部の細片で、口縁部は大きく外反する。外面には粗大指円の押型文、内面及び口縁部には原体による參差文を施文する。胎土は雲母、角閃石を少量含む。

(4)小結

調査区からは主要と思われる遺構は確認されずおらず、遺物は縄文土器片を僅かに認めただけである。

本来、調査の成績を記すところであるが、同事業である「鶴田牛ヶ池遺跡第3次調査」の(4)小結で触れることとした。

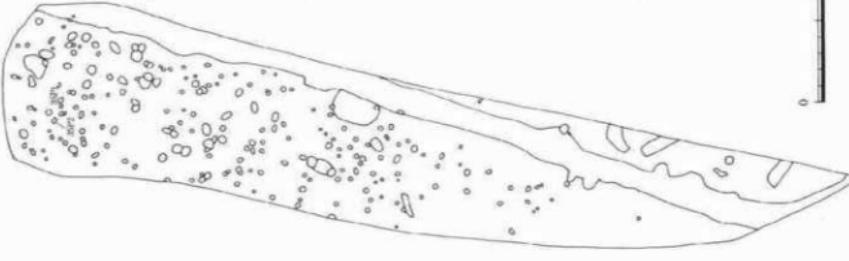


Fig.80 3SP1出土土器実測図 (1/300)



Fig.81 鶴田牛ヶ池遺跡 (第三次調査)
遺構全體実測図 (1/300)



Fig.80 3SP1出土土器実測図 (1/300)

7. 鶴田牛ヶ池遺跡第4次調査

(1) はじめに

当遺跡は、筑後市大字鶴田字牛ヶ池に所在し、標高11~12m位の中位段丘上にある。調査は、平成10年度に施工された県営は場整備事業筑後東部地区12工区内において、遺構が掘削・削平を受ける2,791m²を実施した。調査期間は平成11年2月17日から同年3月31日まで、この間、重機による表土除去、遺構の検出、掘削、実測、写真撮影等を行った。なお、遺構全体実測図は(株)写測エンジニアリング、空中写真は(有)写真企画に委託した。調査は小林勇作が担当し、高田知恵の協力を得た。

調査の結果、調査区からは竪穴式住居、壺棺墓、溝、土壙等を検出し、以下はその成果について報告する。

(2) 検出遺構

竪穴式住居

4SI20

調査区のはば中央の南部で確認した。住居の南西側は現代のカクランを受けており、平面プランは不明であるが、隅丸方形を呈するものと思われる。北東壁長は3.70mを測り、深さは0.10mと遺存状態が非常に悪いものであった。床面上までの埋土は黒色土が堆積し、住居の底部には黒色土と茶色土の混合土(やや締まった埋土)で貼床を施していた。住居の方位はN-52°-Wを示す。住居内からは南東部と北西部の壁に近い部分から2基の屋内土壙を検出した。南東部の屋内土壙は楕円形状の平面プランを呈し、深さは床面から0.36mを測る。出土遺物はない。一方、北西部の屋内土壙は隅丸方形の平面プランを呈し、土壙内からは土師器(甕)が出土した。土師器(甕)は土壙の中位から出土し、上層部は黒色土、下層部は淡茶灰色粘土が堆積していた。深さは床面から0.46mを測る。

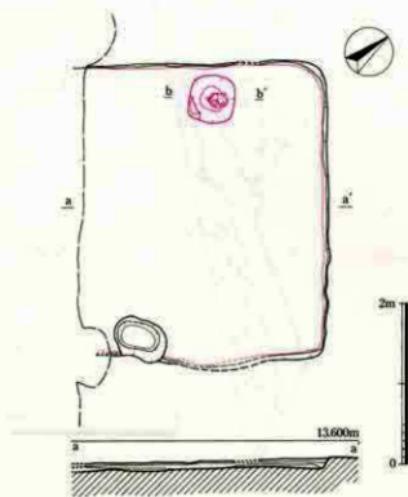


Fig.82 4SI20実測図 (1/40)

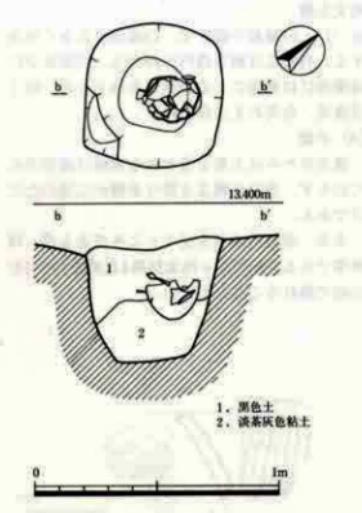


Fig.83 4SI20屋内土壙実測図 (1/20)



Fig.84 鶴田牛ヶ池遺跡遺構全体実測図 (1/300)

壺棺墓

4ST10

調査区の北東部で検出した。遺構は現代のカクランを著しく受けしており、検出時においては平面プランを確認することができなかった。しかし、カクラン土を徐々に除去していくと壺が上位からの圧力によって押しつぶされたかのような状態で確認され、平面プランを抑えることができた。接口式の成人棺と思われ、口縁の合わせ口には灰色粘土の目張りを施している。壺棺の主軸はN-83°-Eを示し、埋置角度は+2°30'である。壺棺内からの出土遺物はなかった。

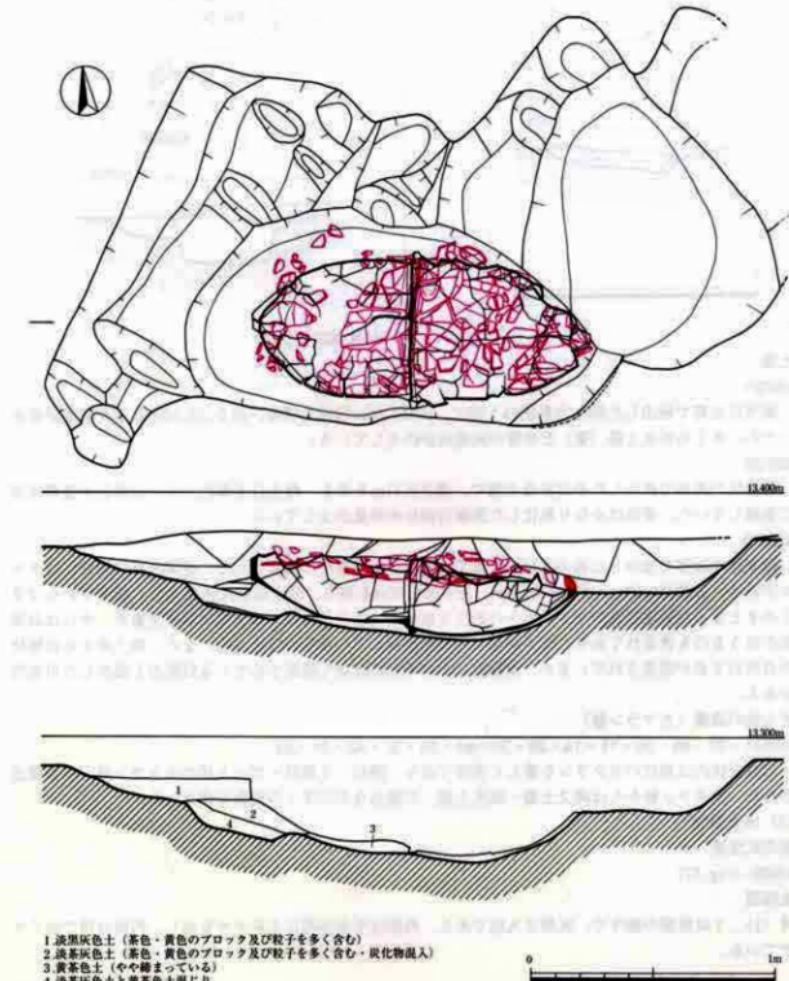


Fig.85 4ST10実測図 (1/20)

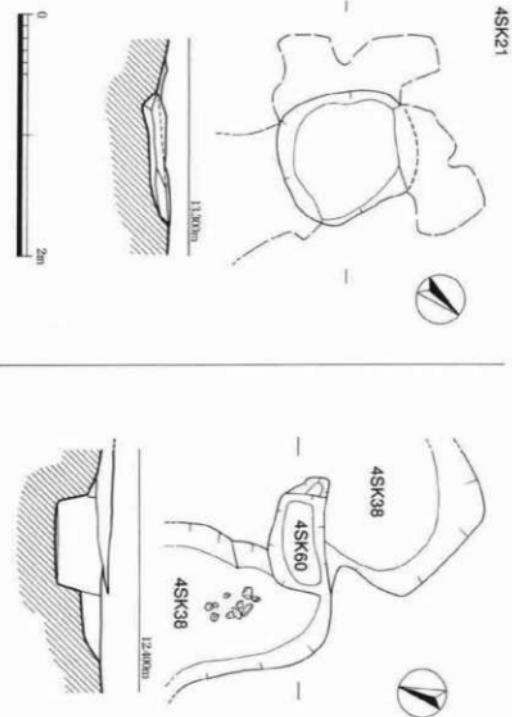


Fig.86 4SK21・38・60実測図(1/40)

土壤

4SK21

調査区北部で検出した隅丸方形状の土壤で、径は1.00m前後を測る。深さは0.15mと遺存状態が悪かったが、多くの弥生土器（甕）と少量の河原石が出土している。

4SK38

調査区の西部で検出した不定形な土壤で、深さ0.11mを測る。埋土は茶褐色土で、自然石が遺構底部に集積していた。遺物はかなり風化した墨曜石片が多く出土している。

4SK60

調査区の西部で検出した長方形状の土壤で、4SK38の下端から確認された。遺構内部の西側にはテラスがあり、長軸は0.85m、短軸は0.46m、深さは0.37mを測る。埋土は淡灰色粘土で、埋土中からは多くのまとった黒曜石及びサスカイトの割片を認めた。出土した割片は全部で30点を数え、中には剥離の合うものも含まれており、全てかなりの風化が進んでいるものであった。また、埋土中からは埠状の自然石2点が確認されているが、遺物取り上げ時に4SK38で確認されている自然石と混在した可能性がある。

その他の遺構（カクラン跡）

4SK01・02・05・06・11・14・26・32・34・36・37・42・51・53

当調査区内は現代のカクランを若しく受けしており、溝状・土壤状・ピット状のカクラン跡が多數確認された。カクラン跡からは縄文土器・弥生土器・石製品などの多くの遺物が出土した。

(3) 出土遺物

竪穴式(住居)

4SK20 (FIG.87)

土師器

体 (1) 1は底部の細片で、底部は丸底である。外面は不定方向に工具ナデを施し、内面は指で強くナデている。

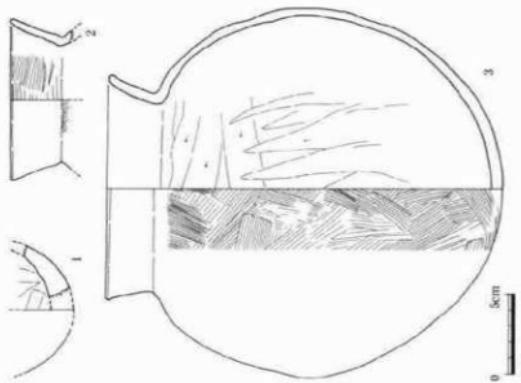


Fig. 87 4SI20出土土器実測図 (1/3)

堀 (2・3) 2は「く」字形口縁型の口縁部細片で、口径10.0cmを復原する。口縁部外面はヨコナデ、口縁部内面及び体部外面は刷毛目の調整を施す。3は屋内土器から出土した土器で、「く」字形口縁型のはば完形品である。体部が強るタイプで、口径13.9cm、器高24.7cmを測る。口縁部内面はヨコナデ、体部外面は刷毛目、体部及び底部の内面はヘラケブリ、底部外面はナデの調整を施す。堀の体部内面下位から底部にかけて、更に体部外面上中位から口縁部にかけては、堀が厚く付着しているのが看取される。

4ST10 弔生土器

上堀 (4) はば完形品で口径は48.5cm、底径は48.6cm、器高は63.5cm、器壁は8mm前後を測る。

口縁部に粘土帯を取り付けたもので、口縁端部外面には1条の沈線と沈線上位及び下位にはランダムに刻み目を施している。また、口縁部外面のすぐ下位と体部外面のほぼ中位には3条の沈線を施す。内外面ともナデ調整を行っている。

下堀 (5) はば完形品で、口径54.0cm、底径9.7cm、器高75.0cm、器壁8mm前後を測る。口縁部に粘土帯を取り付けたもので、口縁端部外面には1条の沈線を施す。体部外面のはば中位には断面が三角形状の貼付突部を施し、外面は工具によるナデ、内面はヘラガキの調整を行っている。

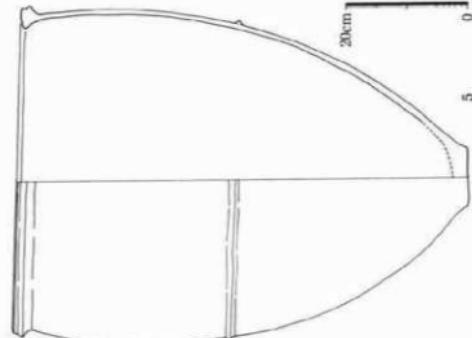
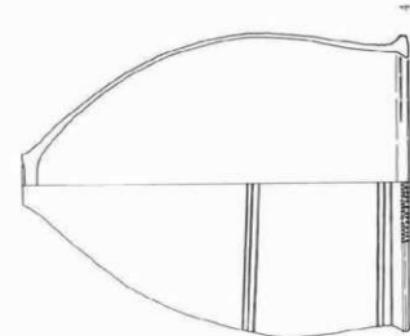


Fig. 88 4ST10出土土器実測図 (1/8)

堀 (2・3) 2は「く」字形口縁型の口縁部細片で、口径10.0cmを復原する。口縁部外面はヨコナデ、口縁部内面及び体部外面は刷毛目の調整を施す。3は屋内土器から出土した土器で、「く」字形口縁型のはば完形品である。体部が強るタイプで、口径13.9cm、器高24.7cmを測る。口縁部内面はヨコナデ、体部外面は刷毛目、体部及び底部の内面はヘラケブリ、底部外面はナデの調整を施す。堀の体部内面下位から底部にかけて、更に体部外面上中位から口縁部にかけては、堀が厚く付着しているのが看取される。

土壤

4SK21

弥生土器

甕（6～9） 6は口縁部に断面が三角状の貼付け突帯を施した甕で、口径は22.0cmを測る。口縁部内外面はヨコナデ、体部外面は刷毛目、体部内面はナデの調整を施す。胎土は1～2mm程度の砂粒を多く含む。7は口縁部に断面が三角状の貼付け突帯を施した甕で、口径は24.0cmを測る。口縁部内外面はヨコナデ、体部外面は刷毛目の後浅い沈線を施し、体部内面はナデの調整である。胎土は1mm程度の砂粒を含む。8は底部の破片で、底径7.5cmを測る。底部は厚く、やや「ハ」字形状に開き、底面の窪みは浅い。9は底部のみの細片で、底径は6.2cmを測る。底部は厚く、底面の窪みはやや深い。

4SK60

石器

使用剥片（25） 石材は黒曜石製で、縱長の剥片を利用している。ポジティヴな裏面右側部には自然面を残しており、表面の右縁を使用しているものと思われる。

その他の出土遺物（カクラン跡及び表探）

4SX01・02・05・06・11・14・26・32～34・36・37・42・51・53、表探

前項の（2）検出遺構でも述べたが、当調査区内は著しく現代のカクランを受けた跡が確認され、カクラン跡からは多くの遺物が出土した。ここでは、カクラン跡及び表探から出土した遺物の中で図示できるものについて報告する。

縄文土器

深鉢（10～18） 10～15は楕円押型文土器の細片である。10は外面及び内面上位に同一原体による小さめの楕円文を横走施文し、内面下位はナデ調整を施す。11・12は外面及び内面上位に同一原体による粗大楕円文を施文し、内面下位はナデ調整を施す。施文の方向は不明である。11の外面には煤が付着している。13～15は外面及び内面上位に同一原体による粗大押型文を施文し、内面はナデ調整を施す。施文の方向は不明である。16は山形押型文土器の口縁部細片で、口縁端部外面には原体による条痕文、口縁部外面下位及び体部内面には同一原体による山形文を施文する。体部外面及び口縁部はナデの調整を施し、口径は26.0cmを復原する。17・18は外面に微隆起線文を施文した細片で、内面はナデの調整である。18の外面には煤が付着している。10は4SX02、11は4SX42、12は4SX11、13は4SX01、14は4SX26、15は4SX51、16は表探、17は4SX14、18は4SX05の出土である。

弥生土器

鉢（19） 4SX37から出土した口縁部の細片である。

甕（20～23） 20・21は口縁端部に突帯を貼り付けたもので、21は4SX14、22は4SX36から出土した口縁部の細片である。23は4SX36、24は4SX53から出土した底部の細片で、共に底部外面に窪みを呈するタイプである。底径は23が6.6cm、24が6.2cmを測る。

土築器

高杯（24） 脚部の細片で、脚部底径は12.0cmを復原する。4SX53から出土した。

石器

ナイフ形石器（26） 4SX06から出土した。石材はサスカイト製で、表面の左上辺には細かく刃部を作り出している。表面の右上辺及び左下辺に細かく平坦面の整形加工を施す。

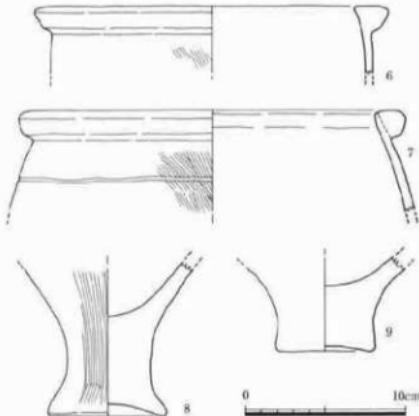


Fig. 89 4SK21出土土器実測図 (1/3)

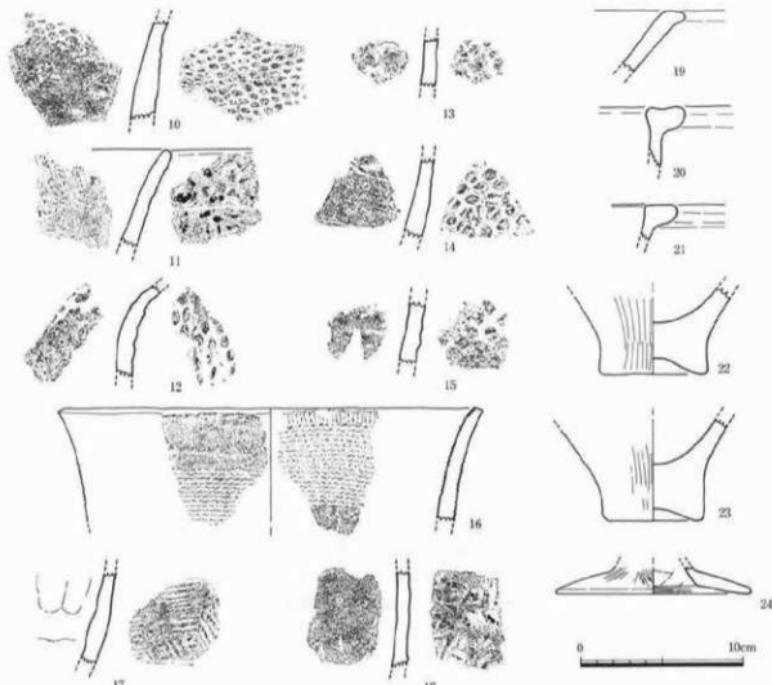


Fig.90 その他の出土土器実測図 (1/3)

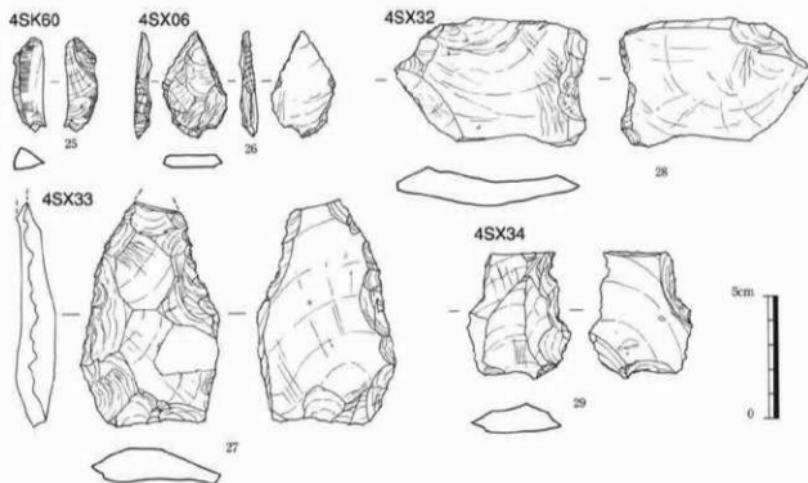


Fig.91 石器実測図 (1/2)

石槍(27)、4SX33から出土した。石材はサスカイト製で、尖頭部を欠損する。角礫ないしは重角礫から剥離された断片を素材としたものと思われ、表面のほほ全体には調整加工を施し、表面左縁には刃部を作り出している。制作途中の未製品と思われる。裏面には大削離面を大きく残す。

二次加工石器(28・29)共にサスカイトを石材とし、風化が進んでいる。28は五角形状の断片を素材とした長状器で、表面左下辺に若干の二次加工を施し、刃部を作り出している。4SX32からの出土である。29は細長状の断片を素材とし、裏面左下辺に打面を残す。裏面下縁に若干の二次加工を施し、刃部を作り出す。4SX34から出土した。

(4) 小結

当調査区からは旧石器—古墳時代にかけての遺物や遺物が確認された。

ここでは、当調査区南側に位置する「鶴田牛ヶ池遺跡第3次調査」の成果とあわせて各時代について概観することとする。(遺構番号の頭に記載している番号は次數を示す。)

旧石器時代

市内で確認されている旧石器は、竪敷遺跡G地点(天字竪敷字坂口)で出土した角礫状石器、鶴田東大坪遺跡第3次調査(天字鶴田東大坪)から出土したナイフ形石器の僅か2点である。何れも明確な遺構や包含層の出土ではなく、周辺地塊においても市ノ上北屋敷遺跡(久留米市)、大草平遺跡(尾野町)などで僅かに例があるにすぎない。

さて、今回出土した旧石器は、4SK60から多量に出土した黒曜石及びサスカイトの断片と他用剥片(25)、4SX06から出土したナイフ形石器(26)、4SX34から出土した二次加工石器(29)で、先述した例に次ぐものとなった。4SX06及び4SX34の旧石器はカクラン層からの出土であるが、注目されるのは、4SK60H土の旧石器は淡灰褐色土中から出土しており、板にこの地区における旧石器包含層が「淡灰色粘土層」だったこと、今後旧石器の発見において有力な手がかりとなることであろう。

旧石器は、現時点ではほんの数例に止まっているが、整理作業が進むにつれて今後更に増加していくことであろう。

縄文時代

今回確認された縄文時代の遺構は3次・4次と共に確認され得る。出土した遺物は全てカクラン層から出土したものである。出土遺物をみていくと、土器では指円押型土器・山形押型土器・条根文土器があり、既知の編年からは早木台式と田村式を含むもので、早期後半期の良好な資料となつた。また、石器では4SX33出土の石槍(27)、4SX32出土の二次加工石器(28)があり、土器と同様の時期が見えられるものと考えられる。

弥生時代

この時期における遺構は、豪積墓であるIST10と土壙である4SK21である。

豪積墓は1基のみの検出に止まり、豪積内からの出土遺物はない。出土した遺留は上部、下部と共に櫛口式の編年によるK IIa式に相当し、中期前半頃と考えられる。また、4SK21から出土している壺からも当該期に比定されよう。

古墳時代

当該期の遺構は堅穴式住居4SI20の1軒がある。

住居の南北側は残念ながら現代のカクランにあり、全体プランを確認することができなかつたが、一辺4m位の隅丸方形状の住居であったものと想定される。主柱穴並びに壁体構造は設けておらず、カマドは検出されていない。また、住居内からは2基の堅内土壙を確認しており、内1基からは時間帯を比定できる良好な資料を認めている。時期は4°C後半～5°C前半頃が考えられよう。

参考文献

- 富木直樹 「筑後市史 第一卷」筑後市史編纂委員会 1997
柴田 勉 「筑後市地区遺跡群」筑後市教育委員会 2000
山崎聰男 「日本土器事典」集出版 1996
橋口道也 「九州版自動車道開通文化財調査報告書31 中巻」福岡県教育委員会 1979

IV.まとめ



Fig. 32 平成10年度鶴田地区遺跡群
平成10年度に実施した東部地区遺跡群発掘調査で鶴牛ヶ池地区は旧石器時代から近世まで幅広い時期の調査を行っている。

鶴牛ヶ池遺跡4次調査⑥からナイフ型石器等、市内では2例のみであった旧石器遺物を出土する」となり、今後以後市内での旧石器時代遺跡調査の手がかりとなる資料である。

縄文時代

鶴牛ヶ池遺跡1・2次調査①・②、鶴牛ヶ池遺跡3次・4次調査⑤・⑥から縄文早期の土器を出土している。調査地は北地である市南端の中でも比較的標高の高い11m前後の台地上に形成される。市内もその縄文早期の遺跡も市南部に集中するが、その殆どは標高8m~9mの低地に展開しており、開拓が生じる。

弥生時代

鶴牛ヶ池遺跡4次調査⑥で中期前半の變形墓を検出している。しかし、調査区からは1基しか検出されておらず、周辺での試掘調査でも確認されておらず、当該期の墓域には問題が残った。

鶴田西牛ヶ池遺跡③からは、後期の堅穴住居等の良好な資料を得られた。今後、周辺遺跡の出土例と比較検討が課題である。

古墳時代

鶴田牛ヶ池遺跡4次調査⑥では4世紀後半から5世紀前半の堅穴住居を検出している。周辺には当該期の集落は単独で検出される例が多数を占め、今回の調査地は削平は受けているが同様である。また、鶴田東牛ヶ池遺跡2次調査②でも堅穴住居を検出している。

歴史時代

鶴田木屋ノ角遺跡・鶴田牛ヶ池遺跡2次④で推定官道跡の確認調査を行っている。しかし、調査地は東西が台地上になり谷部での検出例であるが、確認のみの為、路面構造の成果は同年調査している山ノ井川口遺跡に委ねる。しかし、溝出土の土器の中に須恵器の墨書き土器を出土していることは重要な点である。

近世・近代・現代

鶴田西牛ヶ池遺跡③での出土遺物は豊富である。時期的には18世紀後半を中心になり幕末までの遺物が出土している。

以上が鶴田牛ヶ池地区周辺の調査実績を概略でまとめた。今後、これらの資料を生かすべく、新たな調査事例や調査実績の再検討、資料調査等の成果を期待するところである。

筑後東部地区遺跡群では平成5年度から県営は場整備事業として発掘調査を実施してきた。平成10年度までに40遺跡の調査を行い、数多くの成果を挙げてきた。しかし、「遺跡保存」の名の下に地権者や事業主には多大なご協力とご理解を頂いたことは感謝の意に堪えない。また、調査された遺跡によって筑後市の歴史を紐解く資料が蓄積され、その資料が文化財の保護、活用の材料となれば幸いである。

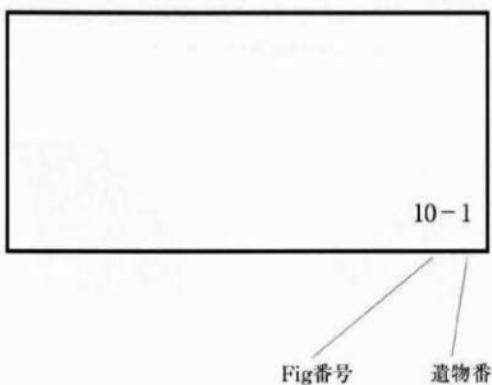
参考文献

- 註1.「筑後市史 第1巻」筑後市史編纂委員会 1997
註2.「筑後西部第2地区遺跡群(Ⅲ)」筑後市教育委員会 2000
註3.「筑後東部地区遺跡群Ⅲ」筑後市教育委員会 2000

P L A T E

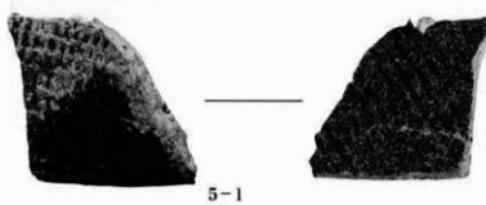
凡例

遺物写真右下の番号は、以下のとおりである。





溝口北新替遺跡調査区全景（東から）



5-1



5-2

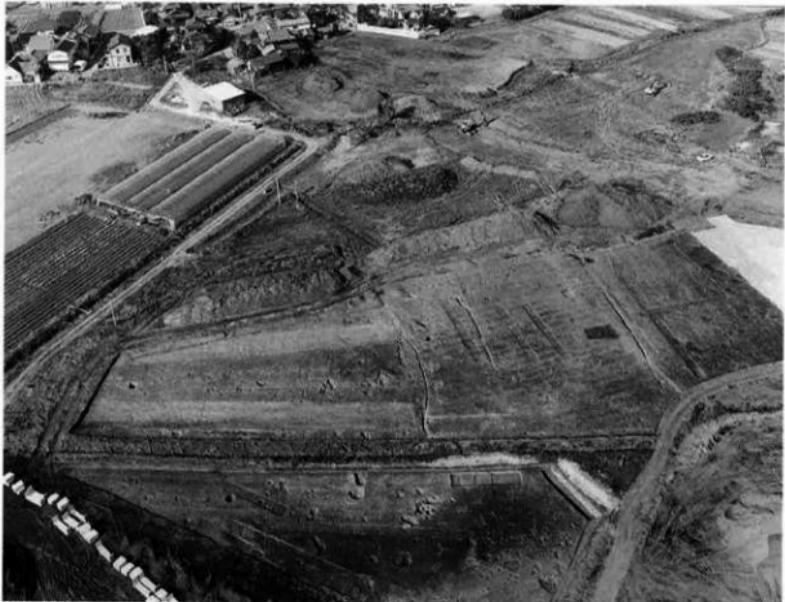
溝口北新替遺跡出土遺物



鶴田東牛ヶ池遺跡第1次調査全景（真上から）



鶴田東牛ヶ池遺跡第1次調査 SK001土層断面（南から）



鶴田東牛ヶ池遺跡第2次調査全景（東から）



鶴田東牛ヶ池遺跡第2次調査全景（真上から）



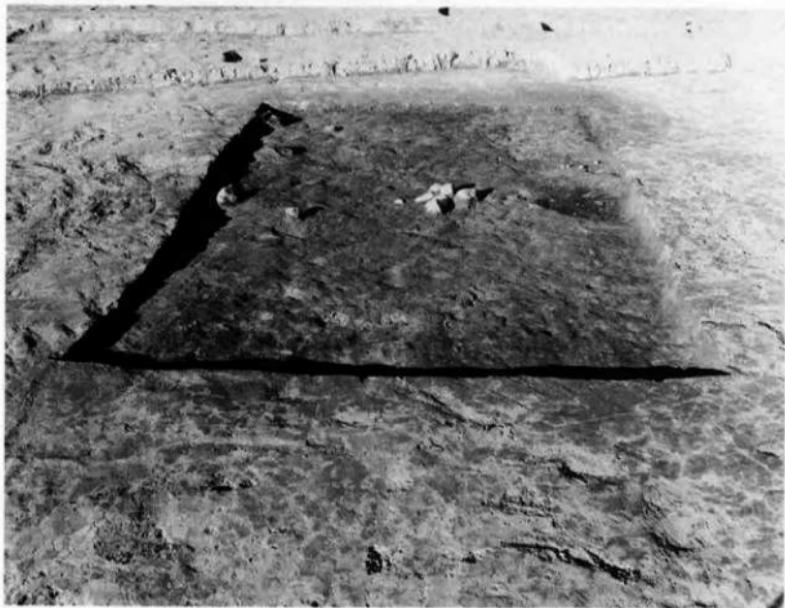
鶴田東牛ヶ池遺跡第2次調査 SK005（南西から）



鶴田東牛ヶ池遺跡第2次調査 SK005完掘状況（南西から）

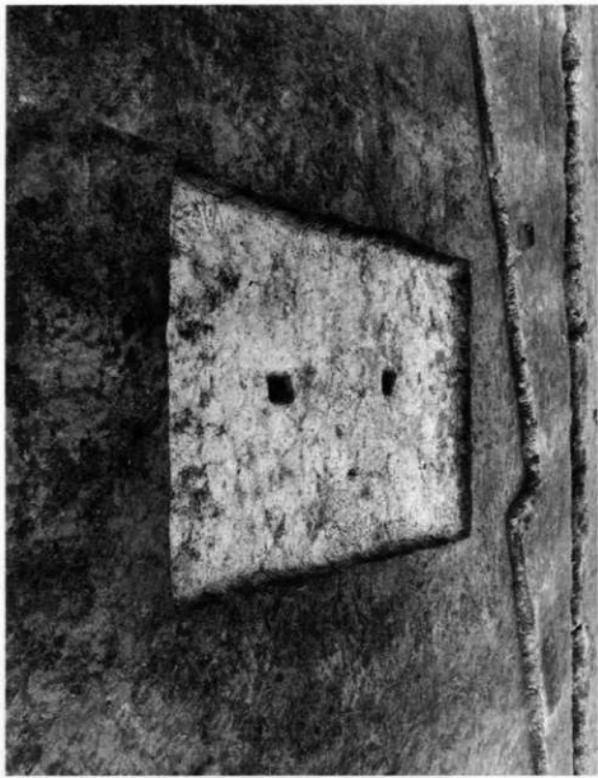


鶴田東牛ヶ池遺跡第2次調査 SI010検出状況（南から）



鶴田東牛ヶ池遺跡第2次調査 SI010床面検出状況（南から）

鶴田東牛ヶ池遺跡第2次調査 S1010住居内土壤（西から）



鶴田東牛ヶ池遺跡第2次調査 S1010住居内土壤（西から）





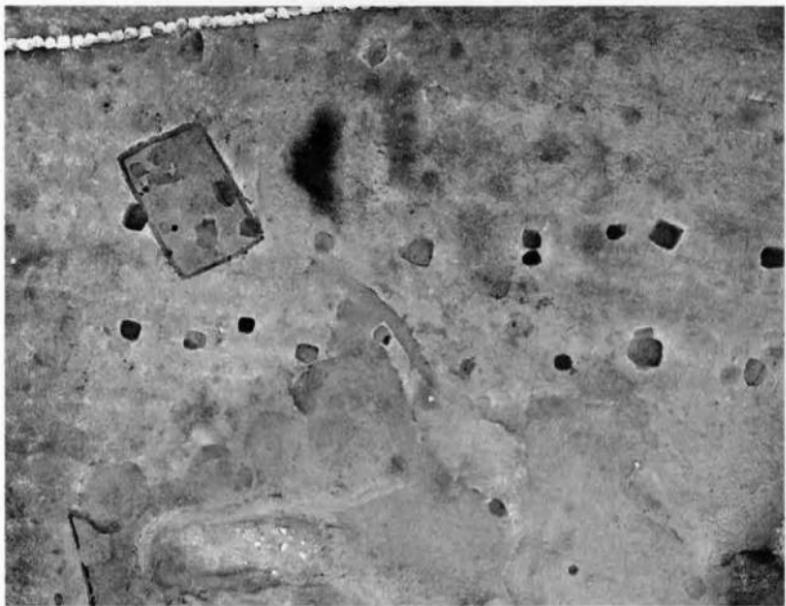
鶴田西牛ヶ池遺跡調査前全景（南東から）



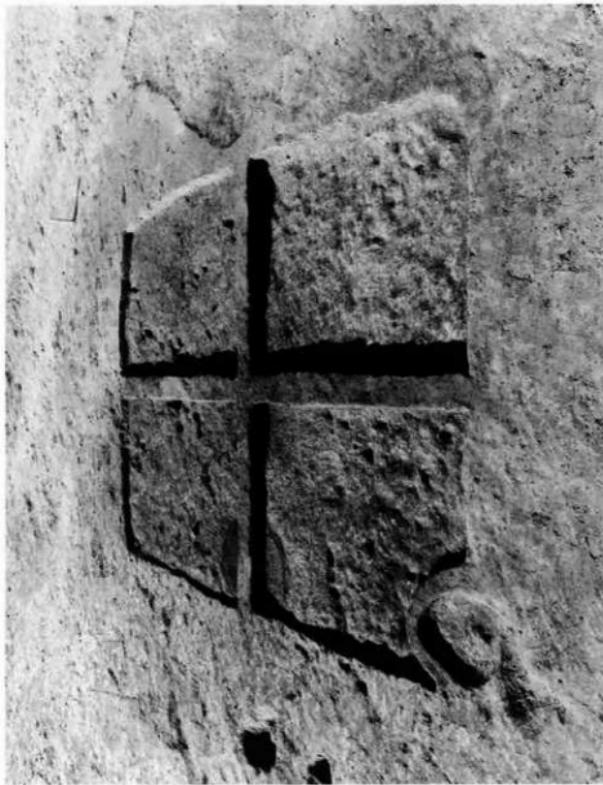
鶴田西牛ヶ池遺跡全景（真上から）



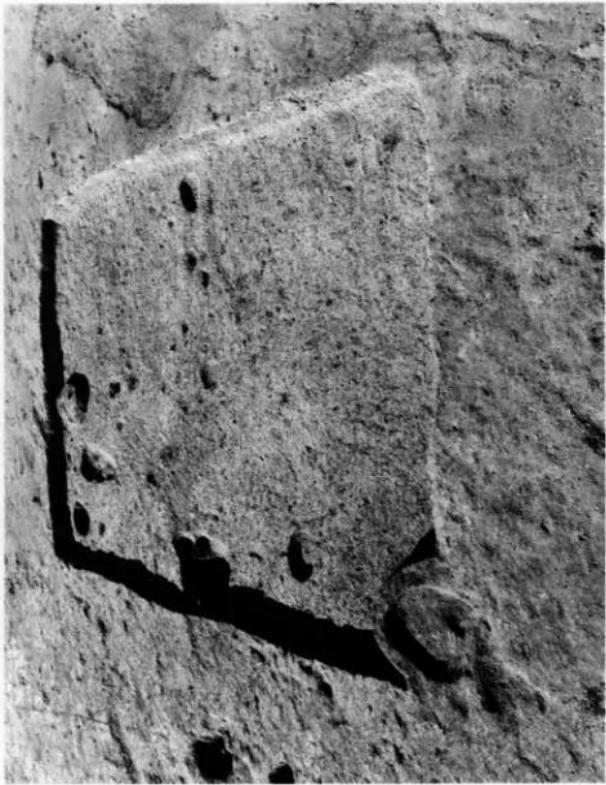
住居群完掘状況（真上から）



掘立柱建物群完掘状況（真上から）

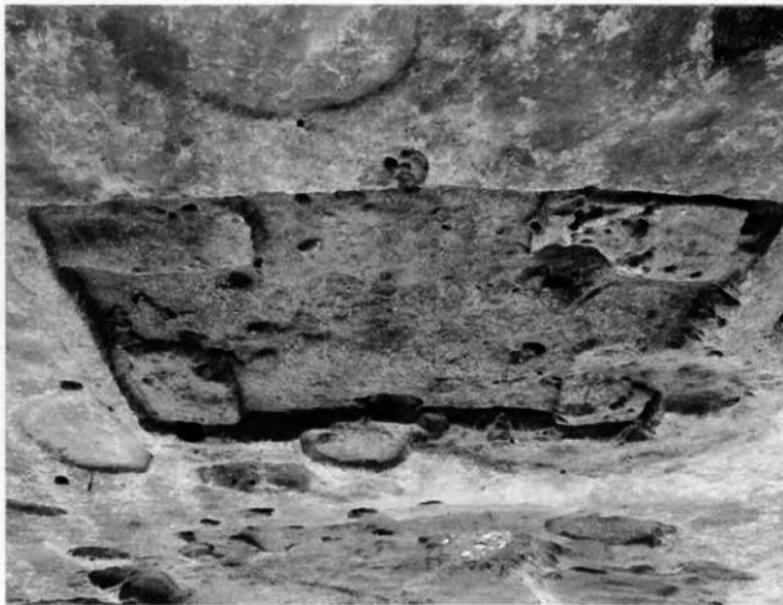


S1001床面突出状況（東から）

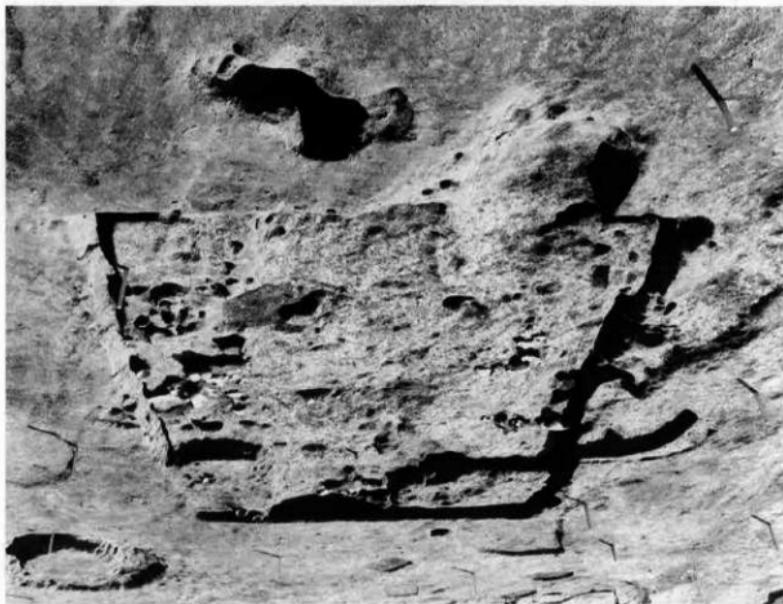


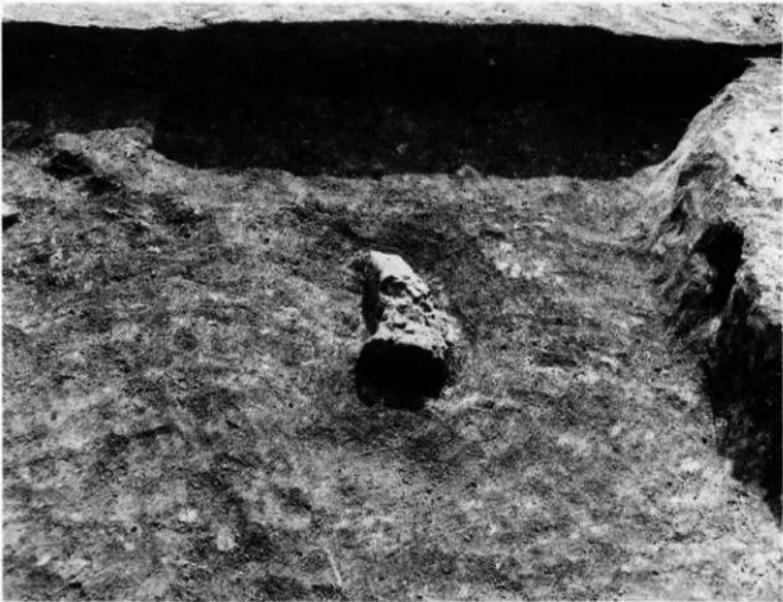
S1001元割状況（東から）

S1010床面 · 土器焼出状況 (東方・弓)



S1010床面 · 土器焼出状況 (東方・弓)





SI010土製支脚出土状況（北から）



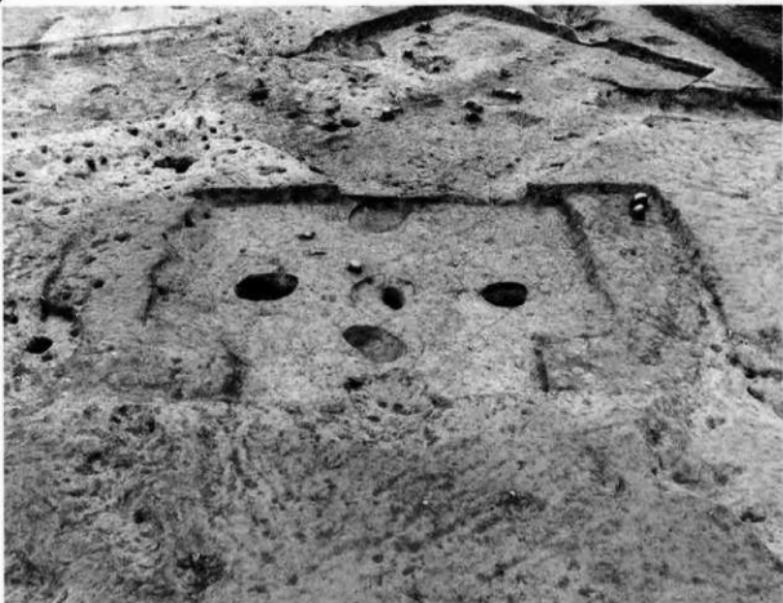
SI010土器出土状況（北から）



SI010住居内土壤土層断面（北から）



SI010住居内土壤完掘状況（北から）



SI025床面検出状況（北から）



SI025完掘状況（北から）



SI030完掘状況（北から）



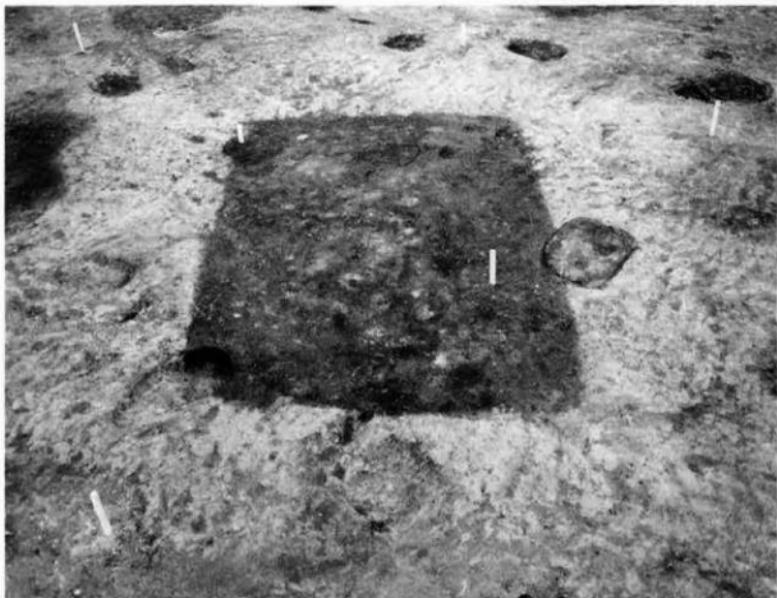
SI030柱穴完掘状況（北から）



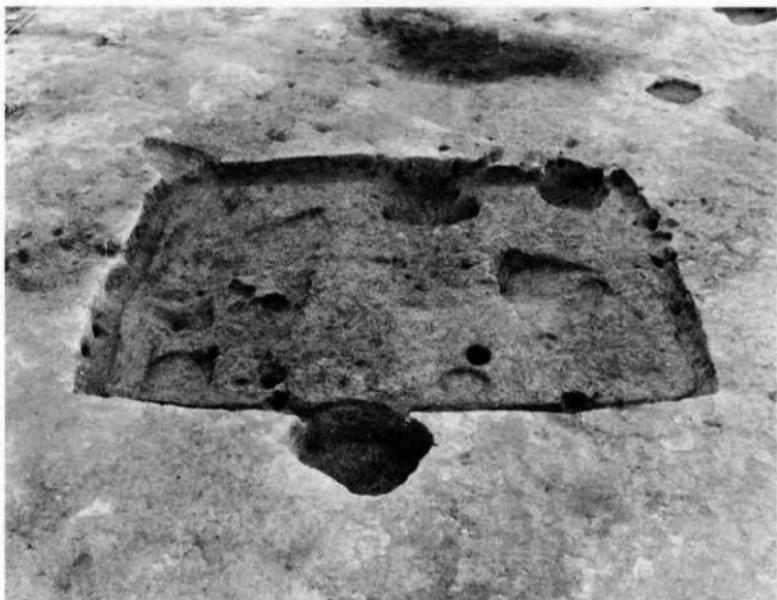
SI035床面完掘状況（東から）



SI035東南隅ベット完掘状況（東から）

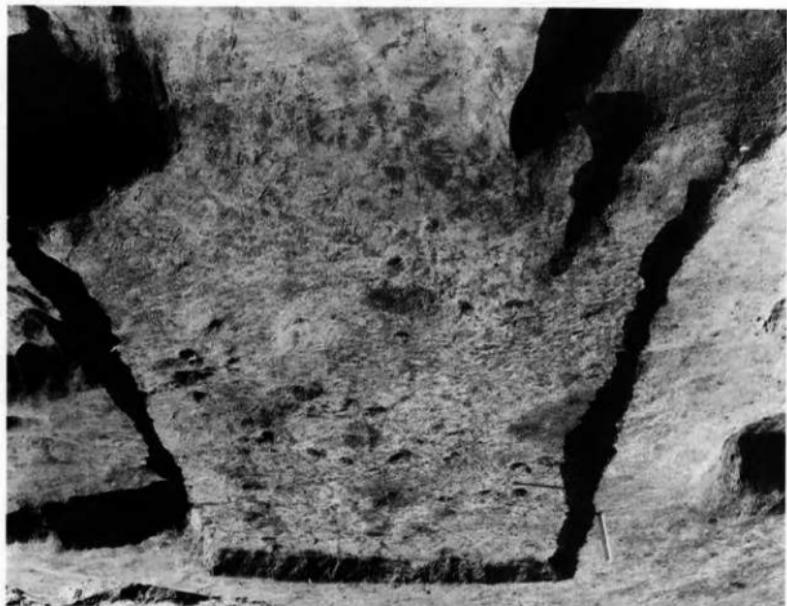


SI050検出状況（東から）



SI050完掘状況（北から）

S1075米面擦出狀況（東北向）



S1070米面擦出狀況（東北向）





SI075完掘状況（東から）



SI080第1床面検出状況（東から）



SI080第2床面完掘状況（東から）



SI085床面検出状況（東から）



SI085完掘状況（東から）



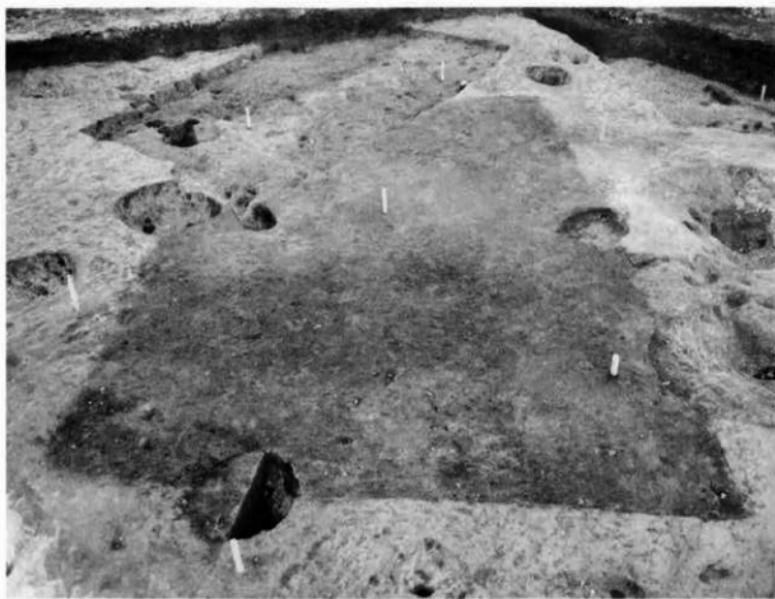
SI095床面検出状況（北から）



SI095完掘状況（北から）



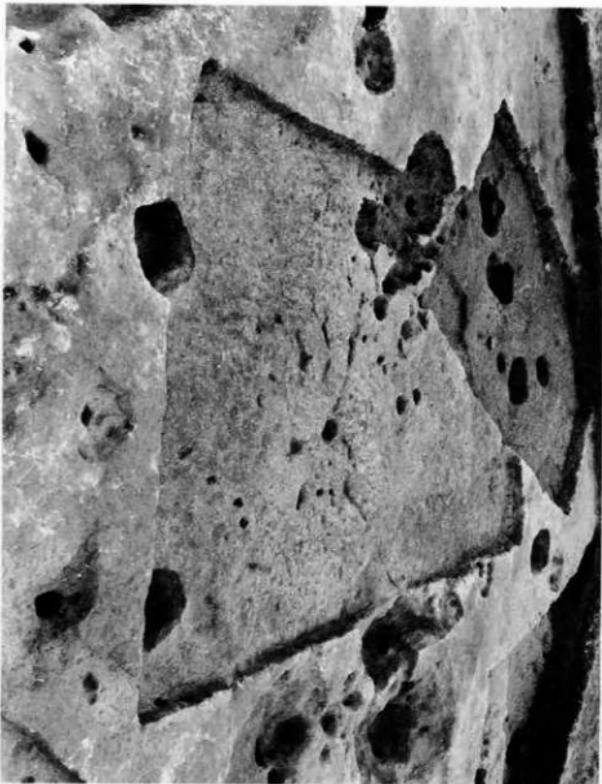
SI100床面検出状況（東から）



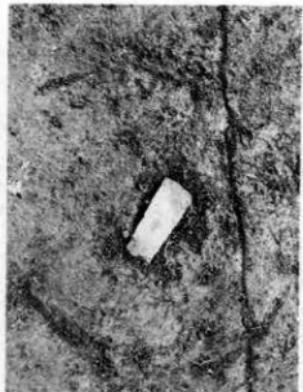
SI105検出状況（北東から）



SI105床面検出状況（北東から）



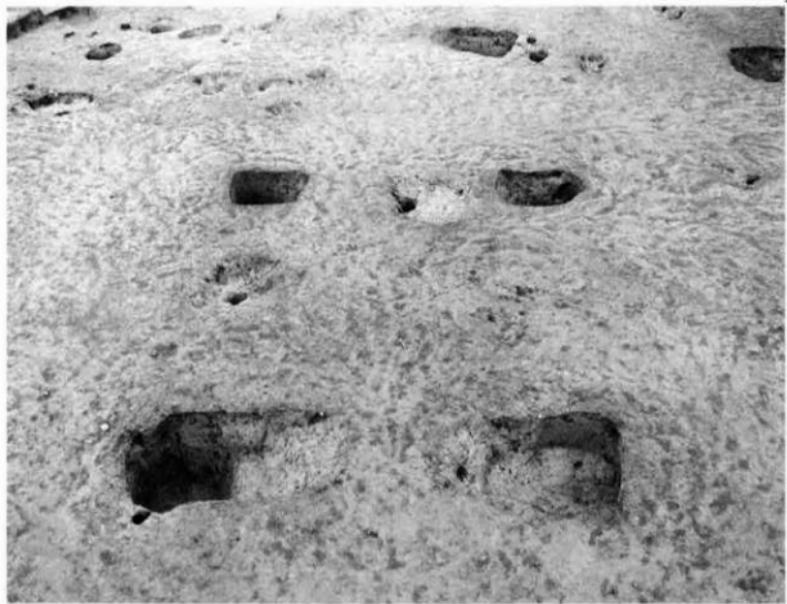
SU105完備状況（東から）



石軸出土状況（北西から）



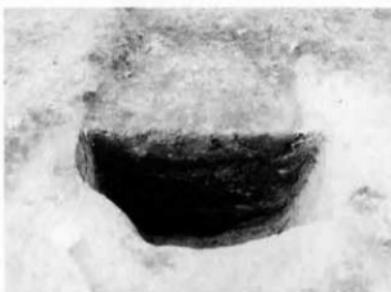
住居内土器遺物出土状況（東から）



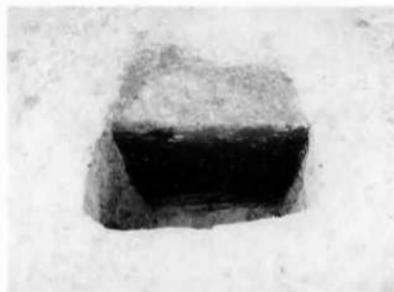
SB040完掘状況（東北から）



SB040a土層断面（北東から）



SB040b土層断面（南西から）



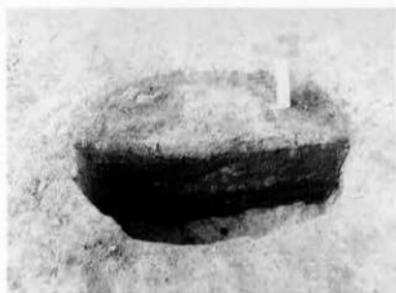
SB040d土層断面（南西から）



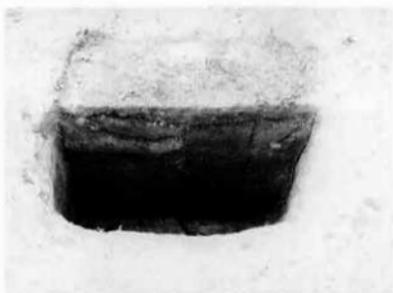
SB040e土層断面（北から）



SB045完掘状況（南東から）



SB045a土層断面（東から）



SB045b土層断面（北から）



SB040c土層断面（南から）

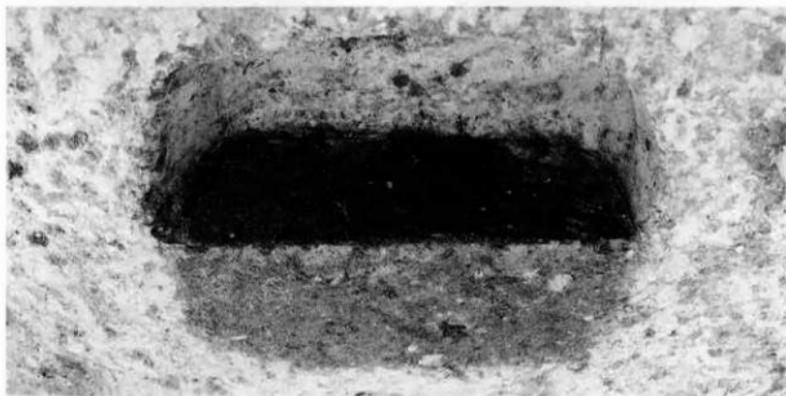


SB040d土層断面（北東から）

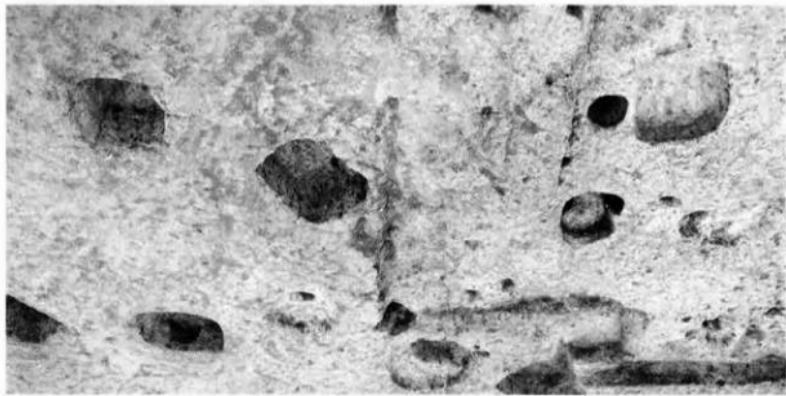
SI055d 土壁斷面 (背面力・S)



SI055c 土壁断面 (背面力・S)



SI055e 土壁断面 (背面力・S)





SB065完掘状況（東から）



SB065a土層断面（南から）



SB065b土層断面（南から）



SB065c土層断面（南から）



SB065d土層断面（南から）



SI110a土層断面（東から）



SI110b土層断面（東から）



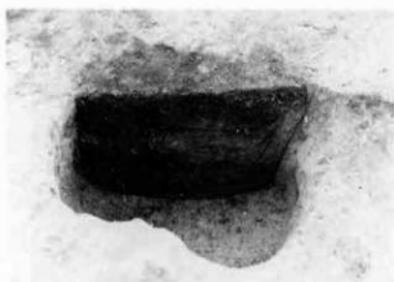
SI110d土層断面（東から）



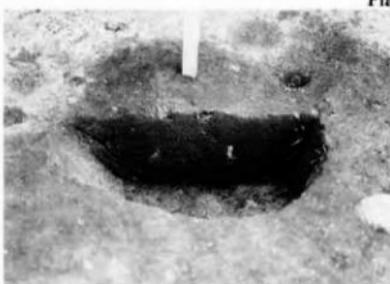
SB120・125検出状況（北から）



SB120・125完掘状況（北から）



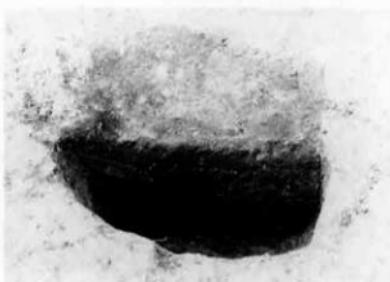
SB120a 土層断面（北から）



SB120b 土層断面（北から）



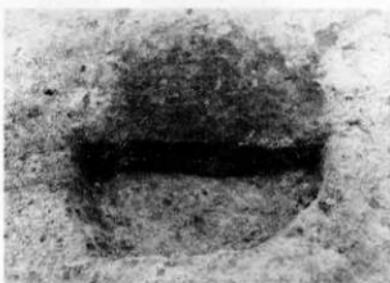
SB120c 土層断面（北から）



SB120d 土層断面（南から）



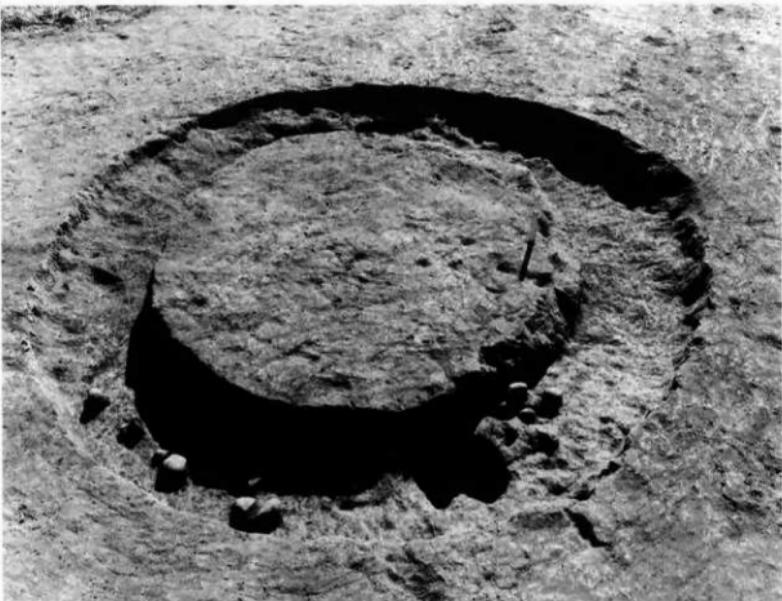
SB125a' 土層断面（北から）



SB125c' 土層断面（南から）



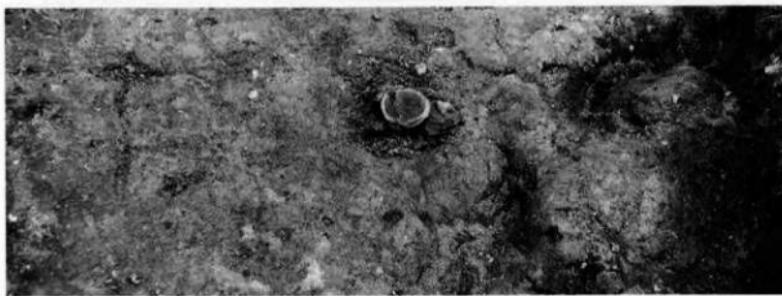
SB125d' 土層断面（南から）



SX005完掘状況（北から）



SX005内ピット土層断面（北から）



SX005ミニチュア土器検出状況（南から）



SX020a-b土層断面（東から）



SX020c-d土層断面（南から）



SX020e-f土層断面（東から）



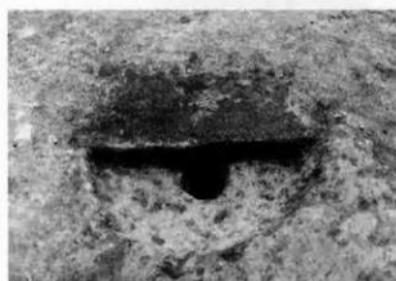
SX020g-h土層断面（南から）



SK072土層断面（西南から）



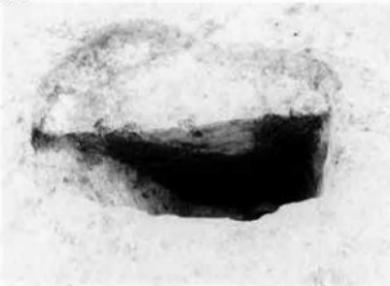
SK090土層断面（東から）



SX084土層断面（東から）



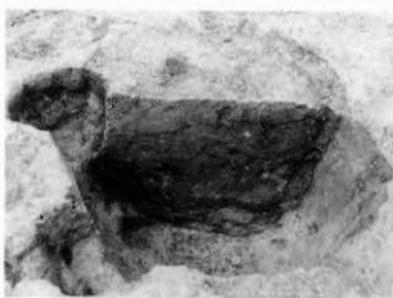
SX094土層断面（南東から）



SX101土層断面（西南から）



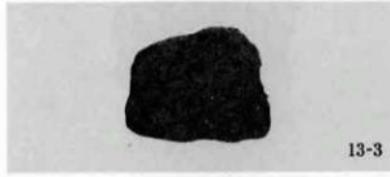
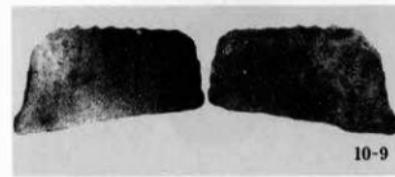
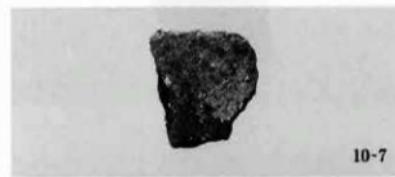
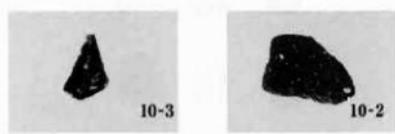
SX116土層断面（北西から）



SX126土層断面（東から）



SX117遺物出土状況（北から）



鶴田東牛ヶ池遺跡第1次調査出土遺物

鶴田東牛ヶ池遺跡第2次調査出土遺物



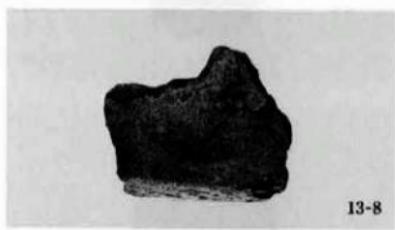
13-5



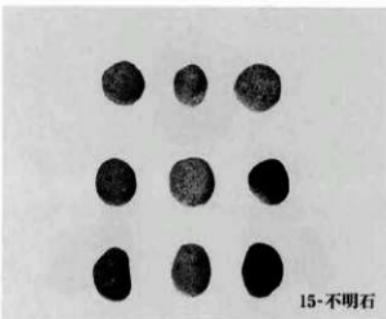
13-6



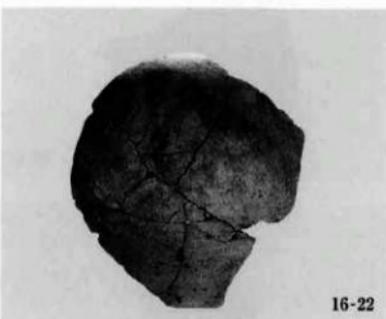
13-7



13-8



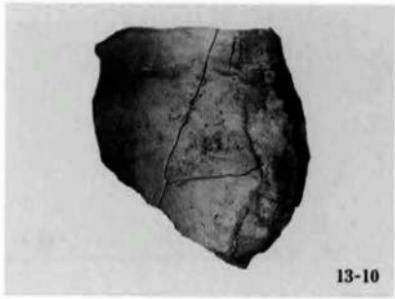
15-不明石



16-22



18-24



13-10



18-25



18-26



18-33



18-27



18-34



18-28



18-35



18-29



18-36



18-30



18-37



18-31



18-38



18-32



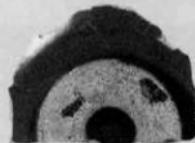
18-39



18-40



18-48



18-41



18-49



18-43



18-44



18-50



18-45



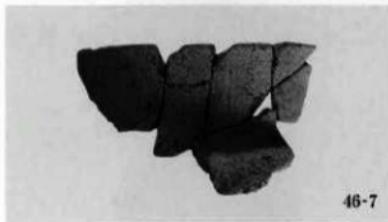
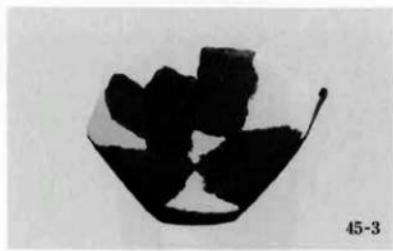
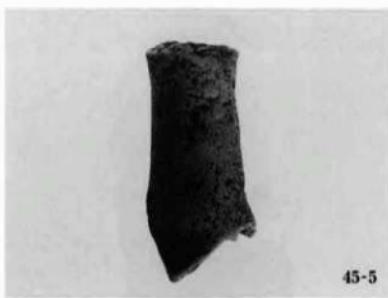
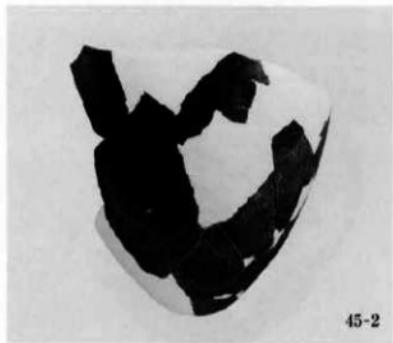
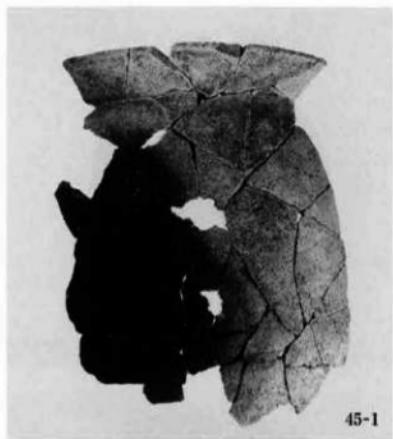
18-51



18-46

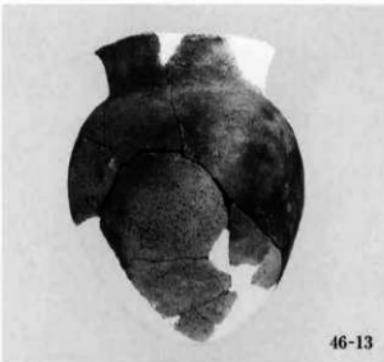


18-47





46-8



46-13



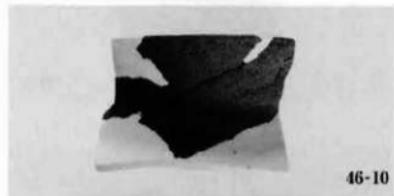
46-9



46-16



46-18



46-10



46-12



47-19



47-20



47-33



47-21



47-34



47-22



48-42



47-27



47-30



48-46



47-31



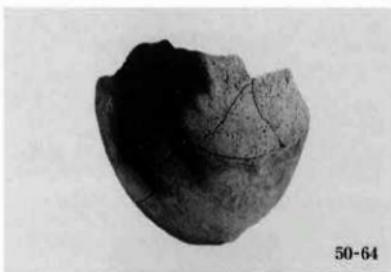
47-32



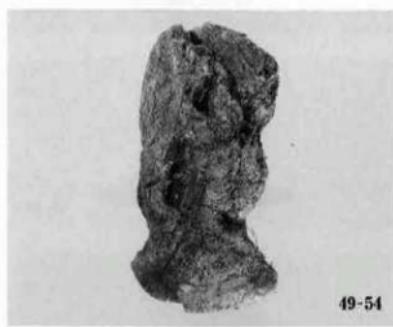
49-52



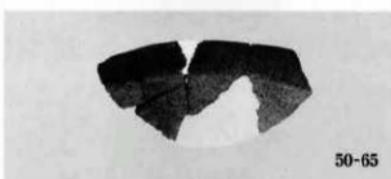
49-53



50-64



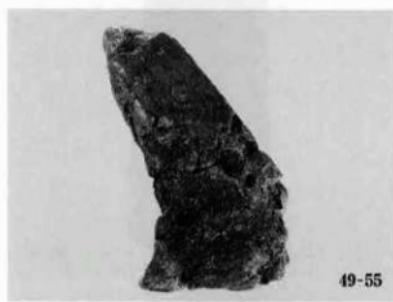
49-54



50-65



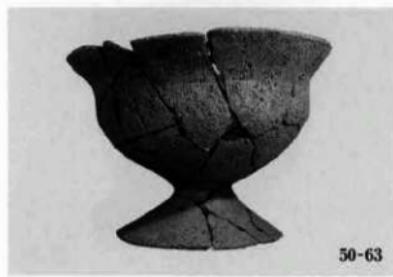
50-66



49-55



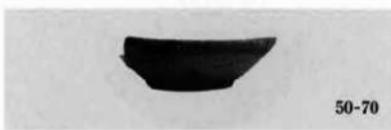
50-67



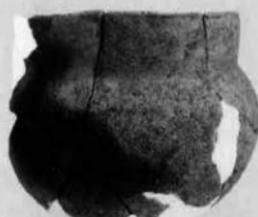
50-63



50-68



50-70



51-74



51-79



51-75



51-80



51-76



51-81



51-77



51-78



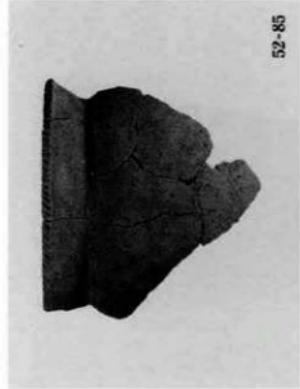
51-82



51-83



51-84



52-85



52-86

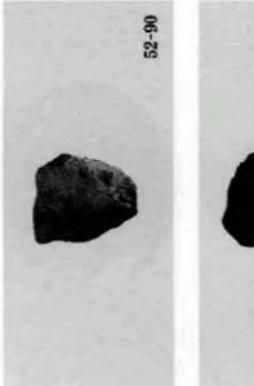
52-87



52-88

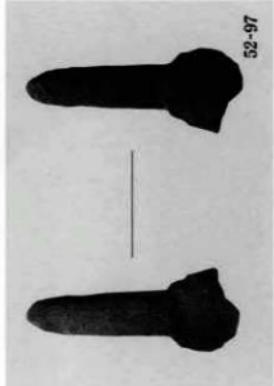


52-89



52-90

52-91



52-92

52-93



52-94



52-95



54-105



52-96



54-106



52-98



54-107



54-102



54-103



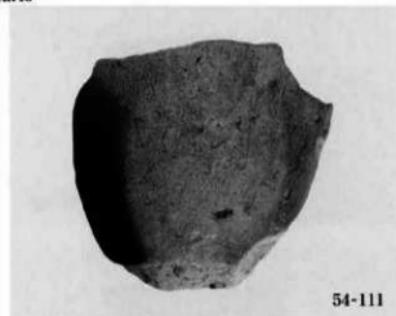
54-108



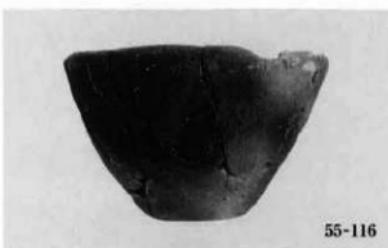
54-104



54-110



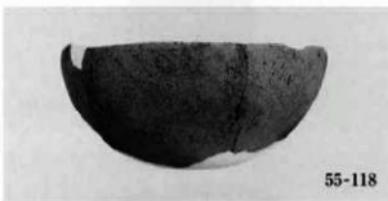
54-111



55-116



54-112



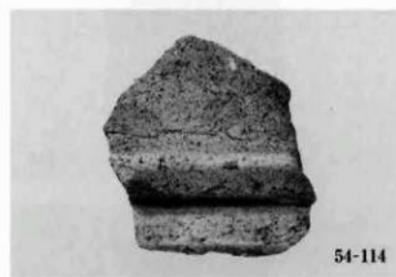
55-118



54-113



55-119



54-114



55-120



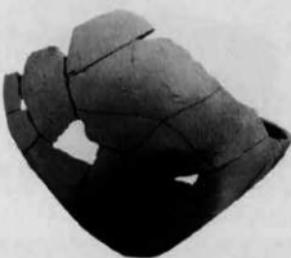
55-115



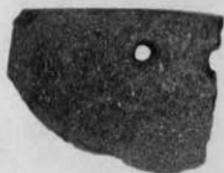
55-123



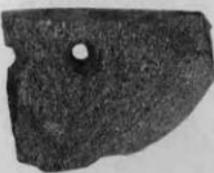
55-124



56-128



55-127



56-129



56-131



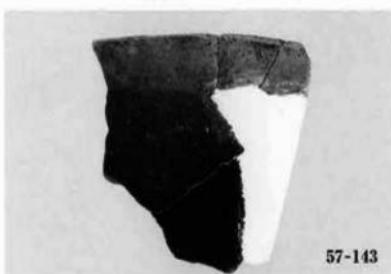
56-132



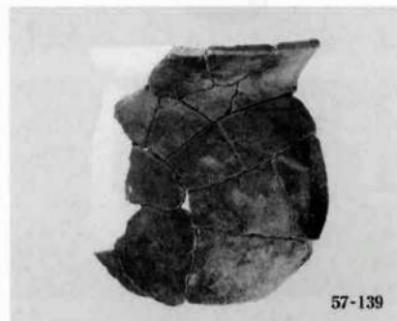
56-133



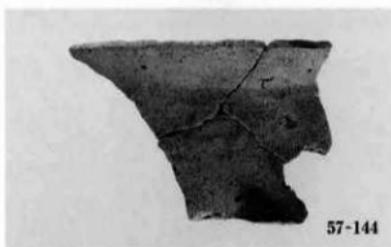
57-138



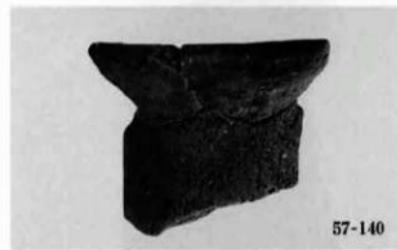
57-143



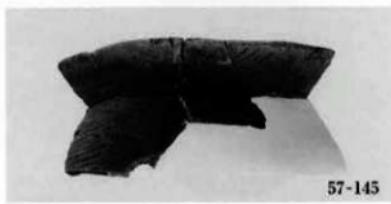
57-139



57-144



57-140



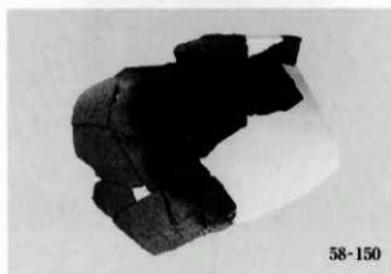
57-145



57-148



57-142



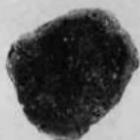
58-150



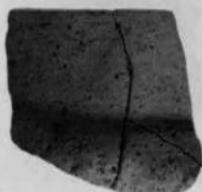
58-152



58-153



58-156



58-158



58-159



58-161



58-162



58-163



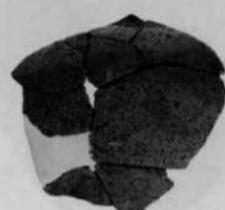
58-164



58-165



58-166



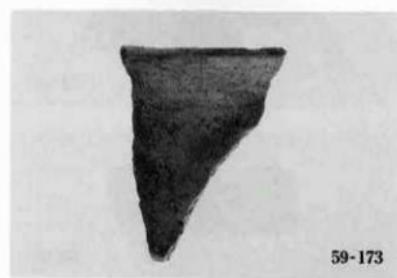
58-168



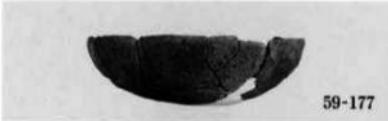
59-170



59-176



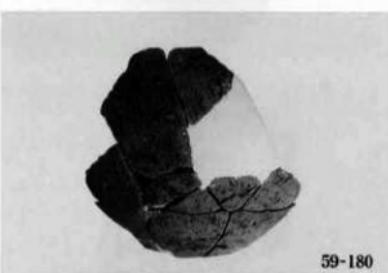
59-173



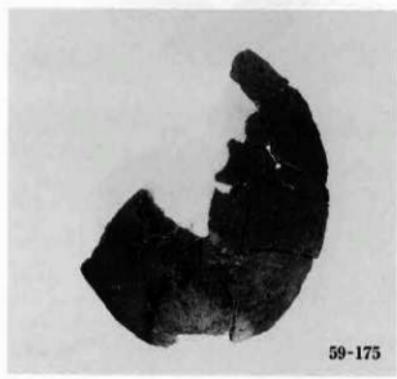
59-177



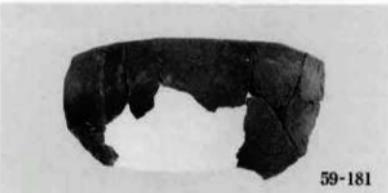
59-174



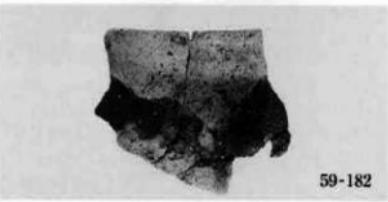
59-180



59-175



59-181



59-182



59-184



60-195



59-185



59-189



59-190



60-193



60-197



60-198



60-199



60-200



60-194



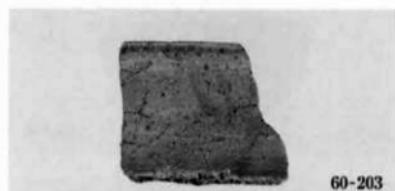
60-201



60-202



60-212



60-203



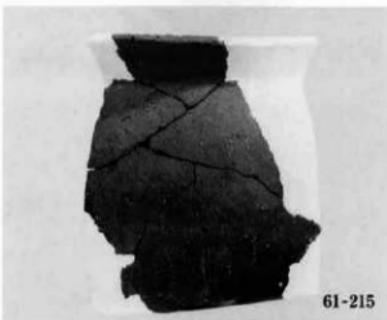
60-214



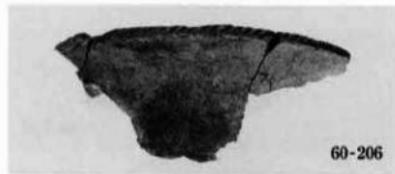
60-204



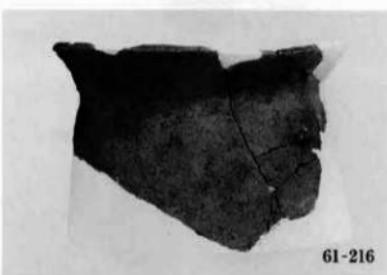
60-205



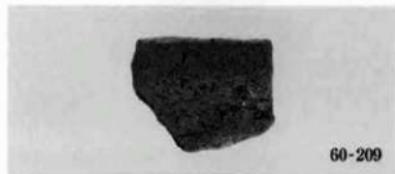
61-215



60-206



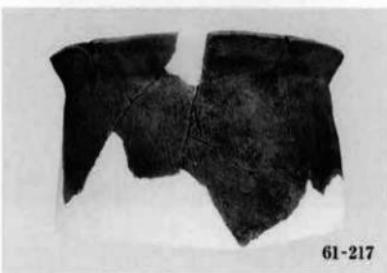
61-216



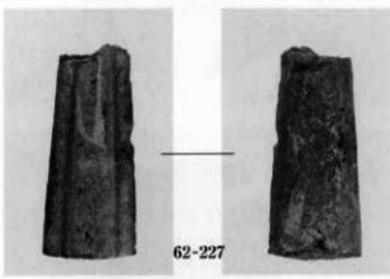
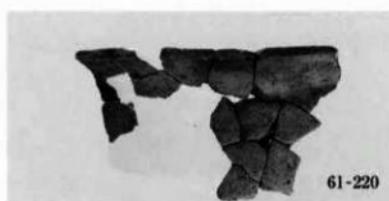
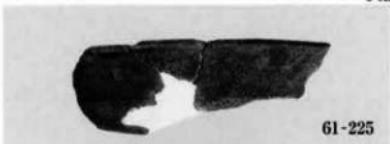
60-209

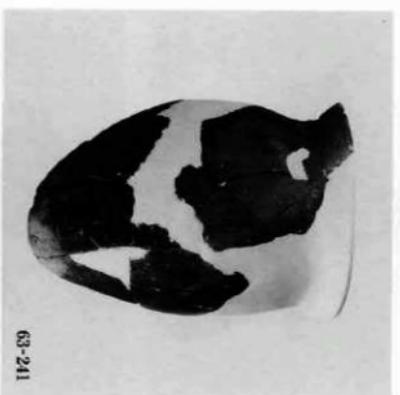


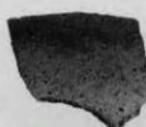
60-211



61-217







63-244



63-245



63-246



64-247



64-250



64-251



64-248



64-252



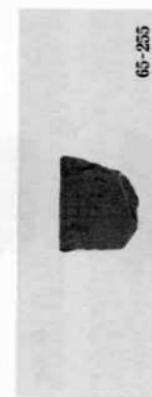
64-249



64-253



65-254



65-255



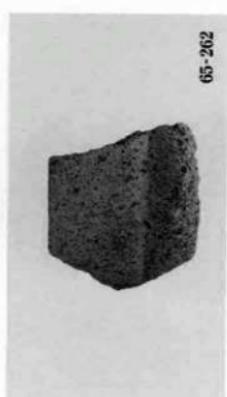
65-256



65-257



65-261



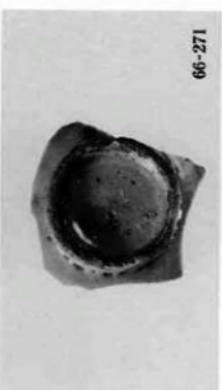
65-262



65-263



65-265



66-271



66-274



66-280



66-275



66-281



66-276



66-283



66-277



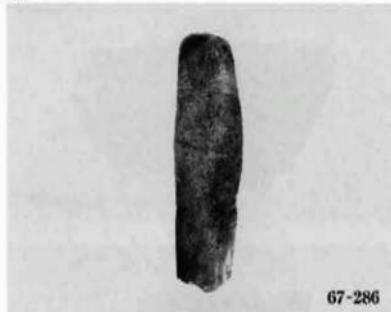
66-284



66-279



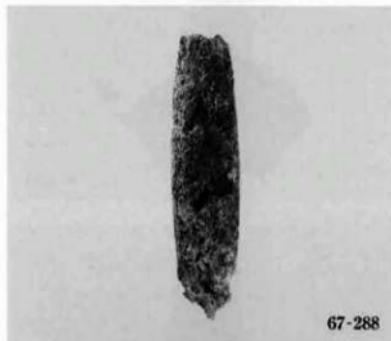
67-285



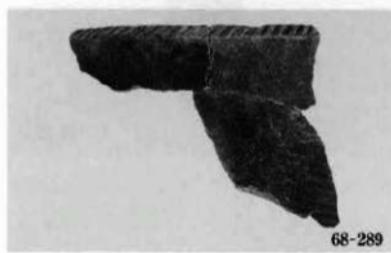
67-286



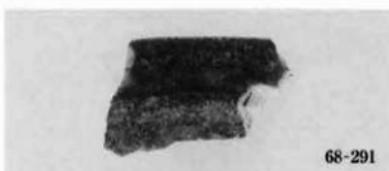
67-287



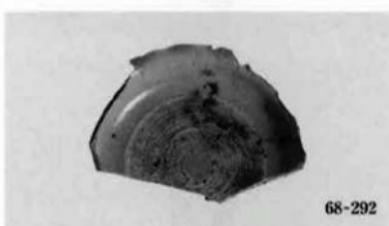
67-288



68-289



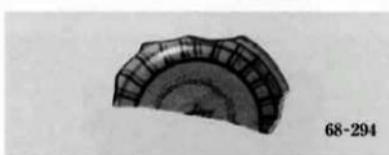
68-291



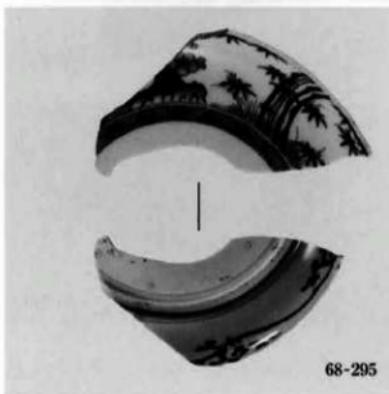
68-292



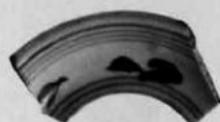
68-293



68-294



68-295



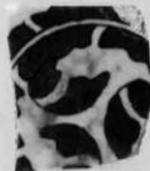
68-296



68-297



68-299



68-300



68-304



68-302



68-306



68-307



68-308



68-309



68-310



69-317



69-318



69-314



69-319



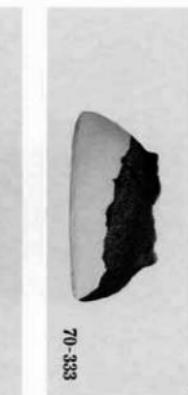
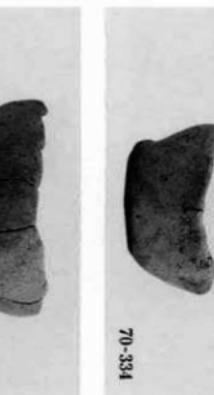
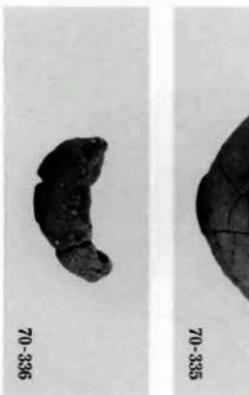
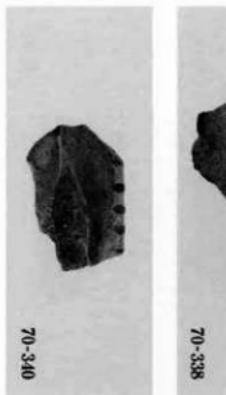
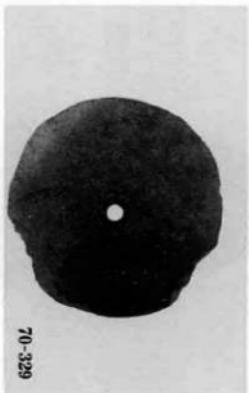
69-315



70-321



70-322





70-342



71-348



70-343



71-350



71-352



70-344



71-353



70-345



71-354



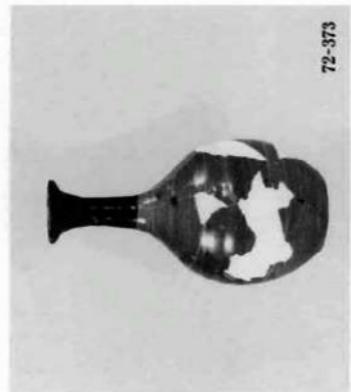
71-347



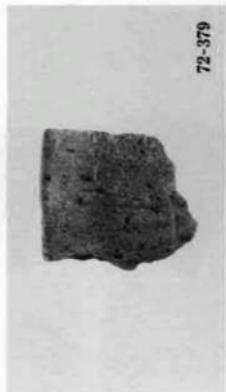
71-355



71-357



72-372



72-379



72-380



71-357



71-358



71-360



71-368



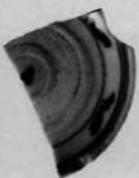
72-371



72-375



72-387



72-386



72-384



72-383



72-382



72-381



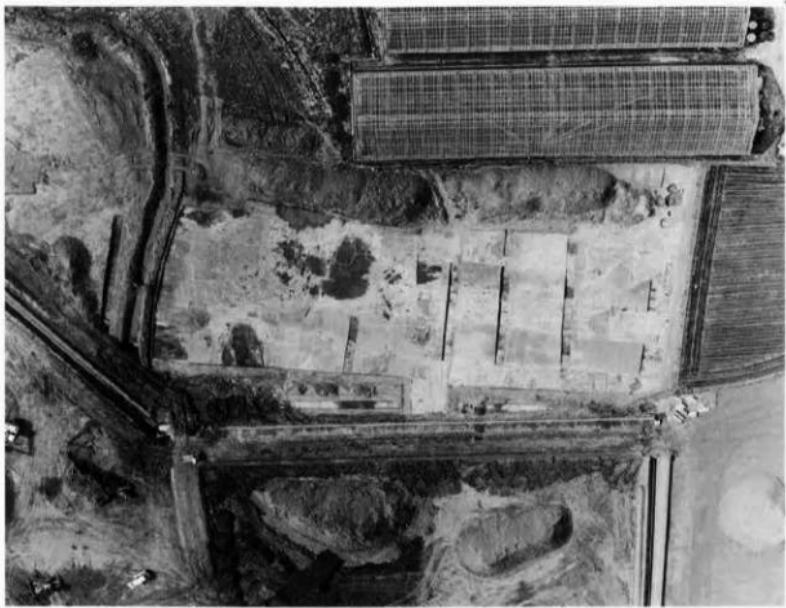
72-391



72-389



72-388



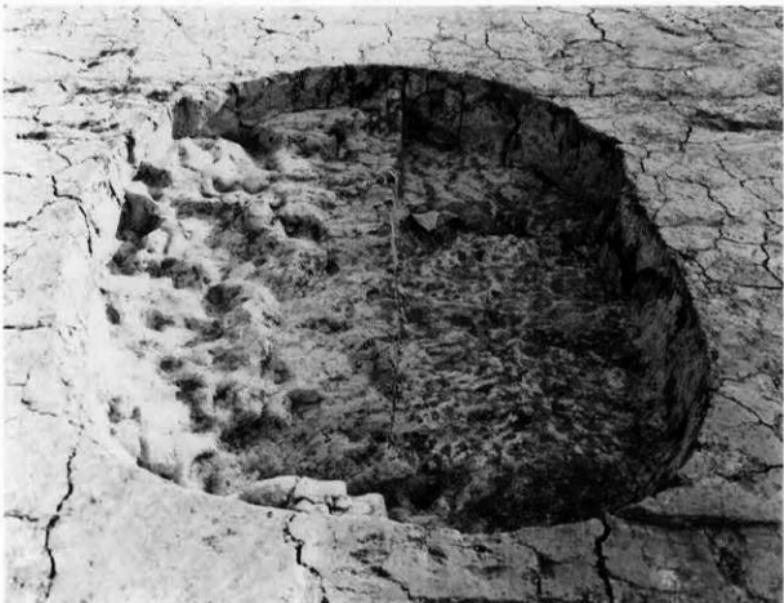
鶴田木屋ノ角遺跡調査区全景（上が西）



鶴田牛ヶ池遺跡（第2次調査）調査区全景（上が西）



SK02 完掘（東から）

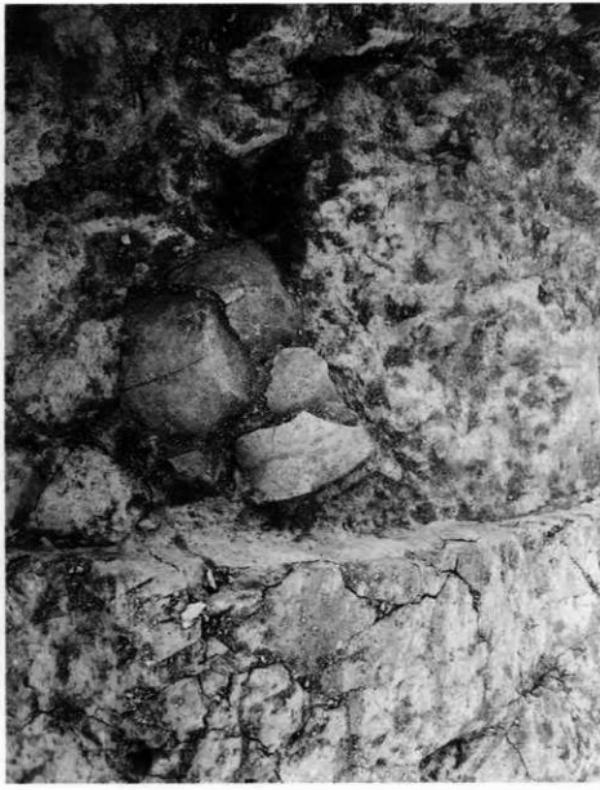


SK02 完掘（北から）

SK03 完掘（南から）

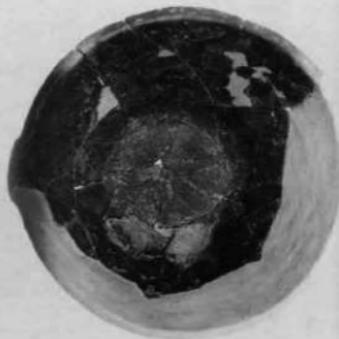


SK02 土器出土状況（南から）

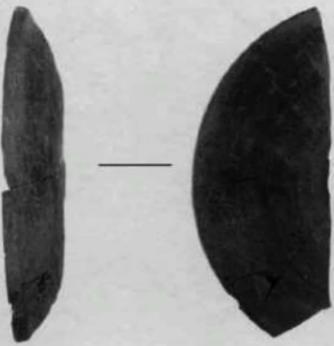




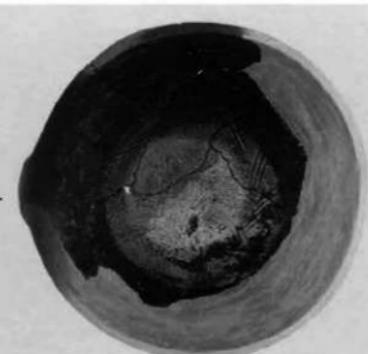
79-5

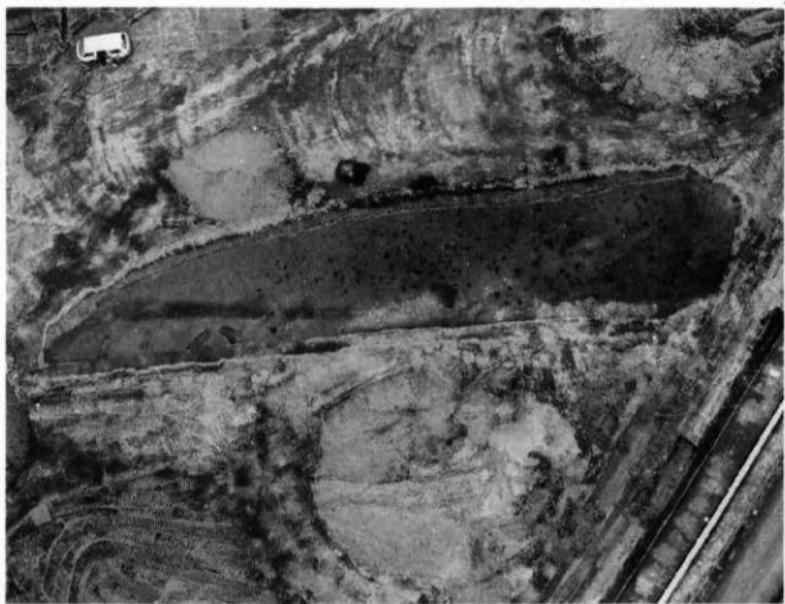


79-3



79-6





鶴田牛ヶ池遺跡（第3次調査）調査地区全景（空中写真：真上から）



鶴田牛ヶ池遺跡（第3次調査）出土遺物



鶴田牛ヶ池遺跡（第4次調査）遠景（空中写真：南から）



鶴田牛ヶ池遺跡（第4次調査）調査区全景（空中写真：真上から）



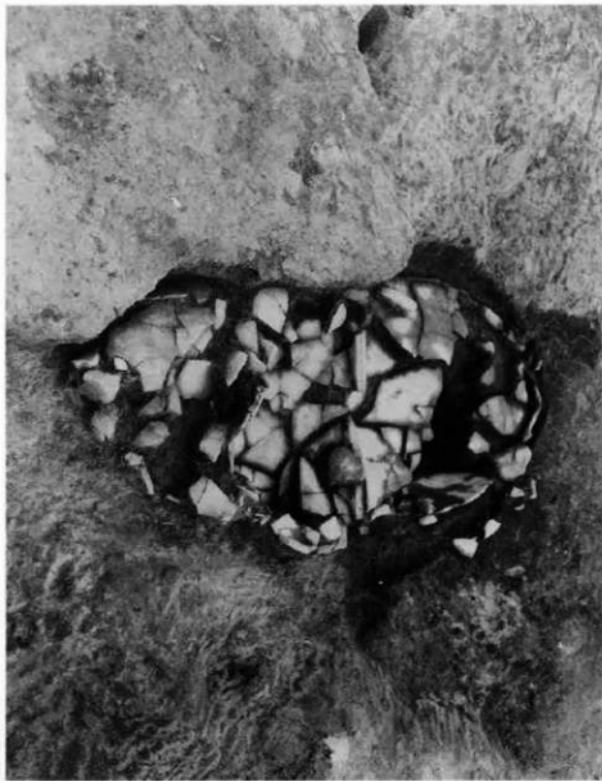
4SI20 床面検出状況（南東から）



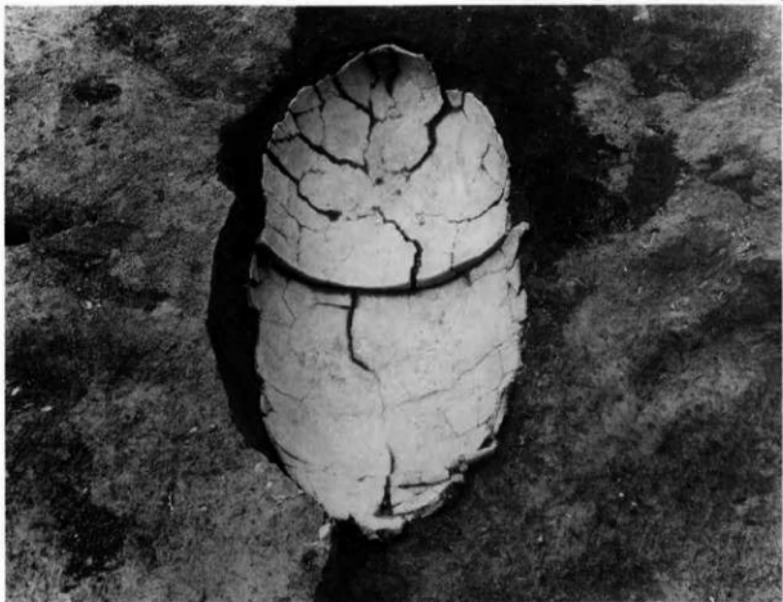
4SI20 完掘（南東から）



4ST10 層内土壌遺物出土状況（南東から）



4ST10 烹炊窯出土状況（東から）



4ST10 瓢棺墓出土状況（東から）



4ST10 完體状況（東から）



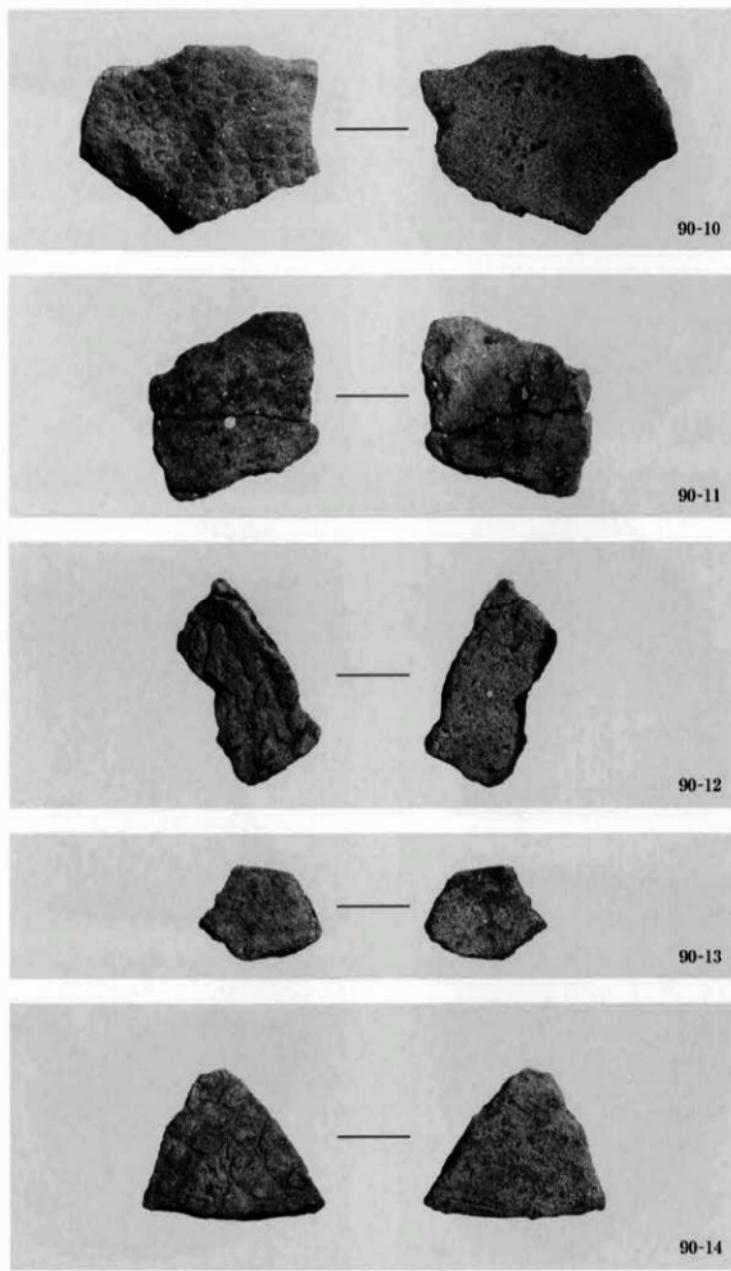
4SK21 完堀状況（南から）



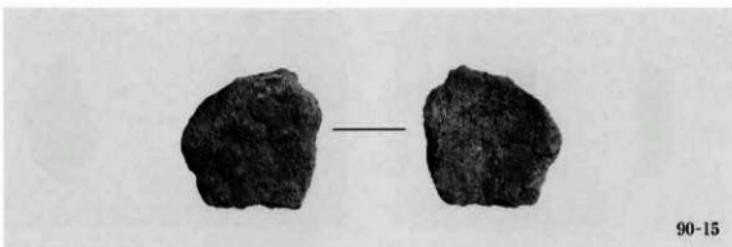
4SK38・60 完堀状況（西から）



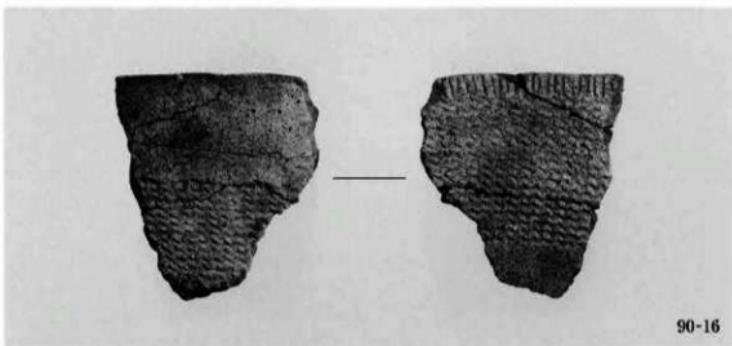
鶴田牛ヶ池遺跡（第4次調査）出土遺物①



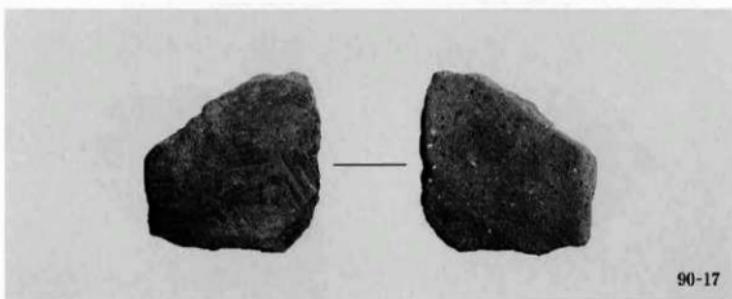
鶴田牛ヶ池遺跡（第4次調査）出土遺物②



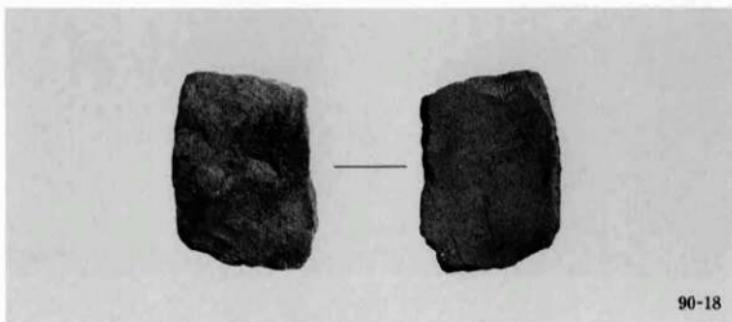
90-15



90-16



90-17



90-18



91-25



91-26



91-27



91-28



91-29

筑後東部地区遺跡群VI

筑後市文化財調査報告書
第36集

平成13年3月31日

発行 築後市教育委員会
筑後市大字山ノ井898

印刷 臨報社写真印刷株式会社
福岡市中央区天神5丁目4番16号城戸ビル3F
TEL 092-712-2241